

569-142



1200501517428

厚又道吹

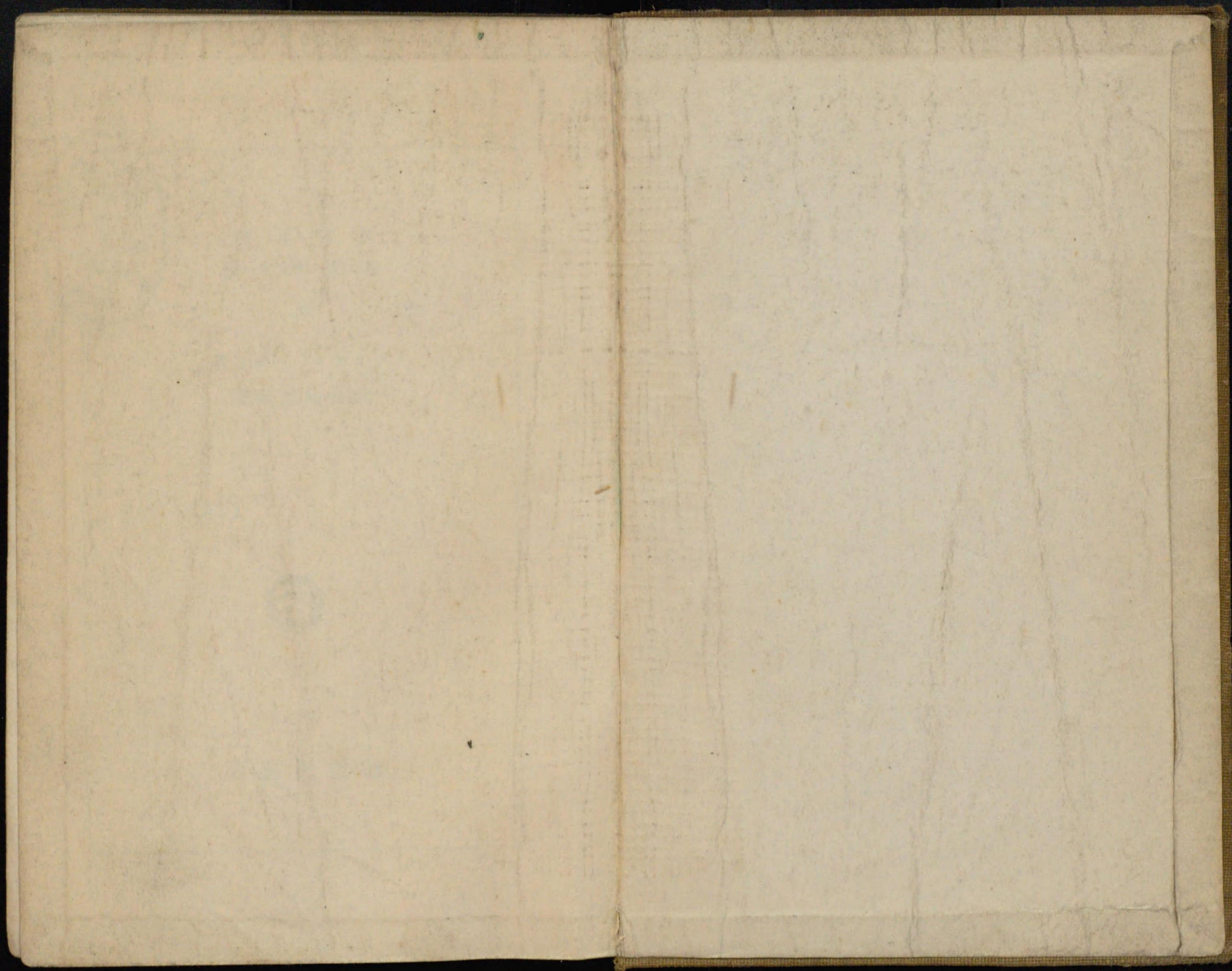
篇一十九第 部二第

ン ニ サ

著フセーバイツルア
譯 庸 想 無 林 武

版出社造致





納本



改 造 文 庫
第 二 部 第 十 九 篇

シ ニ サ

著フセーバイツルア
譯庵想無林武

75



改 造 社 出 版

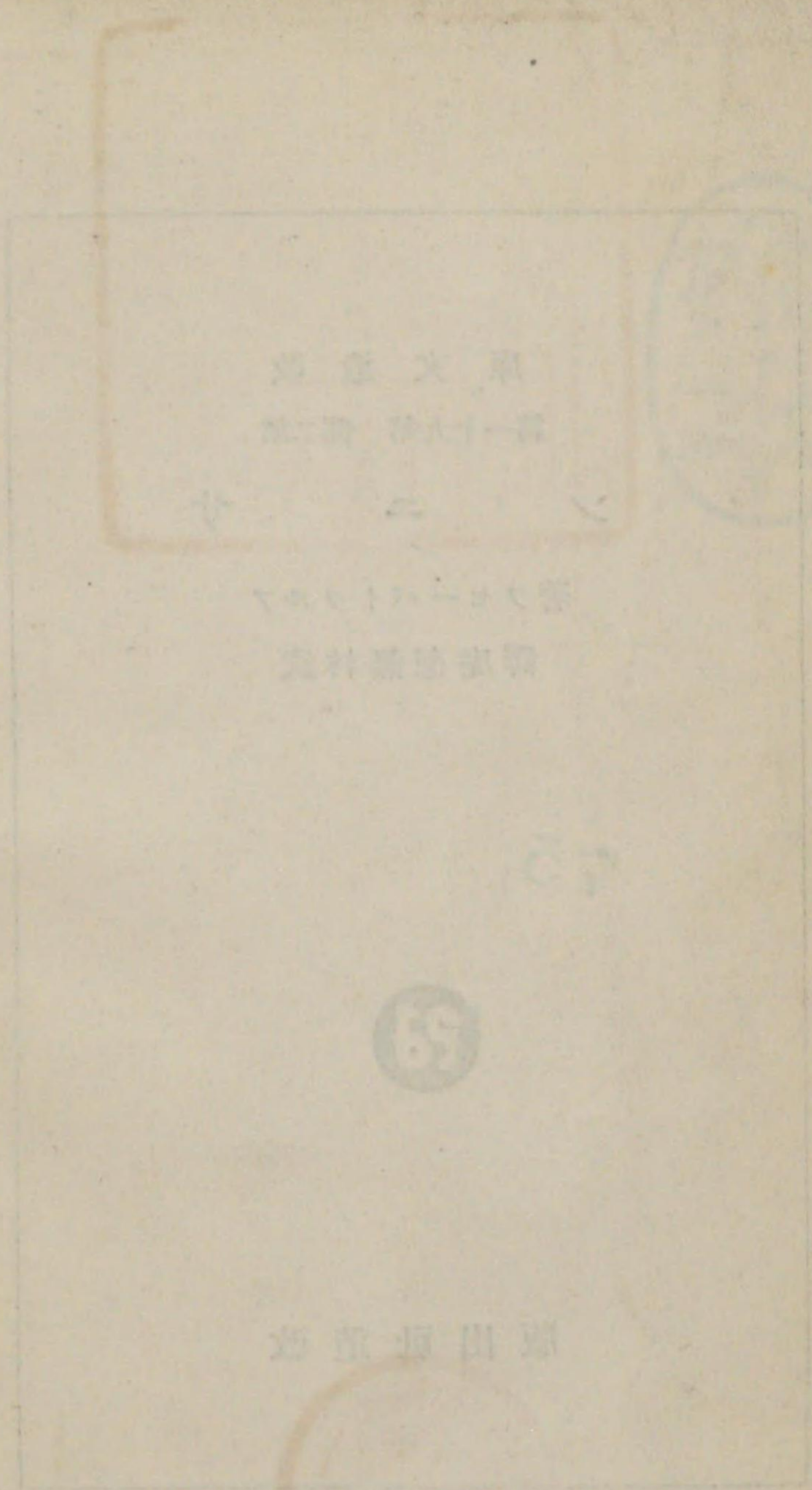


569-142

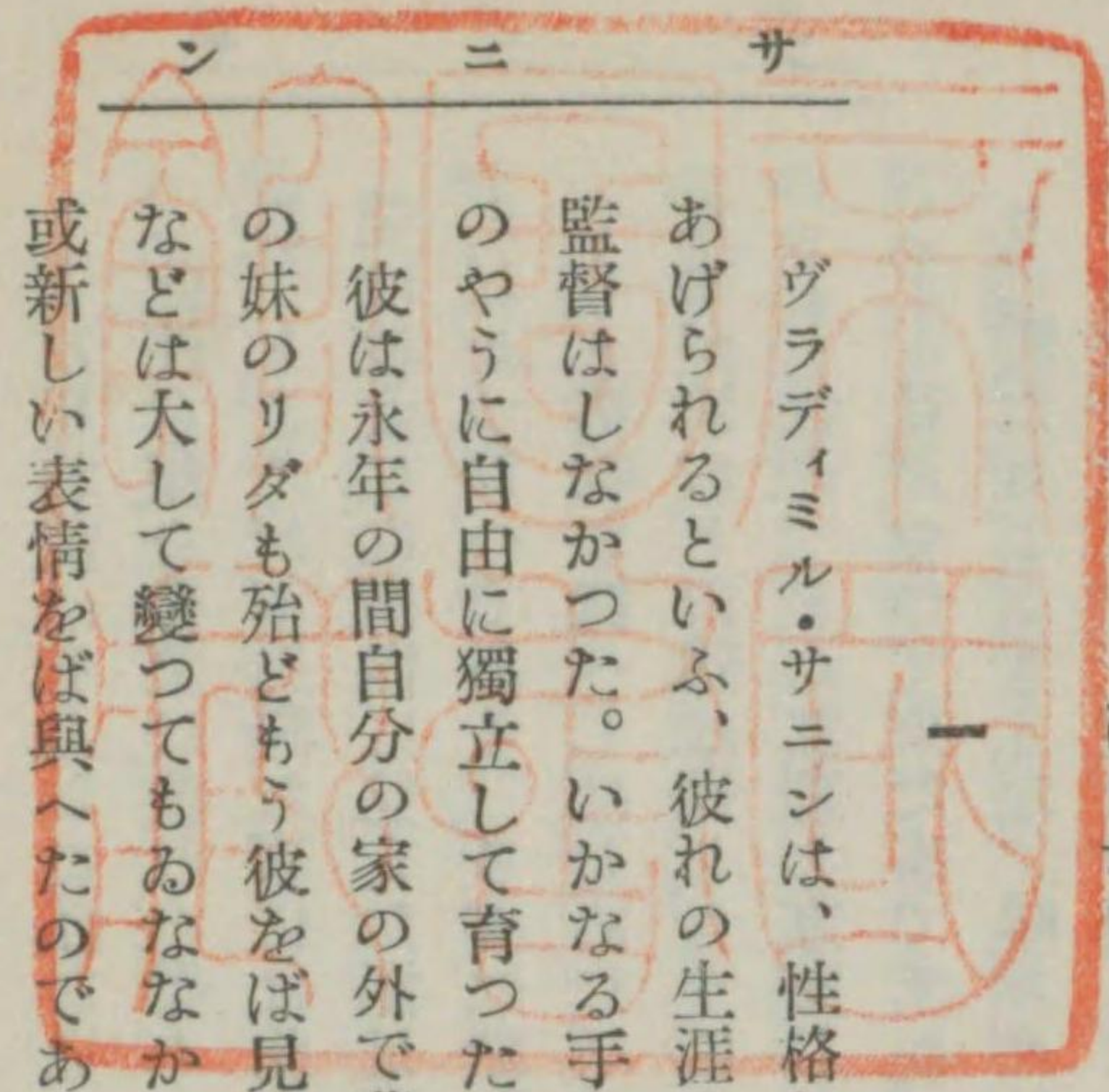
サ

ニ

ン



……我が了られるところは唯是のみ。即神は人
 を正直者ただしきものに造りたまひしに人衆多くの計略てくてを案出かんがへいだ
 ししなり。
 傳道書、七の廿九。



グラディミル・サニンは、性格といふものが、初めて接觸する自然と人間との影響をうけて作りあげられるといふ、彼れの生涯の最も大切な時期をば、両親の家にゐないで過した。何人も彼を監督はしなかつた。いかなる手も彼を陶冶はしなかつた。そして彼れの精神は丁度野中の一本木のやうに自由に獨立して育つた。

彼は永年の間自分の家の外で暮らして了つた。で、彼は立歸つたのであるが、彼れの母親も彼の妹のリダも殆どもう彼をば見知らなかつた。成程、彼の顔立や、彼れの聲音や、又彼れの舉動などは大して變つてもゐななかつたけれど而もまだ見た事もない何物かがあつて、彼れの容貌に或新しい表情をば與へたのである。

夕方近くであつた。到着すると、サニンは恰も五分前に家を出たばかりだと云つた調子で落ちつき拂つて家の中へ這入つた。其高い身長も、其四角な肩も其茶褐色の頭髮も、又其唇の隅が僅かばかり小馬鹿にしたやうな心地よさを見せた其顔の靜かな表情も、一向疲勞や感動の痕跡を示さなかつた。彼を迎へたリダや母親の大騒ぎも自から靜まつた。と、彼が物をたべたりお茶をのんだ

りしてゐる間、妹は彼と差向ひに腰をかけて彼から目を離さなかつた。感情の稍高い凡ての若い娘達が留守中の兄弟を戀慕ふやうに、彼女は彼に焦れてゐた。リダはいつもヴラディミルを偉丈夫の一人として考へた。で、其考はいろ／＼な書物によつて造りあげられたものであるが、彼女は彼女の生涯のうちから世に理解せられざる大精神の悲劇的の争闘や苦悶や孤獨をば見たいと思つた。

——なぜお前はそんなに私を見るんだい。と、サニンは微笑しながら彼女に訊いた。

此注意深き微笑は彼れの柔しい眼の穿つやうな光と結びついて、彼の容貌の不斷の表情を拵へた。ところが不思議な事には此調子のいゝ思ひやりのある微笑がリダには面白くなかつた。此微笑は彼女には傲慢に見えた満足らしく見えた、そして少しも苦悶や争闘に耐へて来たやうには見えなかつたのである。リダは黙つて了つた。物思はし氣な顔をして、ツと目を外向けながらぼんやりと書物を翫へしはじめた。

食事が済むと母親は懐しさうにサニンの頭髪を撫でて云つた。

——ねえ、どんな暮し方をして来たのか、妾達にお話しよ、お前が世の中でして来た事をさ。

——私がやつて来た事ですか。相變らずニコ／＼しながらサニンは受けた。食べたり、飲んだり、寝たり……さうな、時々仕事をしたり、又時々は何にもしないであたりね。

最初彼は自分の事など話したくもなさうであつたが、彼れの母親がさまざまな問をかけたので、今度は反對に進んで話す氣になつたらしかつた。でも、自分の談が人に印象を興へようが興へまいが更に頓着はないといふ風ではあつた。彼は物柔しくもあり、又親しみ深くもあつた。けれ

ども彼れの舉動には肉親の間柄になくてならぬ筈の切つても切れぬ情愛といふものが全く缺けてゐた。で、其物柔しさも、又其親しみ深さも丁度燈火の光輝が凡ゆる物の上へ平等に散り擴がるやうに彼れの軀から蒸發してゆくやうに思はれた。

彼等は庭の露臺へ出て、階段の上に腰を卸した。リダは少し下の方へ離れて座を占め、黙つて兄のいふ事に聴耳を立てゝゐたが、一種の寒氣がゾツと彼女の身内に浸透つた。感じ易い其女性の本能が彼女の兄は自分の想像してゐたやうな兄ではなかつたといふ事をばさそくに見てとつたのである。そして彼女は恰も或外國人の前にでもゐるやうな無氣味さを覺えた。

黄昏が来た。靜かな影が彼のまはりに落ちた。サニンは紙巻烟草に火を點けた。と、其烟草の軽い匂と庭の薰香とが結合つた。

サニンは物語つた、いかに人生が凡ゆる方面へ彼を小突きまはしたか、いかに屢々彼は飢餓と孤獨の放浪とに遭遇したか、いかに彼は政治上の争闘に浮身を窺したか、又其政争が煩さくてたまらなくなつた時、いかに彼はそれを抛棄したか。

身動きもせずじつとき、澄してゐたリダの姿には、恰も夏の夕暮に見る凡ての艶女のやゝ、異常な美しさがあつた。

きけばきくほど、火焰のやうに考へられてゐた其生活が、實は單純な又平凡なものであつた、と彼女には思はれて来た。そこにはいかなる事がどういふ風に動いてゐたか、リダにはそれが捉まへられなかつた。其談話のうち一切の事は、卑俗でもあり、退屈でもあり、又全くきまりき

つてもゐた。と彼女には思はれたのである。そんなやうな調子で彼はすきな處をすきな真似をして、働いたり怠けたり、氣随氣儘に渡り歩いた。彼は飲む事がすきなやうであつた、又澤山の女に接したやうでもあつた。けれどもリダの空想的な内心が熱望してやまなかつた、かの暗い恐しい運命の影などは、一向其生活のうちへ射して來なかつた。彼は人生についていかなる一般的の觀想をも持つてゐなかつた。彼は何人をも憎まなかつた。又何人に對しても苦しまなかつた。

自から溢れ出た彼れの表情はリダにはたゞ下らなく見えた。そんな風にサニンは其時々、事をば諄々と語りつづけたが、彼れの苦んだ事と云へば、彼は檻樓を下げてゐたので、其衣服などを自分の手で繕はなければならなかつたといふ位なものであつた。

——すると、貴兄は裁縫を御存じなのね、と、リダは思はずいやな顔をして輕蔑をしたやうな調子で訊いた。つまり裁縫をするなどといふ事は英雄らしくもなく又男らしくもないやうに考へたからである。

——以前は知らなかつたさ。だが、必要に迫られて覺えた譯だね。妹の心持を察して、サニンはニコ／＼しながら答へた。

若い娘は軽く肩を聳やかして黙つた。そして庭のうちを眺めやつた。彼女は灰色に冷たい空の下で、或夢をばうつら／＼と日に照らされながら、朝、目がさめる時のやうな心持になつた。

母親も亦或悲しい感じを覺えた。自分の息子が社會の中に自分の希望してゐたやうな名譽ある地位を占めてゐなかつたといふ考が、殊に彼女には情なかつた。彼女は彼に云ひはじめた、彼が

今迄やつて來たやうな生活を續けてゆく事は出来るものでもないから、もつと準繩に締め括りをつけてゆかなければならないなどと。彼女は最初息子の感情を害ねはしまいかと心配して、用心しいしい云つてゐたのであるが、息子の方では一向心にもとめない様子なので、終には腹が立つて來た。で、何か自分の息子が擲擲面にわざとそんな態度でもとつてゐるやうに思つて、年寄の女には有勝な愚かしい怒にかられながら、彼女は頑固に繰返し／＼云つた。が、サニンは別に驚きもせず又腹なども立てず、人のいふ事が不案内らしい顔つきをして、媚びるやうな、氣のぬけたやうな眼を、母親の上へ注ぎながら黙つてゐた。たゞ、

——だが、お前はこれからどうして暮らすおつもりだい？

と、いふ問に對して、彼は答へた。

——どうにでもしてね。

此簡単な言葉は、彼れの母親にとつては何の値打もなからうが、彼にとつては確乎とした、遠大な、或深い意味があつた、それは彼れの靜かな力の籠つた聲のうちに、又眉をも動かさぬ、朗らかな眼のうちに、あり／＼と讀まれた。

マリア、イヴノヅナは嘆息したが、鳥渡間を置いて、悲しさうに云ひ足した。

——まア、それはお前の事さ、お前はもう小兒でもないからね……お前達ね、お庭で散歩でもするおつもりなら、今が一番いゝ頃だよ。

——さうな、リダ、お出で。そして私に庭を見せておくれ。と、サニンは彼れの妹に云つた。

私はもう庭を忘れて了つた。

リダは自分の空想から我に返つて、ホツと溜息をついた。そして立上つた。二人は押並んで小徑を通りぬけ、もう暗くなつた、濕つばい緑葉の奥の方へ歩きはじめた。

サニンの家は此都會の重なる市街にあつたが、都會が小さいので、此家の庭は川のところまで延び、その後ろはすぐ圃地になつてゐた。此家は昔し貴族の住居であつたが、頽廢した物思はしげな古い圓柱と、素晴らしい露臺とがついてゐた。輪伐樹木の繁つた大きな庭園は、恰も地上へ落ちかゝる濃緑の雲のやうに、其暗塊をばくつきりと浮出さしてゐた。夕になると此庭は薄氣味わるくなつた。愁はしげな昔しの精魂があつて、それが厚い叢みや此古家の埃だらけな穀倉などのうちへチロ／＼と立迷つてゐるやうでもあつた。

上層はさまざまの大きな暗い座敷で出来上つてゐた。庭園中に唯一條の狭い小徑があるばかりだが、枯枝で蔽はれた其小徑には、蛙の群が集つて、人の足に蹂躪られた。現今の平和な慎ましやかな家族生活は、此の住居の他の一隅で營まれてゐたのである。それは此家の側のかしこであつた。そこには地上にまき散らされた黄ろい砂がギラ／＼と煌めき、その繁つた花壇には五色の草花が燦爛と咲亂れてゐた。又綠色に塗つた木製の卓子が花と向ひあつて置かれた。夏、天氣のいゝ時、人々はそこでお茶をのんだ。で、其時其小さな一隅は單純で且つ平穩な生活に生々としてゐたが、其生活と、此宏大な、人氣のない、避くべからざる荒廢に委した邸宅とは、著しい對照をなしてゐた。

彼等の後ろへ緑葉の蔭に母家が見えなくなり、サニンとリダの周圍には、たゞジツと押黙つて恰も生ある物が冥想でもしてゐるやうな、老木ばかりが立つてゐた時、サニンは不意に妹の軀を抱きかゝへた。そして撫はるやうな、又脅かすやうな、一種異様な聲で云つた。

——お前は實に美しい娘になつたねえ。一番初めにお前に愛される男は全く幸福だ……鐵のやうに硬い逞しい腕に締めつけられたので、火のやうな流れがリザのなよやかな肉體に注ぎ込まれた。彼女は狼狽してわな／＼と震へた。そして恰も目に見えぬ猛獸でも近寄つたやうな心持になつて、我知らず後退りした。

二人は川のところまで行つた。と、濕つばい感じが犇々身に迫つた。光つた蘆が物思はしげにゆら／＼と水面を撫でた。對岸には圃地が遠く暗くぼのぼのと展開してゐた。空は最初の星の物柔らかな光に鏤められて穏やかに深く見えた……

サニンはリダから離れたが、兩手で枯木の幹を引摺んで、ボキリと音を立ててそれを折りざま、川の中へ投げた。水面には波紋が八方へ擴がつて、やがて消えた。蘆は傾いた、恰も親族の一人へ對する如くに、サニンへ挨拶したやうであつた。

二

六時頃であつた。太陽はまだ炎ゆるやうだけれど、緑がかつた軟い影は既^はや庭に上つた。大氣は光と静けさと暑さとに滲みとほつた。

マリア・イヴノヅナはお菓子を製へてゐた。苺や沸る砂糖の旨さうな強い匂が菩提樹の繁茂へ散つた。

サニンは朝から花壇にかゝつて、塵埃や日光の激しさに凋れた草花を甦らして見ようとしてゐた。

——先へ雑草を抜いて了つたがいゝぢやないか。マリア・イヴノヅナな折々炭火のチラ／＼する青い煙を透してサニンの様子を見てゐたが、さう云つて注意した。グルンカにお云ひつけない。あの娘が抜いてくれるよ。

サニンは汗に塗れた愉快らしい顔を母の方へあげて、

——なぜ抜くのです。彼は額へ糊着いた髪の毛をかきあげながら、こんな雑草でも皆それ／＼思ふ儘に生長するのですよ……私は緑いものは皆すきだ。

——をかしな事をいふぢやないか。やさしく肩を聳かしながら母は答へた。さうは答へたが、サニンの言葉は母を喜ばしたのである。

——をかしなのは貴君方です。とサニンはキツパリ答へた。彼は手を洗ひに建物の方へゆき、それから柳の枝で編んだ眩懸椅子へ樂々納まるべく卓子の傍へ歸つた。

彼は自ら幸福を感じた。すが／＼しく感じた。愉快に感じた。木々の緑、太陽、青空、さういふものが丁度よなき幸運のうち花とさくやうな光彩をば彼の魂に沁み込ませた。

耳を聳するやうな喧噪な大都會、その中のうき／＼した忙しい生活、彼にはそれが厭はしかつ

た。今や彼のぐるりを支配するものはたゞ太陽と自由とのみであつた。彼はもう未來の事など考へなかつた。自分に興へられるだけの生命をたゞうくるにまかしてゐた。

サニンは眼をしばたゝいた。心から喜ばしさうな剛健な筋骨を伸ばしたり縮めたりした。

霧を帯びて新鮮なそよ風が吹いた。庭は一面にやさしく嘆聲を漏らしてゐるやうであつた。雀の群がをちこちで囀つた。彼等の小さな生活をば人間にはわからぬ言葉で、お互にひそ／＼と口早に語合つた。それを雑色のミルといふ獵犬が舌を紅く垂れ聴耳を引立て、草原の中できゝすましてゐた。上の方で木々の葉がさゝやいた。其葉の圓い影が小徑へつゞく小石原の上を音もなく揺めいた。

マリア・イヴノヅナは息子の泰悠さ加減が悲しく腹立たしかつた。實際母親は他の子供等と同様にサニンを愛してゐたのだ。自分の自尊心を傷けられてもそのまゝ満足して、息子の人生に對する意見とそれから、其言葉の値打を認めてやらなければならなかつたといふのは、全く息子を愛してゐたからであつた。母は自分の今迄の長い生涯をば、ちやうど砂を掘る蟻のやうに、家庭の繁昌といふ脆弱な建物を組立てる爲にのみ用ゐて來た。此長い單調な建造が兵營や病院見たやうに最下等の小煉瓦でこしらへられてあると同様、母親の生涯も亦無能な建築師たる自分自身の爲に日々の材料として組立てらるゝ些細な心配事で出來上つてゐた。其無數の心配事は母親を窮屈がらした。イラ／＼させた。時には戦慄までさせた。さうして常におど／＼してばかり暮らした。さうして暮らすより外には暮らしやうがないのだと母親は考へてゐた。

——ねえ、いつものやうに晩くなるだらうかしら。お菓子の料理に餘念のない風をしながら、むツとした口吻で、不意と母親が訊いた。

——晩くなる？ どういふわけで。と云つて、サニンは噓した。

マリア・イヴノヅナにはサニンがたゞ怒らせる爲にわざと噓をしたやうに思はれた。さう思ふのは思ふ方が無理には相違ないが、母親は氣に觸つた。

——家は實に可い。夢見るやうにサニンは呟いた。

——悪くもなからうさ。愠として見せるにはい、折だと思つて、マリア・イヴノヅナは冷淡に答へた。自分の息子が自分の家や庭を讃めるのをきいてゐるのは、母親にとつては嬉しいものであつた。その家や庭はちやうど自分には傍に置いて可愛がつた犬猫ほどに思はれるのである。

サニンはそれと知つて、そこで身を容れていふには、

——母親達が何だかだと些細い事くだらないを云つて、私をうるさがらせなかつたら、まだもつと可いと思ふでせうよ。

こんな事を云つても、其聲がいかにも物靜であつたから、感情を害する筈の文句の意味を打消して餘りあつた。それゆゑマリア・イヴノヅナは笑つて然るべきか怒るべきか、實際わからなかつた。

——妾が見るところではね……母は鬱陶しさうに云つた。お前はね、いつもあまり丈夫ではなかつたけれど、今では……

——今では？ とサニンは何か非常に面白い事がきかれさうに豫想でもしてゐるらしく、氣輕

にうけた。

——今ではね……すつと立派な男振になつたよ。母親は匙を揺しつゝ、突慥食に云ひ了つた。

——ほう、それで安心した。とサニンはほゝゑんだが、

やア、ノギゴヅが來たな。と一寸間を置いて云ひ足した。

と、丁度、母家から丈の高いブロードの好男子が出て來た。やゝ肥つてはゐるが、かなり儂かやんだ胴に密着せる赤絹のロシヤ風の襯衣が、日光を受けてテラ／＼と反射した。さうして此新參者の碧い眼はポーツとして素直であつた。

——貴君方は間斷なし云合ひばかりしてゐるんですね。優しく可愛らしい聲で彼は遠くから云つた。一體、何事なんですか。

——なに僕の鼻が希臘風になつて、大層立派になつた、と母が氣がついてくれたわけさ。だから僕はさういふ風に鼻をこしらへて下さつた神様に感謝してゐる始末なんだ。

彼は自分の鼻を示せて、ニツコリしながら、ノギゴヅの大きな肥つた掌を握つた。

——まだ何か云つてるよ、とマリア・イヴノヅナが腹を立て、叫んだ。

ノギゴヅはから／＼と笑つた。と其やさしい徹る聲が愉快らしく綠蔭の中に反響した。どうしても氣の善いシンミリした誰かゝその邊で彼と喜びを共にしてゐるやうにきこえた。

——なにサニン君の心は僕にはよく分つてゐますよ……人間といふものはいつでも自分の幸運には氣が氣ぢやないものですからな。

—あれだ。とサニンはをかしく體裁ていざいのわるいやうな様子で云つた。
 —然し、それは君にはさうあるべき筈ですよ。
 —や、どうも、とサニンは更に叫んだ。母と君とがさう共謀いゝになられちや僕は遁出すより仕方がない。

いゝえ、妾が引退る事にしませうよ。

マリア・イヴノヅナは急に厭な顔して、いかにも面白くなさうに云つた。そこで火の中から手のついた菓子鍋を曳出し、傍目もふらず母家の方へ行つた。

草原にねてゐた獵犬はピヨイと立上り、聽耳を立て、母家の方を見たが、やがて鼻面を前肢の上へ摩りつけて、仔細らしく母家を窺ひ、さて庭の或方面を指して、會得のびとみ顔に馳けて行つた。

—君は巻煙草を持つてるかね、とサニンは母親が立去つたので、甚だ満足らしく訊いた。ノ半コヅは無性な巨きな軀を大儀らしく伸ばして、巻煙草入を出して。

—母親を揶揄つたりして、君はいかんよ、彼はやさしくサニンを叱つた、年寄ぢやないかね。

—僕が母を揶揄つた？ どういふ風に。

—あれだ……

—「あれだ」とは何だい……母親の方から何だかだと云ひかゝるのだ。僕はね、君、僕は誰に對しても何事も要求しないのだ。そして誰にもかまはれたくないのだ。たゞソツとして置い

てもらひたいのだよ。

二人は黙つた。

—ところで、君はどうだね、ドクトル。

サニンは煙草の煙が頭の上でゆらくと妙な形になるのをジツと見やりながら、と訊いた。
 多分、他の事を考へてゐたのであらう、ノ半コヅは頓にも答へなかつた。

—な！ さ！ け！ な！ い！ と彼は歌でも唱ふやうに句切りつゝ唸いた。

—どう情ないのさ。

—どうツて……さうさ……一體にかう、情けないのだ。何もかも厭なのだ。この小つばけな町が實にたまらないのだ。一口にいふと、何をしたい、かわからないのだよ。

—何をしたい、かわからない？ 君がか？ 一刻も休む事が出来ぬと云つて呟こぼしてゐた君がかい？

—僕のいふのは其事ぢやない……人間は永遠に療治ばかりしてゐる事は出来ない……療治ばかり……人生には又別な生活がある。

—そして、其別な生活をやつてゆくについて、どういふ妨げがあるといふのだい。

—いや、然しそれは複雑な問題だよ。

—複雑だつて？ どうしてさうなのだ。君は若いぢやないか……美丈夫ぢやないか。壯健ぢやないか……

—それはさうだが、君、僕はさういふものに對して、それだけで満足する事が出来ないのだよ。ノギコヴはやさしく皮肉を云ひながら答へた。

何だつて？ 僕ならばそれだけありや充分だと思ふよ、サニンはニッコリした。

—僕は考が異ふ。とノギコヴは笑ひ出した。その笑ひ聲はサニンが彼の美貌や彼の腕力や彼の健康などを褒めたのでそれが嬉しくて出たのだとは、誰でも察する事が出来よう。が、彼もさすがに乙女のやうに一寸まごついた。

—うむ、さうだ、君に欠けてる事が一つある。とサニンは身を入れて云つた。

—それは？

人生の正當な或コンセプトションさ。君の「生存の均一」といふ奴が君を苦しめるのだ。が、然しね、若し爰に或人間があつて、君に向ひ、一切をすて、直に行かう、と相談するものがあつたとすると、君はきつと身ぶるひして恐れるだらう。

—どこへ行くのだ？ 乞食の許へかね？

—さう、或は醜業婦の許へ……僕は君を考へて見るに、たとへば爰に一人があつて、其人は自己の權利自由を失ひ、其餘生をばシユリュツセルヴウルの牢獄に禁錮さるゝ資格がある者となれば、それはロシア帝國に或憲法を與へんが爲だらう。僕は其人に憲法は何の役に立つだらうときゝたいのだ。然しながら若し其人の問題が、たゞ自分自身の生活を腐蝕する倦怠といふ奴を退治せんが爲に、新しい趣味を覓めに他處へ出かけるといふ譯ならば、其人は直にかういふ問題

に遭遇する。自分は果して別な方法で生存する事が出来るだらうか。といふ問題だ。よし自分分の俸給を棄て、従つて絹布の襯衣を棄て、折襟を棄て、及び其他をすてゝも、強固な壯健な一箇の男兒である自分の此軀は、失ふわけにはゆかないだらう……全く滑稽だ。

—僕の考によれば、チツとも滑稽な事はない。前の場合には一の趣意、一の意見が通つてゐるが、次の場合では……

—さア、次の場合では？

—さやうさ……どう云つたらいか……さうしてノギコヴは手の指をボキン／＼と鳴らした。

—君の論はね、とサニンは遮つて、君はいつも遁口をいふよ。憲法がどうしたとか、君がいくら口を酸くして論じようとしたつて、それよりや君に取つては君自身の生活問題の方が實は緊急な問題なんだらうぢやないか……

—そこが問題だよ。恐くはね。

サニンはフ、ンといふ様子をした。

—まア、やめてくれたまへ。人がね君の指を切つたら、他のロシア人の指をきつたより、君には惡からうよ、事實だよ。

—犬儒論だ。とノギコヴはわざと刺々しく云つたが、何だかたゞ滑稽であつた。

—或は然らん。然し眞理だよ。現にさ、たとへロシアに於いてのみならず世界の多くの他の

國々に憲法がなからうが或は憲法をこしらへようといふ意向さへなからうが、君は必ず君自身の生活が君を満足させないが爲に苦しむよ。さうしてその苦しむのは決して憲法がない爲ぢやないのだ。若し君がさうでないといふなら、君は自ら瞞くのだ。更に立入つていはうか——とサニンは愉快らしく眼をかゞやかしながら一寸口を噤んだが——君の不平は君の大體の生活に就いてぢやないのさ。リダがまだ君に首つたけ焦かれてくれないからさ。どうだい。さうだらう。

——君はさういふバカをいふ……さういふバカを！ 下衣のやうに眞紅になつて、ノギコヅに叫んだ。初心な正直な當惑さ加減はその穩かな善良な眼からバラ／＼と涙をさへ迸しらした。

——バカだつて？ リダの事になると、君は世の中の事には一切目が盲んで了ふくせに。徹頭徹尾「リダを得たい」といふ唯一つの *Desire* がチャンと君の面に書いてある。それでも君はまだバカな事だといふのかい？

ノギコヅはビリ／＼と眉を上げた。さうして、ツト小徑を歩き出した。

若しかういふ事をリダの兄でない他の人からきいたならば彼はもつと不快に感じたらう。けれどもサニン自身の口からリダの問題について一寸見當のつかぬ事を云はれたので、それが頗る彼には奇異に思はれた。

——君は何かね……と彼は口の内で云つた。君は鎌をかけるのだらうがね、でなければ……。

——でなければどういふんだい？

微笑みつゝサニンが訊いた。

ノギコヅは黙つて肩を揺つた。そして後目遣ひをした。

或他の推論が彼の心に浮んだ。サニンを定義すれば、彼は不徳な人間でなければならぬ。意地の悪い人間でなければならぬ。が、さうとはさすがに云ひがたかつた。それは中學校時代からの眞摯な友愛をば感じて居たからである。さうして見ると彼は不徳な人間に對して同情を持つてゐるといふ事になる。さういふ事は不可能らしくも思はれた……

そんな事を考へて彼の心は錯亂した、鬱結した。リダの思ひ出が彼を悩ましたり脅かしたりした。けれども、彼は其乙女を愛してゐたので、又其乙女に對する深い／＼感じが、いかにも彼には懐しかつたので、今あゝいふ事を云はれてもサニンを恨む氣にはどうしてもなれなかつた。彼の心は悲しくて同時に嬉しかつた。恰も熱い手が彼の心臓を捉へて、やさしく緊めつけるやうに覺えた。

サニンは黙り返つて、注意深い媚びるやうな微笑をにやり／＼と洩らしてゐた。

——ねえ、何とか鋒を向けたまへよ。僕は何とも思やしないから。と彼は云つた。

ノギコヅは小徑に沿うて歩きつゞけた。心の苦しみはあり／＼と面に溢れてゐた。

此時、ミル(獵犬)が二人の傍へよつて、心配さうに四邊を見廻したが、やがてサニンの膝へ身を擦りつけた。恰も何か嬉しい事があるので、その嬉しさを皆に知したいといふやうな様子であつた。

——ミルや。ミルや、と犬を撫でながらサニンが云つた。

ノギコヴは議論を続けようとした。が、いかなる事よりも一番興味を惹く此問題をば、サニンが又新につき壊しはしないかと恐れもした。けれどもリダに觸れぬ事は彼には下らなく思はれた。辛氣くさく思はれた。全く無意義であつた。

——で……リダイヤ・ベトロヴナさんは今どこにゐるだらうね？ノギコヴは機械的に云つたら心の中からは中々離れないが、此際どうも云ひ出しにくかつた問題のかたを彼はやつとつけた。——リダかね？ さア、どこにゐたら君にはよからうな？ 彼女は士官達と並木街^{ブルヴァール}を散歩してよ。此町の若い娘達は今頃はいつだつて皆な並木街にゐるよ。

ノギコヴの眉はビリ／＼と揺いた。

——リダさんがかい。あの利發な人格の高いリダさんが若い男達と今頃ぶらついてゐようとは考へられないがな。

——だが、君、とサニンは微笑んだ。リダも君のやうに若いよ。君のやうに美しいよ。さうして壯健だよ。彼女は君に欠けてゐるものを持つてゐる。即ちあらゆる物に對する慾望だ。彼女は何でもかんでも知りたがつてる、何でもかんでも覺えたがつてる、何でもかんでも實驗したがつてるのだ……が、それ、彼女はそこへ來たよ……さア、よく見たまへ、そして理解するんだね……美しいものぢやないか。

リダは軀は兄より小さいが、ズツと綺麗であつた。しなやかによ／＼とした嬌態が見るもの目を奪つて恍惚たらざるを得なかつた。奥床しい美しい目が勝ち誇るやうに人を魅した。それか

ら透る愛くるしい聲、その聲は彼女自らも得意であつて、従つて歌を唱つて人にきかせたがつた。リダは徐に石段を下りた。さうして幼い牝駒のやうに軽く腰を振つて歩いた。歩きながら、鼠色の長い衣服を庇ふらしい恰好をした。

二人の若い士官はピカ／＼する長靴を穿いて、鞞皮のついた騎兵ツボンをつけ、リダの後につゞいた。カラ／＼と鳴る拍車を氣にしながらつゞいた。

——美しいと仰有つたのは妾の事？ とリダは庭一ぱいにその黄金のやうな聲と女らしい清新さを漲らした、彼女は横からサニンを見ながら、ノギコヴへ手を伸べた。リダはまだ兄の言葉の戯れてゐる時と眞面目に云つてゐる時とはハッキリ區別する事が出来なかつた。

ノギコヴは娘の手を握りしめた。さうして涙が浮ぶほど眞赤になつた。けれどもリダは彼を氣にもとめなかつた。ずつと昔からノギコヴのおづ／＼した眼光に馴れきつてゐたので、彼女には別に何の苦痛をも與へなかつた。

——今晚は、ヴラディミル、ベトロヰツチ君、と二人の士官のうちの年上のズツと立派な、髪

の美しい方が、威勢のいゝ種馬のやうに身を乗出して云つた。彼れの拍車は喧しく鳴つた。サニンは既^はやその男が執拗くリダの尻を追廻してゐるザルデインといふ騎兵士官だと知つた。も一人の士官、タナロヴ中尉はザルデインをば模範士官と見て、何から何まで努めて其模倣をした。彼は言葉少なであつた。やゝ輕忽であつた。さうしてザルデインより容貌もわるかつた。

タナロヴは自分の番だといふやうに拍車を鳴した。けれども何も云はなかつた。

— さうさ、お前の事さ、とサニンは大真面目で妹に答へた。
 — さうですとも、さうですとも、妾は美人だわ……類のない！ とリダは兄の方へ目を注ぎ
 して笑ひながら、眩懸椅子へ身を投じた。さうして自分の半身をスラリと引立てて見せながら兩
 腕を昂げて、帽子を脱いだが、投槍のやうに長い留針を一本砂の上へ落した。で、覆面の布片を
 ば飾針と髪と毛の間へさし込んだのである。

— アンドレイ・バヴロヰツチさん、一寸御願して頂戴な。と彼女は憐れほい媚びるやうな聲
 で中尉に云つた。

— さうさ、美人だよ。サニンは妹から目を離さず身を入れて答へた。

リダは不信用らしい顔をして又兄を見た。

— 爰にゐる妾達は皆な美しいことよ。とリダが云つた。

— 否、とザルデインが云つて笑つた。彼れの齒並が眞白に光つた。僕等はたゞ憐れな裝飾で
 すな、貴女の美を一層鮮明に一層花やかに浮出させる裝飾デコラにすぎませんよ。

— うむ、君は雄辯ですな、とサニンは感心して云つた。が、その聲のうちに何だか揶揄する
 やうな調子があつた。

— リダ・ペトロヰナさんはどんな人をも雄辯にしてさうせう。とリダの帽子の釣懸を外さ
 うとして、たゞ髪を引き彼女を煩がらしたり、同時に悦ばしたりしながら、無口のタナロヰ
 が合槌を打つた。

— ほう、君も雄辯ですな。サニンは感動したやうな風を見せて、悠揚たる聲で云つた。
 — いゝ、加減にしたまへ。とノヰコヰは空々しく呟いたが、内心サニンの揶揄が嬉しかつ
 た。

リダは半分目を閉ぢて兄の心を探つた。サニンはその曇つた眸子のうちに明白はつきりと次のやうな心
 持を讀んだ。

『此人達はどれ位の人間かわからぬやうな妾だと思つて下さるな。だけど妾はこんな風にして見
 たいのです……面白いのよ。妾は馬鹿ぢやありません。兄さんの妹です。妾は自分のしてる事
 をチャンと承知してゐます。』と其眸子が云ふやうに思はれた。

サニンはニコリとした。

帽子がやつとの思で取除かれた。タナロヰはその帽子を椅子の上へ置かうとして重々しく歩い
 た。

— あら、貴兄のした事はこれだわ……アンドレイ・バヴロヰツチさん。リダが例の憐れほい
 媚びるやうな聲で不意と叫んだ。さうして顔色が變つた。いやねえ。貴兄は妾の髪を毀しちまつ
 たことよ……家へ還らなくちやならないぢやありませんか。

— それは……どうも、以來は氣をつけます。タナロヰはまごついて吃つた。

リダは立ち上つて、衣服を褰げ、自分に注意を集めた男達の目を嬉しく感じながら、本能的に
 ニッコリ笑つた。やがて彼女は石階の方へ走つて行つた。

リダが立ち去ると、若い男達はホツと息をついた。何だか気が楽になつた。急に重荷を卸したうに思つた。若い美しい女の面前で男が常に感ずる神経の緊張をばやう／＼弛める事が出来た。ザルデインは衣囊ホツケットから巻煙草を出して、樂しげに火を點じた。さうして喋り出した。が、それをきくものは彼の喋るのはたゞ會話を維持する習慣から喋るので、口で云つてゐる事には別に考も意味も全くないのだ、と思つた。

——僕はリダさんに勧めたいと思ひます。何もかもすて、眞面目に唱歌をおやりになるやうにね。あのお聲を持つてお出でになるのだから、競争場裡に立てば必ず成功しますよ。

——立派な競争場裡にね。とノギコヅは不愛相に答へて、脇を向いた。

——なぜ不可のでせうか。とザルデインは口から巻煙草を除つて、大に驚いたやうに訊いた。

——けれど、女優は何者でせう。まづ賣女ですな。ノギコヅは腹立たしげに答へた。實際、嫉妬心が彼を苦しめぬわけにはゆかなかつた。自分の好きな女が一層その美をけばくしくする目を射るやうな衣服を着て、他の男達の前に現れるとしたら、それが彼にはたまらなく心苦しいのであつた。

——それは少し酷しいですな。ザルデインは眉をあげて云つた。

ノギコヅは怨めしげな顔をして彼を見やつた。彼の目にはザルデインは自分の愛してゐる女を欲しがつてゐる男の一人であつた。さうして其男の美男であるといふ事が腹立たしかつたのである。

——いや、さうぢやないです。背景の前へ半裸體で現れたり、勇の目の前で嬌態をこしらへさうして金をもらへばすぐ行つて了ふ賣女のやうな眞似をしたら、それでも君は立派だと思ひますかね。さうだといふならそれつきりの話ですがね。

——君。とサニンが答へた。女といふものは總じて自分の肉體を褒められる事が好きなものだよ。

ノギコヅは赫として肩を揺つた。

——君はさういふ下らん事をいふ。

——下らん事かどうか知らんがね、それが事實だよ。僕に云はせれば、リダはきつと背景の前に立てば成功するだらう。僕はそれを見たいものだと思つてる。

かういふ談は彼等にとつては本能的に飽く事を知らぬ好奇心を惹起させるわけであるが、何となく彼等は心に壓迫を感じた。

ザルデインは他の人達よりは利口で且つ策に富めるものと自信してゐるので、この難局から皆を曳出してやらうとした。

——さうすると、貴兄のお考では、女は一體何をしたらいいでせう。結婚ですか……：：：學校教育を勉強して天才を失ふのですか。それは自然に對する罪惡でせう。自然は人にさまざまの天賦を與へてゐるのです。

——やア。とサニンが冷笑しながら云つた、實際だ。その罪惡といふ考を精神的に持つて來な

くちや嘘だね。

ノギゴヴは意地悪く微笑んだ。さうして彼がザルデインに答へたのは政略的であつた。

——なぜ罪悪でせう。母になるとか學位を得るとかいふ事は、どんな女優になるよりも遙に有益ですよ。

——さア、そこだ。タナロヴはムツとして云つた。

——そんな非理くらん事を云つたつて、つまらなくなるばかりでせう。とサニンが云ひ出した。

ザルデインは答へようとしたが俄にやめて黙つた。彼等はこの問題は實際つまらなくて且無益だと思つた。さう思ふうちにも彼等は何となく自己を傷けるやうな氣がするので、鬱陶しげに黙りかへつてゐた。

リダとマリア・イヴノヴナは間もなく石段の上へ現れた。兄の最後の言葉がリダの小耳を掠めた。併し何事を云つてるのかわからなかつた。

——お話しを急に廢して了つたのね……愉快らしい聲でリダが云つた。川の縁へ行きませうよ。今いゝ景色だわ。

と、男達の前を通りながら、彼女は軽く身を反らした。さうして眼の色が一寸濃くなつた。何だか謎のやうな希望がその色の底に匿れてゐるやうに。

——夕御飯まで行つてお出でなさい。と、マリア・イヴノヴナが云つた。

——賛成ですな。とサルデインが和した。さうして拍車をカラ／＼云はせながら、リダへ腕を

差出した。

——御伴をさせて戴きたいですな。と、努めて嫌味らしくノギゴヴが云つた。彼の顔は泣きぬばかりであつた。

——貴兄が行つて悪いわけではないぢやありませんか。リダはニコ／＼しながら彼に答へた。彼女は自分の肩の上を見た。

——行きたまへ、君、行きたまへよ。とサニンは彼に勧めた。彼女がもう少し僕を兄貴だと思つてくれなければ僕もお伴をするのだがね。

リダはスツと立つた。不思議な戦慄を感じながら、兄をチラリと見て、ホ、と高笑した。マリア・イヴノヴナは悴このする事なす事を立腹した。

——なぜお前はさういふ馬鹿ばかり云ふのだい？ リダが立去ると、母はツケ／＼と云つた。人と異つた事ばかり云はう／＼としてゐるのだね。お前は。

——私は別に何の考もありやしませんさ。と、サニンは答へた。

——マリア・イヴノヴナは彼をどうしていゝかわからなかつた。母は悴この心が量りかねた。彼の考へる事も感ずる事もさつぱり見當がつかなかつた。他の人々は皆な大抵自分と同じやうに考へたり感じたりしてゐるのに。

母はかう思つてゐた。人間といふものは自分と教育や財産や、社會上の地位が同じやうな人が考へたり話したり行つたりするやうに、自分も考へたり話したり行つたりすべきものである。母は

又かういふ意見であつた。人は自然から受けた獨特な特色を有する人間たるを得ざるのみならず、人間たるものは或共通の鑄型にはまつてゐなければならぬものである。又彼女を取巻いた人生は彼女にかういふ考をこしらへさせた。凡そ人の教育といふものは人間をば二つの集團に分けてやるべきものである。即ち智力のある集團と智力のない集團がそれである。智力のない組は自分達の持前の氣性を保存する事が出来る。それだから智力のある組は輕蔑されるのである。智力のある組は受けた教育によつて異つた集團をこしらへる。さうして其確信が銘々の箇人的特性には歸着せず、たゞ其尊敬すべき地位に責任を有するのである。さういふ風に各の大學生は革命的でなければならず、又各の官吏は市民的でなければならぬ。藝術家が自由思想家でないといふ事も、士官が表面貴族的に誇張した考をもたぬといふ事も、彼女にはあるべからざる事のやうに思はれた。若し大學生が保守的であつたり、士官が無政府主義的であつたりしたら、それこそ不思議な事で且不快な事でもあつた。サニンについて考へて見ると、その血統から云つても教育から云つても、彼がして來たやうにすべき筈ではなかつた。リダもノギコヅもマリア・イヴノヅナも又彼に近い人達も、彼の事を思ふと、何だか希望を空しくされるやうな不快な感じがした……母親の本能から、彼女はサニンの周圍に與へる印象にすぐ氣がついた。さうしてそれが心苦しかつた。サニンは母親の心を充分に察してゐた。彼は最初母親を安心させようと思つた。けれどもどうしたらいゝか分らなかつた。そこで彼は偽の感情をこしらへようとした。心にもない考を搾出さうとした。けれどもそれは全く困難であつた。彼は微笑んだ。ヌツと立ち上つた。それから家の

中へ入つた。

そこで彼は反省する爲に寢床へ上つた。彼は思つた。人間は此世界をば一つの寺院のやうなものに化して了ひたがつてゐる。一切のものに對して唯一の規則をこしらへ、幾多の條網を明細に設け、それで箇性の滅却を企てゝある。然らざれば古くさい唯一の權力とか神秘的の何物かに全然服従してゐる。彼はキリスト教の立場と運命とを考へて見た。然しながらそれは何だか誠につまらぬものゝやうに思はれた。そこで無意識に假睡して、深更まで眠つて了つた。

息子を見送つて、さてマリア・イヴノヅナは嘆息した。さうして今度は自分が考へはじめた。母は思つたザルデインはあからさまにリダに焦れてゐるやうな様子を見せてゐるが、どうかそれが本氣であつてくれ、ばい、がと冀つた。——「リダも既に二十だ。ザルデインは……でなければならぬやうなお人らしい。噂にきくと、今年は中隊長になられるとやら、借債は過分にお有りなさるさうだ。が、どうして私はこんないやな夢なんぞを見るのだらう。ばか／＼しいとは思ふのだが、どういふものか、そんな事が始終頭へ浮んで來る。」

マリア・イヴノヅナはザルデインがはじめて自分の家へ來た日にかういふ夢を見たわけであつた。彼女はリダが眞白な衣服を着て、草や花に蔽れた牧場をゆく姿を想像した。

マリア・イヴノヅナは眩懸椅子のうちへ身を落した。お婆さんらしく眩をついて、ながい事、曇つた空に思ひ耽つた。悲しくなる些細なさま／＼な考へがたえまなく心につきまゝとつた。母はわびしく感じた。さうして何となく不安でたまらなくなつた。

三

燈ともし頃、散歩に出た連中は母家へかへつた。夕かげが、たゞよふ園のおくで、賑かな聲々がきこえた。

リダは嬉しさうに顔を眞赤にして、母親のそばへ走せ寄つた。彼女の周囲には川から持つて来た身にしむやうな新鮮な匂と、思ひやりのある若紳士達の前にゐるので、非常に亢奮した、いかにも別嬪らしい媚とが散つた。

——お母さん。妾、御飯がたべたいワ。ニツコリした母親にからまつて、リダが叫んだ。それでね、御飯の出来るまでギクトルさんがいろんな歌をうたつて下さるのよ。

マリア・イヴノヴァは夜食の支度をしに行つた。さうして歩き乍ら考へた。リダのやうな目に立つて美しい且つ健康な娘は、どうしたつて幸運でないわけにはゆくものか。

ザルデインとタナロヴとは座敷へはいると、相續いてピアノの方へ行つた。リダは露臺に据ゑられてあるロツキング、チエア(搖椅子)に腰を落し、樂々と身を伸した。ノギコヴは歩くとミシ／＼といふ露臺の板敷を音せぬやうに歩いた。彼れはリダの顔をそつと見た。キリ、と緊つたその喉首、黄ろい靴を穿いたその小さな足、裳裙が開いてチラ／＼見えるその優しい踝。けれどもリダは彼には一向注意もしなかつた。たゞ春機發動機の力強い、うつとりとした心持が胸一ぱいに充ち／＼てゐた。そして眼をつぶつて、謎のやうに獨笑した。

ノギコヴの心中はまるで戦鬪のやうであつた。彼はリダを愛してゐた。けれども自分をばリダがどう思つてゐてくれるのか、さつぱり見當がつかなかつた。時には愛してくれてゐるやうにも思へた。時には愛してくれぬやうにも思へた。リダが彼を愛してゐるやうに想像さるゝ時は、あの若いなよ／＼とした肉體が全く自分の思ふまゝになる日の来るのも、もう目の前にぶら下つてゐるらしく考へられた。然し愛してはくれぬやうに信じらるゝ時には、そんな事を考へるのがあさましくも耻しくも思はれた。さういふ時には肉感といふものが腹立しくて、自分自身がいかにも憐れむべく又リダには相應しくないやうに思はれた。

大股で歩きながらノギコヴは心できめた。

——若し右の足が最後の板敷を踏んだら、それは『ウン』といふ事だらう。然し若し左の足がそこへ行つたら……

そしてそんな事はその時次第で偶然さうなるのだとは、彼にはどうしても思ひきれなかつた。やがて彼は左の足で最後の板敷を踏んだ。冷たい汗が額を濕した。彼は獨り語つた。

——なんだ。ばか／＼しい……まるで婆さんのやうだ……さア、一……二……三……三といふ數で、斷然そばへ行つて云はう……、けれど……どう云はう？ どう云つても同じ事だ……、一……二……三……いや、三度目でなければ……一……二……三……一……二……

頭は火のやうになり、口は乾き、胸はどき／＼、脚はぶる／＼震へた。

やがてリダは目をあげて、煩ささうに云つた。

——どしん／＼するのをやめて頂戴。きくのに邪魔になるワ。
その時はじめてノギコヴはザルデインが歌をうたつてるのに気がついた。
若い士官は今しも古風なロマンスを唱つてゐた。

われ君を愛しき。わが胸の

その愛こそはとほに消えじ。

唄は拙くはなかつた。が、素人の癖として、恐しく高い聲をしたり、絶入りさうな低い聲をしたりして、表情を示さうとした。ザルデインの唄はノギコヴには甚しく不快であつた。

——あれが先生の作曲かね。腹立たしさと怨めしさとで、變な心持になり、彼は口に出して云つた。

——いやよ……邪魔しないで！ 靜にしてらつしやい。リダは擲揄面で云ひ足した。あなた音楽がお嫌ひならね、お月様でも見てらつしやい。

なるほど眞赤なまんまるな、月が庭の黒い梢から徐々と物凄く上つて來るのが見えた。そのほかに透明な光輝が石の小徑の上へ流れた。獨笑する娘の顔や衣服の上へ流れた。

庭の影は濃くなつた。森の奥を覗いた時のやうに黒く且つ底深くなつた。

ノギコヴは術なげに歎息した。

——月よりは貴方の方がよつほどい……と云つてすぐ考へた。なぜ自分はこんなつまらぬ事を云ふんだらう……。

リダは高らかに笑つた。

——まア、大袈裟な褒め方ね。

——僕は褒め方なんぞ知りません。顔を盛めてノギコヴが答へた。

——まア、黙つてらつしやい……そしてお聴きなさいよ。リダは煩さうに肩をゆすりながら云つた。

さはれその愛は君を苦しめじ

悲しむ君をわれは願はじ……

ピアノの音は水晶を迸らした。緑に濕つた庭の中へ反響した。月は光をました。影は濃くなつた。

下ではサニンが草の上を歩いてゐた。菩提樹の下に佇んでシガレットに火をつけようとしたが、それをやめてヂツとしてゐた。あまり靜なのでいゝ心持であつた。ピアノの調子のいゝ音と、ザルデインの思ひせまつた唄とがきこえたが、その聲は四隣の靜けさを破ることなく響いた。

——リダさん！ 今云はなければ、もう云ふ時はないやうに思はれたので、ノギコヴは不意に叫んだ。

——なによと庭の方へ眼をむけて、月とその明るい表面へ截取られた黒い小枝とを、夢見るやうに見やりながら、リダは機械的にきゝ返した。

——ずつと以前からです……僕は貴女に云ひたい……と思つてゐました……口早にノギコ



ヅが云つた。

サニンは聴耳を立てた。そしてその方へ頭をふり向けた。

——どんな事？ リダは相變らず氣にもとめずに訊いた。

ザルデインはロマンスを一つ終つたのでしばらくシンとしたが、やがて又別なのをやり出した。

彼は非常にいゝ聲を持つてると自信してゐるから、それを人にきかせたがつてゐたのである。

ノギコヅは自分の顔が赤くなつたり青くなつたりするやうに覺え、たまらなく胸が一ぱいになつて氣が茫として來た。彼は口籠つた。

——僕は……ねえ……リダさん……貴女、僕の妻君になつてくれませんか。

と云ひさして彼は考へた。こんな事は云ふべきぢやなかつた。そしてその言葉を言ひきる前にその答は「否」であらうと思つた。彼はまた、まらなく耻づべき事を仕出かして了つたやうにも思つた。

——どなたの奥様に？ と云つて、リダはサツと赤くなつた。何か云はうとして立ち上つたが困つた様子をして身を轉じた。……月は眞向からその顔を照らした。

——僕は貴女が好きです。ノギコヅは尙口早に云つた。

彼には月が輝かぬやうになつた庭の空氣が胸苦しくなつた。彼の周圍の有ゆるものが皆暗くなつた。

——僕は……僕は何と云つていゝかわかりません……云つたつて仕方がないです……僕

は貴女が好きなのですもう非常に……

「なぜ『もう非常に』なんて云つたのだらう。と彼は思つた。まるでアイスクリームの話でもしてゐるやうに。」

リダは手のうちへ落ちて來た小さな木の葉を焦れつたさうに引裂いた。そんな事をきかうとは意外でもあり無益でもあつたので、彼女は狼狽した。きいてはゐられなかつた。さうしてこんな話が出た爲に二人の間へ深淵をこしらへて了つた。リダはこれまで長い間ノギコヅをば親戚のやうに考へて少しは愛してゐたのであつた。

——ほんたうに……妾、ほんたうに知らない事よ……そんな事は妾思ひもよらなかつたワ……

ノギコヅは落膽した……彼は青くなつて立上り、帽子をとつて、『さよなら』と呟いたが、自分の耳へはきこえなかつた。そしてブルブル顫へる唇へばつのわるい微笑を湛へてゐた。

——もう行くんですか……さよなら。リダは當惑して答へた。で、力めて何氣ない微笑を見せながら、手をさし伸べた。

ノギコヅはその手をそゝくさ握りしめて、帽子もかぶらず露に濕つた草原へ眞一文字に大股で歩み去つた。とある小蔭へ來た時に、彼はツと立ちどまつた。そしてやけに髪の毛を搔きむしつた。

——あ……あ……なぜおれはかう不幸なのだ、頭の中が煮えくりかへる……ばかば

かしい……自殺しようか……。
連絡のないさまへ、な考が頭の中で互に相搏つた。こんな不幸な、こんな不名誉な、こんな滑稽な人間はあるまいと自分が感じられた。

その時サニンは彼を呼んで見ようかと思つたが、すぐ思ひとまつてニコリとした。ノギコヅが自分の好きな肩や喉首や手足を持つてゐる女が自分に身をまかしてくれないので、ほとんど泣きながら髪をかきむしる有様が、彼には馬鹿げて見えた。

それから自分の美しい妹がノギコヅを愛してをらぬとわかつたことが、彼には不愉快でなかつた。

リダは暫く同じところにジツとしてゐた。月に照さるゝ臙に白いその半身をばサニンは熱心に凝視してゐた。

母家の扉口へランプの黄ろい光が流れると、ザルデインが現れて、露臺の上へ來た。サニンはやかましい拍車の音をきいた。その間タナロヴは座敷のうちに残つて、じめ／＼した低い調子で古風なブルスを弾いた。

ザルデインはやさしくリダのそばへ寄つた。そしてものやわらかにその軀を抱へた。その時サニンは露のやうな月光を横きつてゆらめく二つの影法師が唯一つに重なり合ふのを見た。

——何を考へてゐらつしやる。ザルデインはリダの耳元でさゝやいた。彼の眼は火のやうに輝いた。そして娘のきれいな耳の上へ唇を押しあてた。

リダは自分の方へ向く男の首を感じたので、ゾツとした。氣が遠くなつた。ひし／＼と抱きしめられるたびに、不思議な感覺が湧いた。彼女はザルデインが知識の點からも修養の點からも自分より劣つてゐるといふ事を知つてゐた。それゆゑ彼に従ふ事は決して出來ないと思つた。それと同時に一人の美しい丈夫な男の抱くまゝになる事がいゝ心持でもあり又氣味わるくもあつた。彼女はもの凄しい深淵の底へ身躍らせて跳込むやうな心持がした。若し妾がふいと體を抛出したら……さうしようと思へば出來るだらう……と思つた。

——人に見られますワ。とやつと囁いた。さうして近よりもせず、離れもせず、身を寄せかけたまゝ、まゝ、男の心を亢奮させた。

——一言……ちよいと一言、とザルデインは抱きしめ／＼口籠つた。體中の血が湧きかへつた。……來て下さるでせう？

リダは戦慄した。ザルデインは彼女にかういふ問をかけたのは最初ではなかつた。そしてそのたんび男の意志のまゝになり、焦つたいやうな、恐しいやうな心持をした。

——なぜです？ とリダは眼を大きくあけて月を見ながら、きこへぬほどの聲できいた。

ザルデインはその間に對してハッキリ答へる事が出來なかつた。また答へようともしなかつた。とはいふものゝ、容易く女を手に入れた連中の如く、彼は心の底で領いた。リダはいやではないのだ、たゞ恐いのだ。とさう思つた。

——なぜ？ あなたを私の傍へ置きたいからです。あなたの事ばかり考へ、あなたとお話をし

たいからです。……あなたは罪ですな、リダさん。……ね、来て下さると、たつた一言云つて下さい。……

此二人の肉體の接觸が二人をして夏の雲のやうな咽ばさるゝ重くるしい靄にでも包まるゝ心地をさせた。リダの心持のいゝなやかな體が鋭い身震さるゝ安逸な感覺に酔はされて、男の方へ知らずと伸びた。彼女の周圍はもう今迄の世界ではなかつた。月はもう月ではなかつた。そしてあかるい牧場の上に丁度引懸つてゐるやうに見えた。露臺の欄干がすぐ頭の上に見えた。庭も亦今迄彼女の覺えてゐる庭ではなくなつた。彼女の周圍へ近よつて突立つた氣味のわるい不思議なものゝやうに考へられた。彼女の頭はさも重さうに男の方へ傾いた。さうしていかにも億劫さうに身を屈めて、ザルデインの腕から離れたが、

——いゝわ……と乾き切つた炎ゆるやうな唇を開き、やうく呟いた。

やがてリダはよろめきながら母家へ還つた。

彼女は今自分が或恐しい者に牽引られて、深淵に近づきつゝあるやうに感じた。

——あんな事は馬鹿げてるワ……さうよ、妾は好奇心を起してゐるのよ。それが面白いのだワ。……たゞ一寸ふざけて見たばかりだワ……さうよ、妾は好奇心を起してゐるのよ。それが面白いのだワ。それだけの事なの。入口のあかるい板玻璃に照されて、自分の黒い影が反射する鏡の上へ、ヒタト瞳子を据ゑながら室の中に突立ちつゝ、彼女はしきりに自分で辯解して見た。

リダは頭の上で手を組んだ。さうして、なまめかしく身を伸し、ほつそりしたなよやかな軀や、

大きな腰の動くさまを、しげくと見やつた。

ザルデインは一人になり、緊張した心持のいゝ膝の邊がぞくぞくした。彼は半ば眼をつぶり肩を聳し、褐色の口髭の下で、キラキラと齒並を光らした。こゝへ一人の幸福な人間が出来上つたのだ、彼の未來はますゝ歡喜に溢れ幸運に満つるやうに感じられた。

彼はリダが自分に身を委す時の放逸さ熱烈さ何んとも云はれぬ美しさを胸に描いて見た。さうして彼女に對する情慾が憂はしいほど心を壓した。彼がリダに云ひ寄つた時、またその後、思ふまゝに抱きしめさせるやうになつた時でも、リダはいつもおづ／＼してゐた。抱かれてゐる際、娘の眼の中に妙な曇つた炎が輝いた。それがどうやら心の底でザルデインを輕蔑してゐるやうに思はれた。ザルデインにはリダが非常に學識ある女の様に見えた。今迄關係した女達のやうに自分より一段劣つてゐるものゝやうには考へられなかつた。抱きしめながら、もやしこんな事して侮蔑されやしないかと恐れた。要するにリダを所有するといふ考がザルデインには怖かつたのである。時にはリダは自分を押搦つてゐるのぢやないかと思つた。さうすると自分の位置は甚だ馬鹿げてゐる。然し今日リダが今迄のいろ／＼な女と同じく弱い聲でおど／＼しながら力なく答へた様子によつて、彼は自己の力量を感じた。そして勝利が目前に迫つたやうに覺えた、やがてかの放縱な振舞をする日も近づくのだなと思ふと同時に、又人の悪い、こんな考も起つて來た。あの氣高い清淨な學識ある處女が、やつぱり他の女同様、自分の體の下に横はつて思ふ存分おもちやになるのだ……

——あなたは一體僕に何を云はれてゐるのですか。少々腹が立つてわれ知らずザルデインが叫んだ。

——さやう……我々は税を拂つてゐる。我々は兵役に服してゐる。さうぢやないか。然るにそれは何を意味してゐるか。我々は數萬の人々をば戦争といふものや不正といふものへ引渡すのぢやないか……さういふ我々の爲に我々の意見の爲に死滅する人々を助けんとして奔走する代りに、人はやすらかに高眠を食つてゐる……而してますく、餘計に食物食つて、此等の人間を饑渴に陥れる。我々が若し道徳高き人間であつたならば、その人々の幸福をば充分に考へてやらなければならぬのだ……而して其他の事は推して知るべしである。それは明白な事だ。ところが惡漢、眞の自由な惡漢はさうぢやない。即ち彼は全く眞面目な而して自然な人間である……

——自然な？

——無論さ。何となれば彼は人間が自然的にしなければならぬ事ばかりするからである……何事も彼を拘束しない。たゞ自分を喜ばす事ばかりするのだ。若し美人が彼に身を任せないならば、たゞ暴力若しくは偽計を設けても自分のものになければやまない……而して此れは全く自然である。何となれば歡樂の要求と直覺とはそれによつて人間と動物とを區別すべき類のない特質であるから。動物は動物的であればあるほど、歡樂を理解する事が少くなる。歡樂を理解する事が少くなればなるほど、それを求むる能力も少くなる。彼等はたゞ彼等の生活機關を働かすに止つてゐる。我々について云ふならば、吾々は人間といふものが苦痛の爲に創られてゐないといふ

事で一致してゐる。苦痛なるものは決して人間的傾向の理想ではない事で一一致してゐる……

——全くです。ザルデインは賛成した。

——そこでだ……歡樂は人生の目的である。天國とは絶對的の歡樂につけた異名である。我々は皆多少地上の天國を夢見てゐる……或人の曰く、劫初地上に天國があつたのだと。此の傳説は不條理では決してない。而も一の象徴一の夢想である……然り、とサニンは暫く無言の後、續けて云つた。謹嚴などといふものは人間の特色ぢやない。最も眞面目な人間は自己の情慾を隠さぬ人々である。即ち社會生活に於いて惡漢と呼ぶる者共である……それ、たとへば君のやうなものさ……

ザルデインは戰慄した。そしてたぢくとよろけた。

——さうさ、君の如きものさ。サニンは何にも氣がつかぬふりしながら續けた。君は世の中で最上の人間だ。少くとも君はさういふ人間であると信じてゐる。ねえ、さうだらう君より上等な人間に君は嘗て遭つた事があるか。

——澤山ある。おどろししながらザルデインが答へた。彼はサニンがそれをどこへ持てゆくつもりかわからなかつた。そして笑つてよいのやら、怒つてよいのやら、それさへ判断がつかなかつた。

——あるなら、その人を云つて見たまへ。とサニンが云出した。ザルデインは閉口して肩をゆすつた。

——それ、とサニンは面白さうに續けた。君は世の中で最上の人間だ。そして僕も無論同様に

最上だ。然るに君も僕も虚偽、窃盜、姦淫、特にその姦淫に對して躊躇するやうな人間ぢやない。
 ——そりや・不・思・議だ。又肩をゆすりながらザルデインが口籠つた。
 ——君はさう思ふかね？聲のうちにもつとした調子を含ませて、サニンがきいた。僕はさうは思はん。さやう。悪漢は最も眞面目な人間で、且つ最も趣味ある人間だ。なぜといふと、人間の卑陋などいふものはハツキリした境界がないものだからね。そして僕は特に一人の悪漢と握手する事を愉快に思ふ……

サニンはヒタとザルデインの眼を凝視めながら、甚だ心持のいゝ様子で彼の手を握つた。そこで不意と顔を顰めながら、全く別な調子になり、

——さよなら、お休み。と云つて立ち去つた。

ザルデインは、暫くそこへ立どまつて、遠去りゆくサニンの姿を見送つてゐた。彼はサニンのやな人間と如何いふ方法で話したらいゝものかさつぱり見當がつかなかつた。そして、たゞ當惑と不安とが彼の心を左右した。やがてリダの事を想出すと、彼はニッコリした、サニンはリダの兄だ。それだから自分に對して兄貴らしい愛情を示したのだ。さういふ心算にちがひない。とさう獨語つた。

——面白い男さな。と彼はサニンがもう或點まで自分に屬してゐるかのやうに満足らしく考へた。そこで彼は格子を開けた。そして月に照さるゝ中庭を横ぎり、自分の營所へ赴いた。

サニンは家へ歸り、着物をぬぎ寢床へ入つて、リダの室から持つて來た「ザラトウストラ」を

讀まうとした。けれども最初の二三頁讀むと、此書物が不快になつた誇強した形容詞が一向彼の心に觸れなかつた。彼は唾液を吐いた。そして書物を投げすてたが、やがて深い睡に落ちた。

四

ニコライ・エゴロギツチ・スヴロジツチの息子は莫斯科工藝大學の學生であるが、此小都會に住む地主で且つ退職大佐なる父の家へ歸つた。

彼は或革命黨と關係があるやうに疑はれて、警察の監視の下に莫斯科から送還されたのである。着く前に、ユリイは一通の手紙を認め、彼の捕縛や、半年の下獄や、追放などの事をば自分の家へ報告して置いたので、家の人達は既に彼れの歸宅を待設けてゐた。

ニコライ・エゴロギツチは別に見るところもあつて、息子の行爲は或子供らしい悪戯にすぎぬであらうと思つたが、そしてそれがひどく彼の心を苦しめたのであるが、彼は出来るだけ懇ろに息子を迎へ、小面倒な説明などは努めてきかぬやうにした。

長い／＼二日間、ユリイは三等車に揺られとほし、車内に漲る子供等の泣聲や悪臭の爲めにマシラに挨拶した。リユドミラは到る處でリヤリヤさんと呼ばれてゐるのだが、これは彼女が幼い時分に自分自身の事をばさう云つてゐたからである。で、彼が一番はじめに思つた事は、妹の寢室へ行つて寢臺の上へ長々と横になり、少し休息しようといふ一事であつた。

彼が目を見ました時には、日はもう落ちてゐた。夕陽の斜に射す光線が、窓匡の影ぼうしをば壁の上へ斑に描出してゐた。隣の部屋からは、盞や匙の相觸るゝ音や、リヤリヤの嬉しさうな笑聲や、もう一人、誰ともわからぬ、優しく樂しげな男の聲がきこえて來た。

彼は最初、まだ列車の内で、進行中窓硝子のガタつく音や、隣室で知らぬ旅客の聲などが響いて來るやうな氣もしたが、すぐそれは誤であるとわかつた。そこでガバと身を起した。

——あゝ、さうだと、眞黒な、地の厚い、癖のある髪を搔亂しながら、顔を擧めて、彼は呟いた。俺は着いたのだ。

彼は、其時、來たゞけの價打はなかつたと思つた。警察では彼に落ちつく場所を自分で擇べと云つた。が、彼はなぜいきなり父の家へ來て暮らす氣になつたのか。ユリイは自分でそれがわからなかつたのである。彼は自分の心へ一番最初に浮んだ土地をば擇んだにすぎないと思つてゐた。ところが實際はさうではなかつた。ユリイはこれまで自分の腕一本で暮らして來た事などは嘗てなかつた。いつも父の仕送りを受けてゐた。それゆゑ何のたよるところもなく誰一人知らぬ他人の中にあるといふ事が、彼には恐かつたのである。彼はさう思ふのが恥かしかつた。さうとは自白しなかつた。が、此行爲は自分ながら不快ではあつた。家の人達が自分のやつて來た事をば解しもしなければ寝めもせぬのは明らかであつた。其上物質上の問題でも加つたら、無論父にかゝりすぎるといふ非難などが起つて、彼は到底家の人達と圓滑に暮らす事が出來なくなるであらう。

又二年前に彼れの立去つた小都會がユリイには甚だ鬱陶しく思はれた。すべてかゝる小郡廳所在地などの住民等は、かの哲學上や政治上の問題をば理解する事も出來ず又それ等に興味をも持てぬ平民としてのみ、彼れの眼には映じたのであつた。さういふ問題は彼にとつて人生の唯一の意義であるのだ。

ユリイは寢臺から跳下り、窓へ近寄りざまに、それを開き、庭に向つて身を傾けた、母家に沿うて擴がつた其庭は恰も錦眼鏡カレイトスコップのやうに錯雜いろみだれた、紅、青、黄、紫、白、五色さまざまの花に蔽はれてゐた。

其後ろに、一層暗い、一層木深い庭が今一つあつて、此小都會の凡ての庭同様、川の方へだら／＼と降つてゐたが、其川の表面は丁度青白い鏡のやうにそこら邊の植林のうちをばきら／＼と反射した。透明な黄昏がユリイの心に何となく哀愁を覺えさせた、彼は石造の大都會にのみ餘り長く住みすぎた。自分では自然をば愛するつもりであるのだが、さて實際の自然は彼にとつて無内容のものであつた。彼れの感情を和らげもせず、静めもせず、又喜ばしもせず、却つてたゞ云ひやうのない、夢のやうな、病的の憧憬を惹起すにすぎなかつた。

——たうとう起きたのね。あんまり早くない事よ。と、室へ這入るとリヤリヤが云つた。

ユリイは窓から離れた。不慥な自分の地位から生ずる怪しい感じや、落日に唆られた靜寂な憂鬱が種となつて、妹の快活な様子や、其苦勞がなさゝうな聲などが、彼にはいとゞ不快であつた。

——何がそんなに嬉しんだい。とユリイはそゞろに云つた。

—— 妙だわねえ。と、びつくりしたやうな、大きな眼を見ひらいて、彼女は叫んだ。が、同時に、兄の間が恰も何か非常に面白い嬉しくてたまらぬ事を憶出させたらしく、一層愉快さうにカラカラと笑つた。何だつて貴兄は妾の嬉しい事なんか訊くの？ 妾は退屈なんかしないわ……そんな閑もありやしない。

彼女は眞面目くさつた顔付をして、自分の云つてゐる事をばいかにも得意さうに、かう附加へた。

—— 今は本當に面白い時代よ。こんな時に退屈するなんて、實際罪惡だわ……妾は此頃ね、労働者を教育してゐるのよ。でね、圖書館の事ですつかり時をとられてゐるの。貴兄のお留守中にね、妾達は此土地へ通俗圖書館を設立したんだわ。そしてね、それが非常に具合よく行つてゐるのよ。これが外の時なら、エリイは面白くも思つて、注意も惹起したらうが、今は或事が邪魔するのよ、一向氣乗がしなかつた。

が、リヤリヤが大眞面目になつて、子供らしい嬌態を作りながら、兄の賛成を待つてゐるので、彼は止を得ず口籠つた。

—— 本當だ。

—— それですもの。どうして妾が退屈なんぞするもんですか。と、リヤリヤは満足らしく續けた。

—— 私にはね、すべてが退屈だよ。と、心にもなくユリイが云つた。
彼女は反抗するやうな風を見せた。

—— 面白いわね、全く。二三時間前、家へ着くつかないうちに……其儘すぐ睡つて了

つて、それでもう退屈するなんて。

—— 私にやどうする事も出来ない。それは神様がさせるのだからね。と、ユリイは何となく自慢さうな口付で答へた。楽しんでゐるよりは退屈してゐる方が、彼には却つて思慮あるやうに考へられたからである。

—— 神様がね、神様がね。と、不平らしい様子で、兄の方へ手をあげながらリヤリヤは鼻を鳴らした。へえ？ え？

ユリイは自分で心持がよくなつて來た事に氣がつかなくかつた。妹の朗らかな聲や其陽氣な様子が、自分で眞面目に深刻だと思つてゐた佻しい感情をば、いつのまにか一掃してゐたのであつた。リヤリヤは兄が苦悶してゐるとは夢にも信じなかつた。だから兄が何を云つても怒らなかつたのである。

ユリイは快活な妹の顔をジツと見ながら、ニコニコして云つた。

—— 私は一向面白くない。

リヤリヤは笑つた。恰も兄が非常に面白い事でも云つたやうに。

—— サア、悲しい顔をしたお侍さん……面白くなけりや……いゝわよ……面白くなくても。まア、入つしやいよ。妾は貴兄に或若い方を御紹介しますから……それは愉快なお方よ。……入つしやいと、兄の手を握つて、彼女は笑ひながらぐいぐい牽ばつた。

—— お待ち、其愉快な若い方といふのは誰だい。

——妾のお智さん。と、朗らかな、さもく嬉しさうな聲で、彼女は兄の顔へ浴びせかけた。と、恍りとして又氣恥しさうに、着物を膨ませながら、室の内をぐる／＼廻った。

ユリイは父及妹自身の手紙で、彼等の町で此頃開業した若い醫師が、リヤリヤの愛を求めてゐるといふ事は承知してゐた。が、それがもう成立して了つたとは知らなかつた。

——さういふ事があるのだ。と、彼は意外な顔をして云つた。こんなに清浄な、こんな無垢な此小さなリヤリヤが、もう結婚の約束などして了つたのか、やがて結婚して、一人前の女となり人の妻になるのか、と考へると、それが彼れは不思議でたまらなかつた……で、彼は妹に對して或種の温情を感じると同時に、又云ひがたい憐れさをも覺えたのである。

ユリイは妹の腰を抱へた。そして二人は食堂の方へ行つた。食堂には洋燈があか／＼とついで其下に丁寧に研かれた大きな自沸鑪が輝いてゐた。ニコライ・エゴロギツチは見知らぬ若者の側に座つてゐた。壯健な、淺黒い顔の、妙に穿つやうな眼光をした其若者は、ロシア人の典型ではなかつた。

彼は物靜かに立上つて、心地よげにユリイの前に進んだ。

——始めてお目にかゝります……

——アナトリイ・パヴロギツチ・リヤザンツエヴさん。と、滑稽に重々しくリヤリヤが述べてさて手で剽軽な恰好をして見せた。

——どうかお心安く願ひ致します。と、リヤザンツエヴはおどけた調子で附加へた。

二人は眞摯な友誼を希つて握手した。と、二人の心は直に抱擁しようといふ氣勢を見せたが、それはせず、たゞ目と目とを親しげに注意深く見かはしてそれだけでお互に満足の意を表した。

——これがあれの兄だ。と、意外な心持をして、リヤザンツエヴは考へた。彼はあのやうにテキパキした、あのやうにプロンドな、あのやうに花々しい、小さなリヤリヤの兄であるから、定めし彼女と同様に、いき／＼して、喜びに充ちた人間であらうと、豫想してゐたのであるが、ユリイは丈が高かつた。瘦せて色が黒かつた。けれどもリヤリヤと同じやうに美しくはあつた。肌理が織やがて、輪廓の正しいところなどは、よく似てゐた。

ユリイの方ではリヤザンツエヴを観察して、こんな事を考へた。これが、あの春の曙のやうな清浄無垢な、小さなリヤリヤの娘姿のうちから、一人前の女をば見出して、それを愛した男なのだ。自分がこれまでにいろんな女を愛したと同じやうな調子で、この男は妹を愛したに違ひない。さう思ふと、彼はリヤザンツエヴとリヤリヤとを見るのが苦しくもなつた。どうやら二人が自分の心を感じてゐるらしく思はれて。

二人の男はお互に云はなければならぬ事があるやうな氣がしたのである。ユリイはかう訊いて見たかつた。

——君は本當にリヤリヤを愛するのかね。眞面目であれを愛するのかね……ねえ、若し君があれを欺いたとすりや淺猿しい事だ……あれは實に清浄だからね、實に無邪氣だからね……又リヤザンツエヴはかう答へたかつた。

——さやう、私は貴兄の妹さんを非常に愛します。愛さないぢやゐられないのです。どうです、御覽なさい、鮮かなものぢやありませんか。くひつきたくなるぢやありませんか。美しいぢやありませんか。どうです。可愛らしく私を愛してゐるぢやありませんか。あの咽喉の愛嬌つたらないぢやありませんか……

さういふ代りに、ユリイは何にも云はなかつた。と、リヤザンツエヅが訊いた。

——貴兄は長い間追放されてるのですか。

——五年間。

部屋を横ぎつて歩いてゐたニコライ・エゴロギツチは、此問答をきいて、ふと立止まつたが、すぐ身を真正にして又老軍人の正格な調子のついた足取で大股に部屋の中を歩きはじめた。彼はまだ息子の追放について詳細の事は知らなかつた。で、此思懸ない話をきいて、彼の血がサツと頭へ上つたのである。

——何といふ事だ。と、彼は自分自身で腹が立つた。

リヤリヤは父の此動作がよくわかつた。そしてギクリとした。彼女は争論や葛藤や何か不愉快な事などが起りはせぬかと心配して、話頭を轉じようと試みた。

——何て妾は馬鹿なんぞでせう。と、彼女は自分自身を叱つた。トリアにさう云つて置かうとも思はないなんて。

が、リヤザンツエヅには事の経緯がわからなかつた。で、リヤリヤが自分にお茶をのみたいが

どうかときいた問に答へて置いて、又新にユリイへ問をかけた。

——で、貴兄は今何をなさらうといふお考ですか。

ニコライ・エゴロギツチは眉を皺めたが、何も云はなかつた……ユリイはふと父の沈黙に気がついたが、不意に心がイラついたので、自分の答の結果などは顧慮すゝ閑もなく、つひ答へて了つた。

——今は何にもしない考です。

——どうして何もしないのか。と、ツと立止まつて、ニコライ・エゴロギツチが訊いた。彼は聲を變じなかつたけれど、其言葉のうちには明かに或小言を含んでゐた。

彼れの聲音は明白にかう語つたのである。

『どうしてお前は「何もしない」など、云へるのか。お前の良心はどうしてお前にそんな事を平氣で云はせるのか、まるで私がいつまでもお前を背負つてゆくべき義務でもあるやうに……私の年老つてゐる事や、お前も既ういゝ加減に自分の生活は自分自身で得てゆかなければならん頃だといふやうな事をば、どうしてお前は忘れてゐられるのか。私は何にも云はないが、お前はどうしてそれが自分自身でわからないのか』

ユリイは父にさう考へる権利があると認めてゐたゞけに、一層鋭く此小言をば感じもし惱みもした。で、それがため大いに彼れの内心が傷けられたのである。

——さやう、何もしません……私は何かしなければならんのでせうか。と彼は啖るやうな調

子で答へた。

ニコライ・エゴロヰツチは何か苦がい事を云はうとしたが、ジツと慄へて、たゞ肩を聳やかしながら、三たびかの重苦しい激した足取りで、部屋の一隅から一隅へ歩きつゞけるのであつた。彼れの受けた紳士としての教育が息子の歸宅當日に怒る事などをば許さなかつたのである。

ユリイはギラギラした目で父を覗つた。彼れの神経は緊張してゐた。そして争論の糸口を捉まへよう／＼としてゐた。さういふ衝突を挑む事は自分でも罪悪であると承知はしてゐたのだが、彼はもう其執拗く附纏ふ腹立たしさを抑へる事が出来なかつたのである。リヤリヤは殆ど泣出しさうであつた。そして其哀願するやうな眼光を父に向けるより外の術は知らなかつた。リヤザンツエヅもたうとう様子がすつかりわかつた。そこで彼女が可憐さうになり、無器用ながら、突差の間に話頭を轉じた。

此宵はだら／＼と面白くなく過ぎた。ユリイは自分が政争へ身を投じた事を非難する父に對して申開きをしない爲に、自ら有罪である事を白狀してゐるのだとは思ひたくなかつた。彼は父が年老つてゐる爲に又進歩に後れてゐる爲に此最も單純極まる事がわからないのだと思つた。で、其老年と其知識の缺乏とについて、彼は夢中になつて父を誹つたものである。

リヤザンツエヅの冗辯は彼には不快であつた。彼は相變らず部屋の内を行たり來たりする父の足取をば、其ギラギラする黒い眼光で意地悪さうに覗つてゐた。

と、丁度食事の時になつて、ノギコヅとイヴノヅとセメノヅとが來た。

セメノヅは肺結核の大学生で、近頃この町へ來たのだが、人に物など教へて日を送つてゐた。彼は痛々しく瘦細つて、甚だ醜くかつた。そして其早くも老込んだ容貌には、目前に死が迫つてゐるといふ、云ひやうのない悲しい影が漂つてゐた。イヴノヅは小學校の先生であるが、これは肩の廣い髪の長い無頓着な男であつた。

彼等は並木街で一緒に散歩してゐる際、ふとユリイの歸つた噂をきいて、彼に挨拶をしに來たのであつた。

彼等が家の中へ這入ると、一同は活氣づいた。冗談や洒落や笑聲がのべつに出た。食事に臨んで、彼等は盛に飲んだが、中にもセメノヅが一番餘計に飲んだ。

リダ・サニナに拒絶されたノギコヅは、二三日たつと、心がやゝ静まつた。彼は終ひにかう考へた。此拒絶は自分の失策から生じた偶然の結果にすぎないといふのは彼が乙女の心に對して準備を知らなかつたからである。さうは考へたものゝ、彼はサニンの家へ行くの心苦しかつた。

こんな譯で彼は努めて彼女に出會はぬやうにしてゐた。それが町中であらうが、又知人の宅であらうが、乙女の方では彼を憐れに思つてゐた。彼に對して何となく罪を犯してゐるやうな氣もしたので、彼女は極力彼を親切に遇した。そこでノギコヅは氣を取直して再び希望を抱くやうになつたのである。

——皆さん、一寸申上げたい事があります。と、人々が將に退散しようとした際に彼は云つた。修道院で出合宴會をやらうといふのですがね……どんなもんでせうか。

此修道院は市外にあるのだが、散策にはお定まりの場所であつた。山の上の心持のいゝ景勝の地に位置を占めて、川には近いし、町からはさう遠くもなかつた。のみならずそこへゆく途中の道がよかつた。

リヤリヤは遊ぶ事なら、散策でムれ、水浴でムれ、舟遊でムれ、森の中の逍遙でムれ、何に限らず好きであつたから、夢中になつて賛成した。

——行きますとも。行きますとも……だが、いつの事？それは。

——出来るなら、明日。

——で、誰々を誘ふのですか。と、リヤザンツエヴが訊いた。此散策の計畫は同様に彼をも微笑したのである。森の中へ行けば、彼はリヤリヤを接吻する事が出来る。彼女を抱緊める事が出来る。自分の軀と彼女の愛らしい軀——其清淨無垢なところが彼れの *Desir* を刺撃してゐた軀とをピツタリ感ずる事が出来る。

——さやう……爰に我々は……六人ゐますね……シヤフロヴさんを誘ひませう。

——それは誰の事ですか。と、ユリイが訊いた。

——此町にさういふ名前の若い (*Stoudiosus*)——スツディオス大學生——があるのよ。

——それで……リウドミラ・ニコラエヴナさんがジナイダ・カルサギナさんとオルガ・イヴノヴナさんを誘ふのですね。

——それは誰です？と、ユリイが又訊いた。

リヤリヤは笑ひ出した。

——見たら分かりますよ。と、意味ありげに指の先を接吻しながら、彼女は謎のやうに云つた。

——見たら分る？と、ユリイはニコリとした。よろしい、見てやらう、見てやらう。

ノギコヴは躊躇したが、やがて平氣を装つて附加へた。

——それからサニン兄弟を誘ひませう。

——リダさん無論です。と、リヤリヤは叫んだ、彼女はそれほどリダが好きでもないが、ノギコヴの戀を承知してるので、彼を喜ばず爲にさう云つたのである。リヤリヤは自分自身の戀が嬉しくてたまらなかつた。で、周囲の人々にも自分と同様な幸福と満足とを得るやうに希つてゐた。

——さうなつて來ると、あの士官達も誘はなくちやならん。と、ノヴノヴが鋭い聲で云ひ出した。

——え、誘ひませう……多くなればなるほど面白い事よ。

彼等は露臺へ行つた。月は皎々と輝いて、空氣が蕭やかに軟らかであつた。

——何て美しい晩でせう。と、知らず識らずリヤザンツエヴに身を擦付けてリヤリヤが云つた。彼女はまだ彼に歸つてもらひたくなかつたのである。

リヤザンツエヴは許嫁のポツチャリした温い小さな手を犇と握緊めた。

——え、夜は素敵です。と、何でもない言葉へ持つて行つて、彼女二人だけにわかる、或特別な意味を籠めながら、彼は答へた。

——貴兄方には夜は素晴らしいでせうと、イヴノヴが低い聲で云つた。私にとつちや睡くなるばかりだ。まアお休み。

と、彼は往來へ出て歸つて行つた、恰も風車の翼のやうに両手をブラリと垂げながら。續いてノギコヴとセメノヴとが歸つた。リヤザンツエヴは出合宴會の事を相談するとかいふ口實の下にいつまでもく挨拶を交はしてゐた。

——さア、ねんねしませう。彼が出てゆくと、リヤリヤはおどけた調子で云つた。そして溜息を洩らしながら、彼女は月光の美と爽やかな夜の雰圍氣とから其若い花やかな軀をば不承々に引離した。

ユリイは考へた。父はまだ寢に就くまいから、若し二人が顔を合せると、かの面白くもない無用な説明を避けるわけにはゆかなくなるであらう。

——いゝや。と、彼は川の上に漾ふ青い靄へヂツと眼を据ゑながらリヤリヤに答へた。いゝや、私は眠くない……私は一寸散歩して来る。

——それは御勝手よ。と、リヤリヤは物やわらかな優しい聲で云つた。そして新に欠伸をしなから、若い雌猫のやうに半眼を閉ぢ、月を仰いでニッコリしたが、たうとう意を決して寢に行つた。

ユリイはたつた一人になつて、暫く木々や家々の黒い影を見ながら、身動きもせず突立つてゐたが、やがてセメノヴと同じ方角へ向いて歩き出した。

病學生はまださう遠くまでゆかなかつた。彼は微かに咳を立て、は身を僂めてそろ／＼と歩いた。と、其黒い後影が明るい地面の上へ鮮かに映つて續いた。ユリイは彼に追付いたが、一緒になつて見ると、彼がさつきとは餘程變つてゐるのに氣がついた。食事の際には、セメノヴは誰よりも餘計に笑つたり戯けたりしてゐたのであるが、彼は今ものうげにたど／＼と歩いた。そして其皺腹れた咳のうちには、何か彼をば滅却して了ふ害毒のやうな、脅迫する、絶望的な、もの哀しい或物の響があつた。

——あゝ、君だね。と、彼は氣のない聲で云つた。ユリイは其聲をば怨みでも含んでゐるやうにきいたのである。

——私は眠たくないので。御一緒に参りませう。と、ユリイは辨明した。

——一緒に來たまへ。と、セメノヴは素氣なく頷いた。二人は長い間黙々と歩いた。セメノヴは身を曲げて咳ばかりした。

——君、寒くないですか。と、ユリイは其絶望的な咳に襲はれるやうな氣がしはじめたので、たゞさう訊いて見た。

——僕はいつでも寒い。と、セメノヴはむつとして答へた。

ユリイはまごついた、恰もウツカリ腫物へでも觸つた時のやうに。そこで又訊いて見た。

——君は大學を去つてからよほどになりますか。
セメノヴは頓にも答へかなつたが、

——よほどになるね。と、終ひには答へた。

すると、ユリイは大學生間の精神状態について談りはじめた。當時其社會で最も重要な問題だと認められてゐる凡ゆる事柄に涉つて談りはじめた。最初はたゞ單純に話してゐたのであるが、やがて段々と昂奮して來て、たうとう夢中になつて、熱心に論ずるのであつた。

セメノヅは黙つて聽いてゐた。

ユリイは革命思想の衰頽を嘆いた。彼は語りながらいかにも苦しげに其事について悶えた。

——君はベエベルの最近の議論を読みましたか。と、彼は最後に訊いた。

——讀んだよ。と、セメノヅが答へた。

——で、どう思ひます？

すると、セメノヅは不意に其曲りくねつたステツキをば焦つたさうに振回はした。彼れの影法師も亦大きな黒い腕を動かした。此舉動がユリイをして鷺鳥の不吉な鼓翼をば思ひ浮べさせたのである。

——僕がね？ と、セメノヅはそゝくさと口早に云つた。はてなア、君、僕は死ぬのだよ……そして彼は再びステツキを動かしたが、其黒い影も再び肉食鳥のやうな舉動を繰返した、と、今度はセメノヅも自分でそれと氣がついた。

——見給へ。と、苦々しげにセメノヅが云つた。僕の後ろに死神がゐやがる。そいつが一舉一動を窺つてゐやがる……ベエベルが僕にどう感じられるといふのかね……一人の饒舌家が喋

くると、又一人の饒舌家が別な事を喋くるのさ。僕にや同じ事だよ。僕は今日か明日のうちに死ぬのだからね……

學生が喋つてゐる間、ユリイは度を失ひながらも眞面目に悲しさうな顔をして黙つてゐた。彼はきいてゐるのが辛かつた。

病人は續けた。

——君はなア、君は凡ての事が甚だ緊要だと考へてゐる。大學に何か起つたの、ベエベルが何と云つたの、などとね……ところが僕はね、僕はかう考へるのだ。若し君にも僕と同様な事が起つたら、死が近づいてるとか、死ぬにきまつてるとかね、さうしたら、ベエベルの言葉だらうが、トルストイの言葉だらうが、誰の言葉だらうが、何の意味もありやしない。

セメノヅは黙つた。

月は相變らず皎々と照つてゐた。そして黒い影が絶えず二人の跡を追つた。

——有機體は破壊するのだ……と、セメノヅは忽ち調子を變じて、弱々しい憐つばい聲で、不意に云つた。

——どの位僕が死を怖れてゐるか、若し君が知つてくれたならなア、殊に斯ういふ温和な斯ういふ朗らかな晩にね。と、眼をギラ／＼輝かしながら、其醜い憔悴した顔をばユリイの方へ向けて、彼は悲痛に續けた。皆んなは生きてるのだ。そして僕は、死ぬのだ……かういふと、君には平凡にきこえるだらう、きこえなけりやならぬ筈だ……でも、僕は死ぬのだ……小説でも

なければ、紙の上へ書いた拵へた眞理でもない。僕は本當に死ぬのだよ、そいつは平凡ぢやない、僕にはね……いつか一度は君も亦同じやうに考へるだらう……死ぬのだ……死ぬのだ……
 ……そして皆んなそこへ歸着するのだよ……

セメノヅは咳込んだ。

——僕はなア、僕は時々こんな事を考へる、僕は間もなく暗い暗いところへ行つて了ふのだ、冷たい地面の下へ埋まつて了ふのだ、鼻がひしやげて、手がバラバラになつて了ふのだ。そして地面の上には、今僕がまだ生きて歩いてゐるやうに、皆んながあるのだ……君も此月を見ながら生きてゐるのだらう、呼吸をしてゐるのだらう、僕の墓の前を通つてゐるのだらう。僕の體が下で物凄く腐つてゆく間、君は上で五慾を恣にしてゐるのだ。ベエベルやトルストイヤや其他數萬の獅嘯面が僕にとつちや何だといふのだ。と、セメノヅは發作のやうに毒々しく叫んだ。

ユリイは動顯して黙つてゐた。

——ぢや、左様なら。とセメノヅは靜に云つた。僕の許は爰だよ。

ユリイは彼と握手しながら、深い深い同情を以て、其窪んだ胸や其折疊まつた肩や制服外套の釦へ引懸けた其太い彎曲したステッキなどを見やつた。彼は友に對して何か慰めるやうな事を云つてやりたいとは思つたが、それは不可能であつた。そこで溜息をつきながら答へた。

——それぢや又。

セメノヅは帽子を揚げて格子戸を開いた。足音や咳が段々遠くなつて、遂に園庭の中へ消えて

了つた。

ユリイは歩みを還した。三十分ほど前には、朗らかにのび／＼して、平和で且つ穩かであつた一切の物が——星空月光、月光を浴びた白楊樹、神祕めいた物影などが、今彼には、恰も宏大な墓地のやうに、不吉に物凄く、又死のやうに冷たく見えた。

我家へ立歸ると、彼れはそつと自分の寢臺へ迂りこみ、庭に面する窓を開いた。生まれてからはじめて彼は考へたのである。彼が克己的に献身的に盡瘁して來た一切の事は、緊要な問題ではなかつたのだ。彼は思つた。いつか一度は彼も亦セメノヅのやうに死んで了ふのであらう。さうしたら、人間種族が彼の力によつて幸福にならなかつたといふ恨みも、又生涯を賭した尊い理想が地上に實現されなかつたといふ恨みも、共にどこかへ消えて了つて、唯一の恨みが——人生が彼に與へてくれた凡ゆる歡樂を味はぬうちに、見る事も聽く事も感ずる事もすべて止んで了ふ、といふ恨みばかりが残るであらう。

が、彼は自らこんな考を起した事を恥ぢた。で努めてそれを忘れて或解釋を求めた。

——人生は戰鬪である。

——然り。けれども誰と戦ふのだ……自分自身と戦ふのでなければ、太陽の下なる自己の一部と戦ふのでなければ……さう考へると、彼れの内心は悲しくなつた。ユリイはもうそんな事は注意しないと思つた。そして他の事を考へようとしたのであるが、彼れの心はどうしてもそこへ還るのであつた。彼は遺憾なく感じた。苦痛にたへなくなつた。忌はしい悲しい涙が自づと

彼れの胸にこみ上げて来た。

五

リヤリヤ・スヴロジツチの招待状を受取ると、リダ・サニンはそれを彼女の兄に見せた。彼女は兄が此招待をば拒^{コレは}るであらうと思つた。而して拒つてくれた方がいゝと希つた。彼女は豫想したのである。月光に満された夜の物柔らかさに、川の上などへ赴くと、彼女はどうしてもザルデインの方へ牽付けられなければならぬやうな氣になるであらう。これは彼女にとつては嬉しくもあり氣遣はしくもある樂しみには相違ないけれども、又彼女は一方で兄の手前をば恥しく思つたのである。兄がザルデインに對して心底から侮蔑してゐるのは明らかであつたから。

が、サニンは直に心よく承諾した。

暑くもなく寒くもなく、カラリと晴れた日であつた。空は透徹るやうで、目が眩むばかりに太陽が反射してゐた。

——丁度いゝんな令嬢方もお出で、せうから、貴兄は其人達とお近づきになれますよ。

——そりや結構だ。と、サニンが受けた。それに天氣が馬鹿にいゝ。出掛けよう。

定刻になると、ザルデインとタナロヴとが、二頭の大きな軍馬に曳かせた、騎兵中隊の大馬車リキイカに乗つてやつて来た。

——リディア・ペトロヴナさん、我々はお待ち申してをります。と、スツキリと色の白いザル

デインが、香水を芬々させながら叫んだ。

リダは領ネリと帯とに薔薇色の天鵞絨をつけた透明な軽い上衣を着て、小走りに石段を降ると、ザルデインに兩手を差出した。若者は其手を握つて、眼の底へキラリとすばしこい光を湛へながら暫くジツと彼女を抑へてゐた。

——行きませう、行きませう。と、男の眼光を見てとつて、リダは嬉しさうに又恥しさうに叫んだ。

二三分たつと、馬車は荒野ステツフへ僅に印ついた道路をば全速力で走り出した。丈の高い草の硬い幹が、轍の下へ折撓められては又起返り、馬の脚をばピシピシと鞭打つた。平原の爽かな風がそよくと馬の鬣を動かしたり、ハリエニシダの大浪小浪を道の兩側へ吹靡かしたりした。

市街を離れると、彼等は今一つの馬車と一緒になつた。それにはリヤリヤとユリイの兩スヴロジツチ、リヤザンツエヴ、ノギコヴ、イヴノヴ、それからセメノヴが乗つてゐた。彼等はギツシリつめ込まれて、互に肱を觸合つてゐたが、それが却て彼等を陽氣にした。たゞユリイだけは昨夜の話が残つてゐるので、セメノヴの前前にあるのが苦痛であつた。セメノヴが他の人々と同様に氣樂らしく戯けたり笑つたりするのが、彼にはをかしくも思はれ不愉快にも思はれた。いろいろな事を彼れの口からきいた後であるから、ユリイは此病人の笑ふのがわからなかつたのである。

——すると、假態ガマタだつたのか知らん。と、セメノヴをそツと視て、ユリイは考へた。人に信じさせるほど悪いのでもないのか知らん。

が、さう考へるとますますわからなくなるので、彼れは強ひれてそれを忘れようとした。双方の馬車から、洒落や冗談や世辭などがたえず交換された。ノギコヴは調子に乗つて馬車から跳下り、リダの側について草の中を走つた。暗黙のうちに大袈裟な友情を示さうとする事が、二人の間の例となつて了つたのである。

たうとう山が見え出した。其上に輝く修道院の圓屋根や白壁がだん／＼にハツキリして來た。山はすべて木叢に蔽はれて、櫛の木の梢が毛のやうに縮れて見えた。それと同じやうな櫛の木が山麓に在る島々の上にも立つてゐたが、其間には廣やかな川が悠々と流れた。

馬は道路から外れて「牧場の新鮮な軟かい草の上を疾驅した。草は馬車の轍に靡き伏した。濕つてぶく／＼した地面からは、間近い櫛の木の薫香と錯雜つて水の匂が蒸發した。

約束の場所なる林中の空地には、先着の人々が芝の上に長々と臥そべつて待つてゐた。大學生が一人と小ロシヤ風の装ひをした二人の若い娘とが、お茶や點心の用意をしてゐるところであつた。

馬は止つた、鼻息を立てながら、尾で横腹を掃きながら。今着いた人々は馬車や外氣や木と水の匂などに昂奮して、二つの馬車から飛下り、林中の空地へ散つた。

リヤリヤはお茶の用意をしてゐた二人の若い娘に接吻した。リダは慎しやかに彼等にお辭儀をしたが、やがて二人に自分の兄のユレイ・スヴロジツチとを紹介した。此二人の男をば娘達は天真爛漫で而も控目勝な好奇の眼を輝かしながらまじ／＼と見てゐたのである。

——さう／＼……貴兄方もまだお互ひに御存じではなかつたわね。と、リダは氣がついて云つた。ユレイ・ニコライエギツチ・スヴロジツチさん、妾は貴兄に兄のヴラデイミル・ペトロキツチを御紹介致します。

サニンは親しげにニコリして、何の注意をも拂つてゐなかつたユレイと握手した。サニンは誰にでも興味が持てたので、新に知己を拵へる事を好んだ。ユレイはこんな處に面白い人物などあぬものときめてゐたので、新知人に對してはいつも冷然としてゐた。

イヴノヴは少しばかりサニンを知つてゐた。そして彼についてきいた事はすべて自分の氣に入つた。で、彼は物珍しさうにサニンを見てゐたが、やがて彼に近づいて話をしはじめた。又セメノヴはたゞ冷やかに手を差伸べたばかりであつた。

——さア、これからよ。と、リヤリヤが叫んだ。片苦しい御挨拶は濟んだわよ。

彼等のうち二三の人々は生面であつた爲、最初お互にやゝてれ合つてゐたのであるが、いざ行厨を開くといふ段になつて、男達が里古兒酒の數杯を傾け、女達が葡萄酒をチョツピリ嘗めると其てれ嗅さは太陽氣に代つて了つた。人々は盛に飲んだ。盛に笑つた。盛に洒落れた、そして時々やんやと喝采した。又互に競走をしたり、陵の頂へよぢ上つたりした。

四邊は静かで朗らかで、木々は緑に美しかつた。それが爲に暗い影や心配や面白からぬ氣分などは誰の心にも残らなかつたのである。

——どうです。と、リヤザンツエヴはせいせい息を切らして走りながら云つた。人間がいつも

此通り駆け出したり躍り上つたりしてゐたら、四百四病の十分の九はどこかへ消えてなくなつちまひますよ。

——そして罪惡もね。と、リヤリヤが附加へた。

——いや、罪惡はどんな時でも人間には附纏ふでせうよ。と、イヴノヅが横鎗を入れた。と、誰もそれをば精神的だとも正當だとも思ふ者はなかつたが、異口同音にどツと笑つた。

人々がお茶を飲んでゐる間に、太陽は傾いて、川がキラキラと金色に輝き、紅く長い斜光が森林の間に延びた。

——皆さん、小舟へ乗りませう。と、リヤリヤは裳裾を褰^{から}げて、最先に立つて、岸邊の方へ駆け出しながら叫んだ。さア、誰が一番早く着くか！

人々は彼女に續いた。或者は走り、或者は適度の歩調をとつて、一同どツと笑ひ崩れながら、雑色の大端艇の中へ落ちついた。

——解纜よ。と、若々しい聲でリヤリヤが叫んだ。其聲はいかにも陽氣で苦勞などはなさうに響いた。

小舟は其後ろへ大きな畝^{うね}を残しつゝ、水の上を這つた。と、其畝は川岸の方へ散亂した。

——ユリイ・ニコライエギツチさん、なぜ貴兄は黙つてらつしやるのし。と、リダはスヴロジツチに訊いた。

——私は何にも云ふ事がないのです。と、ユリイはニッコリした。

どうしてゞせう？ と、男達の氣に入るやうに、頭を後へ傾けながら、リダは媚態^{しな}を作つた。
——ユリイ・ニコライエギツチ君は下らん事をベラベラ喋くるのがお嫌ひです。と、セメノヅが云つた。このお方は……

——あゝさう、このお方は眞面目な問題でなければねえ。と、リダが遮つた。

——御覽なさい、あすこに眞面目な問題がありますよ。と、岸邊を指さしながら、ザルデインが叫んだ。

人々は其方向の嶮しい場所に立つねぢくれた古い樫の木の根方から、丈の高い雑草に蔽はれた狭苦しくて陰鬱な黒い穴が一つ、差覗いてゐるのを見た。

——あれは何ですか。と、此國の人間でないシヤフロヴが訊いた。

——洞窟です。と、イヴノヅが答へた。

——どういふ洞窟ですか。

——わからんです……人の噂では、昔あすこに偽造貨幣の工場があつたと云ひますよ。常例によつて彼等偽造者は悉く捕縛されたさうです……怪しからん「常例」ですな。と、イヴノヅが附加へた。

然しさ……いふ常例でもなかつたら、君はすぐ二十哥^{コベク}の偽造貨幣を打出す工場などを拵へるでせう。さうぢやないですか。と、ノギコヴに皮肉を云つた。

——哥^{コベク}? ……なアに……留^{ルナル}ですよ。君、留^{ルナル}です。

——へ、え……と、ザルデインは軽く肩を聳かしながら云つた。彼はイヴノヴが嫌ひであつた。そして其冗談がわからなかつた。

——さう……ここで彼等が残らず捕縛されたので、あの洞窟は閑却されて了つたわけなのです。で段々に頽廢して、今では誰もすあこへ行く者はありません。子供の時分、私はよくあすこへ攀つて見たものです。それは中々面白い處ですよ。

——さうでせうね、きつと。リダが叫んだ。ドクトル・セルゲイギイチさん、貴兄は大膽だから、一寸行つて御覽なさいよ。

彼女の聲は異常に響いた。恰も公然と一同の前でザルデインを嘲弄して、それでかのジリジリ自分を陥れようとする危険な彼れの蠱惑手段に返報するつもりでもあるかのやうに。

——何の爲にです？ と、どきまぎしながら、ザルデインが訊返した。

——私が行きませう。と、ユリイが申出でた。けれども、人が彼を見え坊と解りはせぬかと思つて、彼は赧くなつた。

——うむ、そりや偉い！ と、イヴノヴが稱讃した。

——君も行くのでせう？ と、ノギコブが彼に訊いた。

——いや、僕は寧ろ爰に座つてあよう。

皆は笑つた。

小舟は岸邊に着いた。と、冷たい空氣が黒い穴から吹いて來て、彼等の頭を掠めた。

——ユリイさん後生だから馬鹿はしないで頂戴よ。と、兄の傍へ擦寄つてリヤリヤは繰返した本當に馬鹿をしないで……

——無論、馬鹿さ。と、ユリイはおどけた調子で受けた。セメノヴ君、蠟燭をとつてくれないか。

——どこにある？

——君の後ろの、籠の中にある。

セメノヴは冷然と籠から蠟燭を取出した。

——貴兄、眞面目にお出でになるの？ と、胸隔のガツシリした、大柄な、美しい乙女がユリイに訊いた。リヤリヤは彼女の事をジナさんと呼んでゐたが家族名カルサギナといふのであつた。

——無論です。行つたつていゝでせう？ と、平氣を装つて、ユリイは答へた。が、彼は政治上の危険な遊説などの際して、同様に努めて平氣を装つた事を想出したのである。と、此追憶が彼には不快であつた。

洞窟の入口は眞暗でじめ／＼してゐた。サニンは其邊を見廻して、ブルルと云つた。彼はユリイが人に見せつけたいばつかりに、不愉快な又危険な場所へ降りてゆくのを滑稽だと思つた。ユリイは誰の方へも眼をあげないやうにして蠟燭に火を點した。ふと心の底に、自分は滑稽ぢやないか知らん、といふ考が浮び出て、彼は身震ひしたが、又同時にかうも思つたのである。自分は滑稽どころか却て反對に立派な態度である。驚嘆すべき態度である。従つて女達の心に楽しく

もあり心配でもあるかの神祕的の好奇心を惹起せしむるに足るであらう。彼は嘲笑をうけない用心にニコニコして見せながら、蠟燭のもえ出すのを待つてゐた。それからさくさくと暗い中へ這入つた。と、蠟燭は消えたやうになつた。人々は實際彼れの身を氣遣つた。が、同時に好奇の眼を輝かしてもゐたのである。

——氣をおつけなさいよ、ユリイ・ニコライエギツチさん。と、リヤザンツエヴが叫んだ。

——時々狼などがあますからね。

——私はピストルを持つてゐます。と、ユリイは答へた。地面の下の彼れの聲は變にポヤツとして響いた。

彼は用心しいく徐に進んで行つた。四壁は低く凹凸して、酒窖カクレの中のやうに濕ッぽかつた。途は時々爪先上りになつたり、だら／＼と降つたりした。一度二度ユリイは穴の中へ陥はまりさうになつた。

彼は寧ろ引返した方がよさうに考へた。或はずつと奥まで見届けて來た體を裝ふ爲、暫く坐つて時のたつのを待つてやらうかとも思つた。

忽ち粘土の上を漕る或足音とせい／＼いふ呼吸とが彼れの後方にきこえた。誰が彼れの跡を跟いて來たのである。ユリイは蠟燭を上げて頭上を見た。

——ジナイ・ダバゾヴナさん！ と、彼は吃驚して叫んだ。

——え、妻です。と、或穴を跨ぐ爲に上衣を褰ひしあげながら、カルサギナは樂しげに答へた。

ユリイは其人が慥にかのポツチャリと肥つた快活な美しい乙女であつた事を嬉しく思つた。彼は眼の中へ微笑を湛へながら、ジイツと彼女の姿を視た。

——參らうぢういせんか。と、乙女はやゝ體裁わるさうに云つた。

ユリイはもう危険の事など考へず、カルサギナの足元をば注意深く照らしながら從順しく氣輕に進んだ。

洞窟の壁面は天笠色の肉桂をしたじく／＼の粘土であつた。二三箇所人を脅やかす様に窄すままつたところもあつたが、其他は樂々と通れるほど兩側が離れてゐた。又そちごちに砂礫や土塊の盛上つてゐるところには、黒い穴が掘返されて、パツクリ口を開いてゐた。若い人達の頭上には、大きな土の塊が一つ、落ちんばかりに吊下つてゐたが、それがたゞ不思議に力の籠つた或釣合を保つて崩れもやらず傾いてゐた。其有様を見ると思はずぞつと總毛立つた。

で、空氣の重苦しい、暗黒な、此大洞窟の凡ての通路は、皆一つの場所へ落合つてゐた。ユリイは出口を探す爲に其通路をばぐるぐる巡つて見た。影法師や火影が彼れの後ろにゆら／＼と揺いてゐたが、やがて眞暗な中へ見えなくなつて了つた。成程、二三の出口もあつたけれど、一樣に皆塞がつてゐた。

一隅に木の板ぎれが腐つてゐた。それは地中から發掘されて、そこで黴の生へた、古い棺桶などの板きれらしくも思はれた。

——面白い物は何もありませんな。と、ユリイは思はず聲を低くして云つた。かの大きな土塊

もあり心配でもあるかの神秘的の好奇心を惹起せしむるに足るであらう。彼は嘲笑をうけない用心にニコニコして見せながら、蠟燭のもえ出すのを待つてゐた。それからさゝくさと暗い中へ這入つた。と、蠟燭は消えたやうになつた。人々は實際彼れの身を氣遣つた。が、同時に好奇の眼を輝かしてもゐたのである。

——氣をおつけなさいよ、ユリイ・ニコライエギツチさん。と、リヤザンツエヴが叫んだ。

——時々狼などがあますからね。

——私はピストルを持つてゐます。と、ユリイは答へた。地面の下の彼れの聲は變にポヤツとして響いた。

彼は用心しいく徐に進んで行つた。四壁は低く凹凸して、酒窖カクレの中のやうに濕ッぽかつた。途は時々爪先上りになつたり、だら／＼と降つたりした。一度二度ユリイは穴の中へ陥はまりさうになつた。

彼は寧ろ引返した方がよさうに考へた。或はずつと奥まで見届けて來た體を裝ふ爲、暫く坐つて時のたつのを待つてやらうかとも思つた。

忽ち粘土の上を溼る或足音とせい／＼いふ呼吸とが彼れの後方にきこえた。誰が彼れの跡を跟いて來たのである。ユリイは蠟燭を上げて頭上を見た。

——ジナイ・ダバヴロヴナさん！ と、彼は吃驚して叫んだ。

——え、妾です。と、或穴を跨ぐ爲に上衣を褰ひらきあげながら、カルサギナは樂しげに答へた。

ユリイは其人が慥にかのポツチャリと肥つた快活な美しい乙女であつた事を嬉しく思つた。彼は眼の中へ微笑を湛へながら、ジイツと彼女の姿を視た。

——參らうぢういませんか。と、乙女はやゝ體裁わるさうに云つた。

ユリイはもう危険の事など考へず、カルサギナの足元をば注意深く照らしながら從順しく氣輕に進んだ。

洞窟の壁面は天笠色の肉桂をしたじく／＼の粘土であつた。二三箇所人を脅やかす様に窄すままつたところもあつたが、其他は樂々と通れるほど兩側が離れてゐた。又そちごちに砂礫や土塊の盛上つてゐるところには、黒い穴が掘返されて、パツクリ口を開いてゐた。若い人達の頭上には、大きな土の塊が一つ、落ちんばかりに吊下つてゐたが、それがたゞ不思議に力の籠つた或釣合を保つて崩れもやらず傾いてゐた。其有様を見ると思はずぞつと總毛立つた。

で、空氣の重苦しい、暗黒な、此大洞窟の凡ての通路は、皆一つの場所へ落合つてゐた。ユリイは出口を探す爲に其通路をばぐるぐる巡つて見た。影法師や火影が彼れの後ろにゆら／＼と揺いてゐたが、やがて眞暗な中へ見えなくなつて了つた。成程、二三の出口もあつたけれど、一樣に皆塞がつてゐた。

一隅に木の板ぎれが腐つてゐた。それは地中から發掘されて、そこで黴の生へた、古い棺桶などの板きれらしくも思はれた。

——面白い物は何もありませんな。と、ユリイは思はず聲を低くして云つた。かの大きな土塊

が上から壓迫するので、彼は息苦しかつたのである。
 — 同じ事ね。と、炎ゆるやうな眼で周囲を胸^{みまは}しながら、カルサギナは囁いた。
 彼女は怖くなつたのである。で、無意識にユリイの側へ擦寄つたが、恰も彼に保護を求むるものやうであつた。

ユリイはそれと氣がついた。と、ぞつと嬉しさが込上つて来て、乙女の美しさと繊弱とそゞろ愛憐の情を生じたのである。

— 生理にされたやうね。と、カルサギナは續けた。いくら聲を出したつて誰にもきこえないでせう。

— 全くです。と、ユリイは微笑んだ。

忽ち彼はくらくくと眩暈^{めまひ}がした。華奢な小ロシア風の肌衣^{はだぎ}で纔に蔽はれた、若い娘のふくよかな胸と其肉付のいゝ撫肩とが斜めに見えた。と、彼女は全く自分の手の中にあるのだ、而も二人の聲は何人にもきこえないのだ、といふ考が、猛烈に彼れの心へ閃めいたのである。彼は一時に目がくらんだ……が、同時に我と我心を抑へつけた。彼は思った。女を手籠めにするなど、は以ての外である。彼、ユリイ・スヴロジツチなる者にとつては、全然許すべからざる事である。そこで、彼れの四肢五體が激烈な情慾に炎上つた瞬間に、生命を賭してもと思ひつめた事をば決行する代りに、彼は云つた。
 — ヤツつけて見ませう。

この異常な聲の顫動が自分ながら恐しかつた。そしてカルサギナがどうやら自分の心を推察したやうにも思はれたのである。

— 何をなさるの？

— 發砲して見ようと思ふのです。と、ユリイはピストルを拿出^{とりだ}しながら辯明した。

— 崩れやしないでせうか。

— どうだかわかりません。と、ユリイは崩れる氣遣ひのない事はわかつてゐたのだが、さう答へたのである。貴嬢、恐いですか。

— いゝえ……さア……お撃ちなさい……と、カルサギナはちよいと身を退けながら云つた。

ユリイは腕を伸ばして發砲した。火花が一すぢ暗中を劈いた。二人は濛々たる煙に包まれた。と、森嚴な低い反響がジーンと長く尾を曳いて、山の方へ消えた。が、頭上の土塊は微動もせず依然として吊下つてゐた。

— 先づこんなものですな。と、ユリイが云つた。

— ぢや、參りませう。

二人は歩みを還した。と、カルサギナがユリイに背中を向けたので、其の丸々とした丈夫さうな臀部を見ると、又前と同様な Desir. が彼れの血脈中にむら〜と炎出して、彼はそれを抑へるのが苦痛であつた。

——ねえ、ジナイダ・バヴロヅナさん。と云つて、彼は自分自身の音聲に悔とした。同時に今持出さうとしてゐる問題が我乍ら恐しくもなつたが、わざと平氣を装つて云つた。爰に一つ面白い心理上の問題があるのです。貴嬢は私と一緒に歩いてゐて、どうしても恐くなかつたのですか？……貴嬢は今御自分で仰しやいましたね、我々がいくら叫んでも誰にもきこえやしまいつて……然るに貴嬢は私を御存知ないのです……

カルサギナは暗い中でサツト赧くなつた。が、何とも答へなかつた。

ユリイは苦しげに息をついた。彼は段々に深みへ漣まじりこ込んでゆく時のやうな感じがした。そして自ら愧ぢた。

——妾は貴兄を正しいお方だと信じてをりました……と、乙女は微に口籠つた。

——で、若し貴嬢のお考が間違つてたらどうなさる？ と、炎ゆるやうな鋭い情熱に充されながら、ユリイが受けた。ふと此會話が甚だ美しく又甚だ異様に彼には思はれたのである。

——其時には……妾は身を投げて了ひます……と、カルサギナはいよいよ赧くなつた。一しほ低い聲で云つた。

此言葉をきくと等しく、優しい〜哀憐の情が、ユリイの胸に浸徹つて、其昂奮は頓に鎮まり悦ばしい長閑な心持になつた。

——何といふ秀れた女だらう！と、彼はしみ〜思つた。そして其清らかな情感に觸れた嬉しさに、彼れの眼から涙がハラハラと落ちた。

カルサギナは自分の答がいかにも得意らしく、且ユリイが無言のうちに其答をば褒めてゐる様子なので、嬉しさにニッコリして見せた。

二人が出口の方へ進んで行く間、乙女は、ユリイの言葉が少しも自分の心を傷けず、却て身にしみて樂しげに感じられた事をば、怪しく胸を騒がしつゝ、我と我が心に訊いて見たのである。

六

そとに残つた人々は、カルサギナとユリイの問題について冗談を云ひながら、洞窟の口で暫く待つてゐるが、やがて岸根傳ひに散つて了つた。男達は巻煙草に火を點けて、水中へ憐寸を抛込んで、川の表面へ擴がつてゆく規則正しい大きな波紋などをまじ〜と噴みまもつてゐた。

リダは小聲で歌を唱ひながら、草の上を歩いた。又帶に兩手を當て、黄ろい半靴を穿いた其小さな足首で、舞踏の步調をとつた。

リヤリヤは花を摘んでリヤザンツエヅに投付け〜、さて男の眼へ接吻した。

——待つてゐる間に一杯やらうぢやありませんか。イヴノヅはサニンに云つた。

——そりやい、考だ。と、サニシは賛成した。

二人は小舟の中へ這入つて、麥酒瓶の栓を抜き、チビリ〜やりはじめた。

しやうもない酔ツばらひ！ と、リヤリヤは彼等に草束を打突けながら云つた。

——素敵だ！ と、たまらなく嬉しさうにイヴノヅが叫んだ。

サニンは笑ひ出した。

——僕は人間共がアルコオルに對して防衛しようとしてる事をいつも驚嘆してゐるのだ。と、彼は面白さうに云つた。僕の考によればな、醉漢こそ然るべき生き方を知つてゐる唯一の人間だ。

——然り、獸の如くにね。と、ノギコヅが岸から叫んだ。

——或は然らん。と、サニンは應じた。けれども、醉漢は自己の欲するまゝを行ひ唯一の人間だよ……唱ひたいと思へば唱ふし、踊りたくなれば踊るのさ……そして自己の歡樂を耻ぢとしない。

——それから又時々喧嘩も始めます。と、リヤザンツエヅが突込んだ。

——そりやさうなる。けれども、それは飲み方を知らんからさ……邪念がありすぎるからさ。

——君は酔ッばらつてる時喧嘩をしないかね？ と、ノギコヅが訊いた。

——しないね。と、サニンは答へた。僕は寧ろ酔はぬ時喧嘩する……酔つてりや、僕は世の中で最も善良な人間さ。何となれば其時や一切の厭な事は忘れてるからね。

——人間は皆同じぢやありませんまい。と、リヤザンツエヅが再び突込んだ。

——同じでないのが人間にとつての損害だ……僕に限つちや他の者などは絶対に關係しないね。

——さうは云へるものぢやない。と、ノギコヅが云つた。

——なぜ云へんのだらう？ 若しこれが眞理であるならばね？

——美しい眞理ね。と、頭を揺すりながらリヤリヤが叫んだ。

——我輩の知れる限りに於ける最も美しい眞理だ。イヴノヅはサニンの代りに答へた。

——リダは聲高に歌を唱つてゐたが、ふと心配さうな顔をしながら唱ひやめた。

——あの人は随分御ゆつくりね。と、彼は云つた。

——ゆつくりしてたつていゝぢやないですか。と、イヴノヅが揚足をとつた。何も急ぐ必要はない。

——ジナさんは女丈夫だから恐れるところもなし……又勿論非難も受けますまい。と、リダは皮肉に突込んだ。タナロヅは何か自分で考へて思はず吹出して笑つたが、ハツト氣がついて狼狽した。

——リダは腰の上へ手を當て軀の調子を取りながら媚態しなを作り、ジツとタナロヅを見やつた。

——どうしたんでせう、本當に？……きつと穴の中で面白がつてゐるんだわと、彼女は肩を聳かしながら、謎のやうに云つた。

——シツ。と、リヤザンツエヅが遮つた。

或微かな爆聲が黒い穴の中から洩れて來たのである。

——銃聲！ と、シャフロヅが叫んだ。

——何だつてんでせう？ リヤリヤはリヤザンツエヅの腕に絡付き、はや泣聲になつて訊いた。

——安心おしなさい。よしんば狼に出會つたところが、危険などはありませんよ。狼は今頃に

なると穏しいものですからね……又、一時に二人へ跳懸るものではありません。と、リヤザンツエヴは説明したが、心の中で、ユリイも馬鹿な真似をしたものだ、と思つて不快に感じた。

——實にどうも！、と、シヤフロヴも氣遣はしさうに呟いた。

——あゝ、來たわ、來たわ、騒ぐのはおよしなさいよ。と、リダは嘲るやうに唇を動かしながら云つた。

成程足音がきこえて來た。と、間もなく暗い中からカルサギナとユリイが姿を現はしたのである。

ユリイは蠟燭を消して、一同の方へニコニコして而も無氣味さうな笑顔を向けた。彼は人々が自分の行爲をばどう思つてゐるか量りかねたのである。彼は粘土に塗れてゐた。カルサギナも壁面に打突つたので、又肩一面汚れてゐた。

——やア、どうだつたね？ と、セメノヴが面白くもなささうに云つた。

——中々變つてますよ。又見事であります。と、ユリイは何か辨疏でもするやうな不安な調子で答へた。たゞ坑の道が塞がつてゐたので、さう奥までゆけませんでした。又腐つた板片などがありませんよ……

——貴君方は銃聲をおきゝになつて？と、カルサギナはいき／＼と眼を輝かしながら訊いた。

——諸君、僕等はまだ酒を平げて了つた。ですつかり快い心持になつてゐるんです。と、小舟の中でイヴノヴが叫んだ。出掛けませう。

小舟が河心へ出ると、月は既に昇つてゐた。不思議なほど透明で且つ物柔らかな宵であつた。

空に、川に、高く又低く、星の燐光が燦然として揺めいた。舟は恰も茫漠として底のない二大深淵の間に泛んでゐるものゝやうであつた。水中にも又岸上にも、森が黒く蔽さつて、いとゞしく神祕めいた。鶯が啼いたので、人々は静まり返つた。そして今啼いたのは鳥ではなくて、幸福な、聰明な、空想に富んだ何者かであるやうな心持がしたのであつた。

——なんて美しいんでせう。と、リヤリヤはカルサギナのふつくらした温い肩の上へ頭を寄せながら、眼を上げて叫んだ。

人々は再び静まり返つて啼音をきいた。玲瓏たる鶯の顫聲は、森に籠り、川に漾ひ、月に煙る恍惚とした牧場の花や小草の上を涉りながら、遙に遠い冷やかなる星空へ消えた。

——どうして啼くんでせう？ と、リヤリヤは再び云ひながら、リヤザンツエヴのガツシリした膝の上へ首を落した。と、其接觸が彼には恐しく又嬉しくも感じられたのである。

——勿論戀の爲です。と、リヤザンツエヴは、自分の膝の上へ頼もしいに載せた。軟かい、温かい、其小さな掌をば、優しく自分の手で蔽ひながら、半ば冗談に、半ば眞面目に、さう答へた。

——かういふ晩には善い事も悪い事も考へたくないわね、と。リダは自分の胸に答へながら云つた。

彼女はかの面白さうな危い戯れをやつて善いものか、或はやつて悪いものか、とつおいつしてゐたのである。で、月に照らされてゐる爲に、眼の中へ淡黒い光を堪へて、一層男らしくも見え

又一層美しくも見えたザルデインの顔をば、彼女はジツと瞻りながら、悩ましい心弱さと滴るばかりの遺瀨なさを身にしみくと感じた。

——全く別問題です。と、イヴノヴが彼女に答へた。

サニンは自分と向合つたカルサギナの膨らんだ胸と、眞白な頸とに眼を据ゑてニコリした。山の淡い影が小舟の上へ落ちた。と、銀色に青い水脈をば後へ長く曳きながら小舟が清光のうちへ潜り入つた時、凡ゆる物が以前よりは大きく、以前よりは自由に、且つ以前より輝かしくなつたやうに思はれた。

カルサギナは大きな麥藁帽子を脱いだ。そして其膨らんだ胸をば一層膨らまして唄ひ出した。量はやゝ乏しいけれど彼女の聲は高くて旨味があつた。彼女は美しい物悲しいロシア歌を唱つたのである。ロシア歌は概して美しく物悲しいのであるが。

——實に感じがいゝ。と、イヴノヴは呟いた。

——頗る佳い。と、サニンも云つた。

カルサギナが唄ひをはると、一同喝采した。其拍手の音は暗い森に、川の表面に凄じく反響した。

——もつと唱つて頂戴よ、ジノチカさん。と、リヤリヤが迫つた。いつそ貴嬢の歌を朗吟して下さいな。

——や、貴嬢は詩人でもあるのですか。と、イヴノヴが訊いた。どうして神はたつた一人の人間に、さういろんな天才を授けるんでせうなあア。

——いけなくつて？ と、カルサギナはてれ隠しに冗談を云つた。

——いや、いゝですとも。と、サニンが答へた。

若し爰に一人の乙女があつて、それで貴嬢のやうに美しく、又貴女のやうに人を牽付ける事が出来たら、必ずもうそれ以上は望みますまいよ。と、イヴノヴは身を入れて云つた。

——さア、お吟じなさいよ。ジノチカさんてば！ と、戀にウツトリとなつてゐたリヤリヤが頻に懇願した。

カルサギナは極りわるさうに微笑みつゝ、軽く水の方へ顧向いたが、やがてそれ以上は臆してもゐず、同様に朗らかな顫聲で吟じはじめた。

戀人よ、戀人よ、我は語らじ、

我は語らじ、我がいかに戀するを。

我はとづわが戀の眼を

わがひめごとを祕置かむとて。

あゝこのひめごと、知る者はあらじ……

たゞ悩ましき白日のみ、

たゞしめやかに青き夜のみ、

たゞ黄金なす星の眸子のみ、

たゞ夜のむつごとくに焦れたる、
鮮き葉枝の網目格子のみ

なべてを知れど……さて語らじ
わがひめごとを我戀を……何事をも。

人々は又新に心を奪はれて、狂ふばかりに喝采した。それが詩が美しいからではなかつたので、人々の心の底に戀や幸福や甘い憧憬などが溢るゝばかりに充ち満ちてゐたからであつた。

——あゝ夜よ。あゝ白日よ、而して汝、大いなるジナイダバヴロヅ嬢の双眼よ、願くは僕の爲に云つてくれたまへ、僕は果して幸福の絶頂に達してゐるかどうか。と、イヴノヅは不意に絶叫した。恰も人々を戦慄させた程、高らかに又だしぬけに、バスの聲で絶叫したのである。

——僕は云はう、君は絶頂になど達してはゐないよ。と、セメノヅが叫んだ。
——あ情けない、と、イヴノヅは泣き出しさうに云つた。

皆んなは笑つた。

——妾の詩はいやでせう？ と、カルサギナはユリイに訊いた。

彼女の詩にはオリジナリテがない、そして有觸れたいゝんな詩によく似たものだ、と、ユリイは思つたけれども、カルサギナがいかにも美しかつたので、それに彼女が其おづくした意味ありげな眼でいかにも可愛らしく彼を見たので、彼は眞顔に答へた。

——私には美しく思はれましたよ。中々調子がよく出来てゐるやうです。

カルサギナは此賞讃の辭が嬉しくてたまらず、自分ながら呆れたやうにニッコリして見せた。

——兄さんはまだジノチカさんがよくお分りにならないのね。と、リヤリヤが云つた。此お方はどこからどこまでお美しく且音楽的であらうしやるわ。

——さうですかア！ とイヴノヅは嘆じた。

——さうですとも。と、リヤリヤは恰もそれを證明するやうに主張した。お聲が美しくて音楽的ですし、此お方自身が美其物ですし、詩がまた美しくて音楽的ですし、お名前までがお美しくて音楽的ぢやありませんか。

——實にもう、妙絶、壯麗、薫然たるものですなア！ と、イヴノヅはウツトリとなつて云つた。其餘は諸君の御推察に委せます。

カルサギナは褒めちぎられて眞紅になり、嬉さうに笑つた。

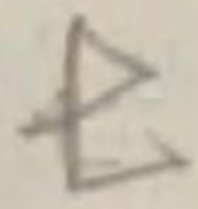
——そろ／＼歸りませうよ。と、リダは冷やかに云つた。少女ばかりが無性に褒め立てられるので、彼女は面白くなかつた。カルサギナなどよりも、自分の方がもつと美しく、もつと面白く、又もつと學識がある、と彼女は考へてゐたからである。

——お前は何にも唱つてきかせないのかい？ とサニンが訊いた。

——いゝえ。と、リダはむツとして答へた。妾はそんな柄ぢやありません。

——ほんに、そろ／＼歸りませう。と、リヤザンツエヅも亦云ひ出した。彼は明朝早く起きて

病院へゆき、死體の解剖を手傳はなければならなかつた事を想出したのである。他の人々はまだもつとゐたいやうな様子であつた。で、歸途は一同疲れてたゞ満足らしく一言も物を云はなかつた。もう見えなくなつた荒原の雜草は再び馬の脚部を鞭打つた。車輪に蹴立てられた塵埃は馬車の後で雪のやうに卷上つた。月の光輝に青く煙つた圃地は、坦々として荒寥として其際涯を知らなかつた……



三日すぎでの夕暮、リダは疲れきつてシヨンポリと家へ還つた。彼女の胸は惱ましげに結ばれてゐた。彼女はどこか遠い／＼知らぬ所へでも行つて了ひたいやうに思つたが、さて何方へ足を向けてよいやら分らなかつたのである。

自分の部屋へ這入ると、彼女はつと立止つて、両手を組むなり、眞蒼になつて、ジツト牀板の上を見つめた。彼女はザイルデンとの關係にあまり深入りしすぎた事をば不意と氣がついたのである。自分よりは遙に人格の劣つてゐる、かの淺墓な、輕佻な士官が、取返しのかぬ例の心弱さ以來、自分の心へ喰入つて來た事を感じると、彼女は始めて屈辱を覺えたのである。それからといふものは、男に來てくれと乞はれるたび、彼女はもう拒りきれなくなつた。もう男を蹴弄する事などは思ひもよらず、男のまゝになつて肆に接吻をせ、又ニッコリしてはそれを引はづしなから、さてどうしても其野卑な抱擁の奴隷とならぬわけにはゆかなかつたのである……

どうしてそんな風になつて了つたものか、彼女にはまだ分らなかつた。で、いつも酔はされてあるやうな又同時に息だはしいやうな感觸を覺えてゐたのだが、一朝、焰がパツと炎上つて、それが頭へ衝上るが最後、彼女は勿ち或微白い霧にでも引包まれるやうな心持になるのであつた。そして其微白い霧は、かの深淵の中へ躍込まうとする激烈な *desire* だけは別にして、其他の一切の感情をば絶滅させて了ふのである。

足の下には大地も姿を隠して了ふやうに思はれた。彼女の體はぐつたりして力がなくなつてゐた。彼女はたゞ自分を唆かす、薄暗い、底光りのする、厚かましい眼ばかり見た。……

さういふ事を憶出して、リダはぶる／＼と身慄ひした。と、肩を聳やかして、諸手で面を蔽したが、やがてよろ／＼と部屋を横ぎりざまに、窓をあけて、庭上に懸つた月の姿を暫くジツと打目成つた。どこやらの木がぐれで、鶯が遙かに啼いてゐた。

彼女は人知れぬ憂愁に惱まされた。それは臆氣な情慾と傷けられた自尊心とが絡みあつた、遣瀨ない、不思議な感じであつた。で、其感じは、彼女が己惚れた愚かな男の爲に自分の生涯を汚した、といふ考から、又其失策は偶然につひさうなつた、馬鹿げきつた、陋しい事にすぎなかつたのだ。といふ考から生じたものである。

彼女の未來にはさまざまな威嚇が襲ひかゝつてゐるやうに思はれた。けれども彼女は強ひて剛愎な態度を裝つて、さういふ不吉な豫想をば打消して了はうと努めた。

——さうよ、して了つたんだわ……で、跡は？……と、眉を擧め乍ら彼女は考へた。で、かの惱ましい歡樂と此棄鉢な言葉に自ら酔ひ乍ら、あんな事はみんな何でもありやしない……妾がしたいと思つて、した事だわ……そしてあんなに嬉しくて……たまらなかつたんだもの……組合はせたまゝの手を前方へ差出して、彼女はぶる／＼顫へながら身を伸した。「あんな嬉しい思ひをしなかつた方が却て馬鹿だつたかも知れない……考へまい、考へまい……しちまつたんだもの、もうどうにもなりやしない。」と、彼女は太儀らしく窓から離れ、着物を脱ぎはじめた。で、裳着の紐を解くと、それがサラリと下へ落ちた。

——だが、人間はたつた一度しきや生きないものだわ。と、裸の肩や二の腕をば優しく撫でる冷たい空氣に觸れて、彼女はまだ顫へながら呟いた。正式の結婚まで待つてゐたら何が得られるだらう……それが何の役に立つんだらう……同じ事ぢやないかしら……そんな事を肝腎な事だなんて思ひつめるのは馬鹿げてやしないかしら……

そして其最も面白い部分は既にかの戯れの際に取入れられて了つたので、今度こそは鳥のやうに自由自在となり、それ以上の歡樂や興趣や幸福をば未來に期待する権利があるのだ、と彼女には思はれたのである。

——思ふがまゝに戀を得て……思ふがまゝに戀をすてむ……と、彼女は小聲で唱ひながら、自分の聲はカルサキナノ聲よりはずつと美しいと考へて得意であつた。

——さうだわあんな事は下らないわ……氣が向けば悪魔にだつて身を任すわよ。と、彼女は

我知らずやけになつて、自分の胸に答へた。で、裸の腕を頭の後ろへ投還すと、胸が鳴るほど活潑に身を起した。

——リダ、お前はまだ臥ないのかい？ と、窓の後からサニンが聲をかけた。

リダはギョツとして身慄ひしたが、すぐ我に還つて、大きな布帕で肩を蔽ひ、ニッコリしながら窓の方へ行つた。

——吃驚させたわねえ……と、彼女は云つた。

サニンは近寄つて、窓板の縁へ肱を突いた。そして眼をギロ／＼輝かしながら、ニヤリと笑つた。

——惜しい事をしたものだ。と、彼は低い聲で面白さうに云つた。

リダは其意を得ぬやうに首を擡げた。

——布帕のない方が、ずつと美しかつたのに。と、サニンは優しい聲で意味ありげに説明した。

リダは呆れて兄の顔を見つめながら、本能的に布帕で身を裹んだ。

サニンは笑ひ出した。リダはどきまぎして窓板へ肱を突いた。と、兄の熱い息が彼女の頬に觸れたのである。

——お前は美しいよ。と、彼が云つた。

リダはチラリと兄の顔を見たが、其顔に現はれた意味が何となくよめたやうに思ふと、ゾツとした。彼女は慌て、身を外向けたが、自分を凝視する兄の眼をば軀中に感じたのである。そしてそれが實に見苦しく又實に怖しく彼女には思はれた。同時に氷のやうな寒さが身内へ擴がつて、

彼女の心臓はどきどきと鳴った。凡ての男はやはりそんな風な眼をして彼女を見つめたのだが、それは彼女には不快ではなかつた。が、其眼光が兄から出て来ると、どうしても有るべからざる事のやうに思はれるのであつた。彼女は努めてニコニコして見せながら云つた。

——妾は知つてます……

サニンは黙々と彼女を眺めてゐた。彼女が窓へ眩を突いた時に、其襦衣と其搭布とが薄つたので、彼は横合から、月に照されて眞白な、極めて艶な彼女の胸をば、少しばかり見る事が出来た。人間は恒に自分と幸福との間へ持つて行つて萬里の長城を築いてゐる。と、サニンは低く震へた異常な聲で云つた。其聲はリダをわな／＼と身慄ひさせたのである。

——どんな風にでせう？ と、彼女は暗い庭から眼を離さずに、微かな聲で受けた。何か口には云出せぬ或結果が生じさうに思はれて、彼女は兄の眼光に出會ふのを恐れたのである。

同時に彼女はもう疑はなかつた。其事は何であるか分つた。で、其事が淺猿しくも思はれ又樂しくも思はれたので、彼女は恐しくなつたのである。

彼女の頭は熱した。彼女はもう何も見なかつた。彼女は顚顚の毛を掠める炎ゆるやうな息を感じ、好奇心を起したり嫌惡の念を起したりした。同時に布帕の下の裸身をば鷺鳥の羽根か何かで撫でられるやうな心持もした。

——まア、こんな風にね……、とサニンは答へた。と、其聲は噤と杜絶えた。

リダは軀中に電氣が通るやうに感じた。彼女は身を眞直にして、無我夢中で卓子へのし懸ると、

不意に洋燈を消した。

——寝る時刻だわ。と云つて、彼女は窓を閉めた。

洋燈が消えると、庭は一層明るく見えた。と、サニンの姿が月の白い光を受けていよ／＼ハツキリと浮上つた。彼は露のしとゞな草深い中に立つてゐた。

リダは窓を離れて、器械的に寢臺の上へ行つて身を落した。一切の事が彼女の心を搔亂した。さまざまな考へがごつた返した。彼女は草をさわがせて遠去りゆくサニンの足音をきいた。そしてどき／＼と鳴る心臓の上へ手を當てた。

——どうしたんだらう？ と、彼女は忌々しげに考へた。妾は氣が狂つたんぢやないかしら？ なんて猥らしいんだらう！ ふいと云つた何でもない言葉が、すぐもう……：そんな風にとれるなんて……：妾は色情狂にでもなつたのかしら？ 妾のした事が、こんなに嫌らしい又こんな腐つた根性にならうとは夢にも思はなかつた！ どうしてこんな事を思はなければならなくなるんだらう……

と、枕の中へ頭を埋めて、リダは忍泣きに泣いた。苦がい涙を流して泣いた……

——何だつて妾は泣くんだらう？ と、彼女は涙の出るわけが分らず、而も自分が不幸で可憐さうで氣がひけてならぬので、さう自分の心へ訊いて見た……

彼女はザルディンに身を任かした爲に、もう以前のやうには堂々たる清淨な處女ではなくなつたから、それで泣いたのである。又彼女は兄の眼のうち人に脅かす人を侮蔑する或ひらめきを見たので泣いたのである。彼女は考へた。前には兄は決してあんな風に見た事などはなかつたものだが、たゞ自分が失策をしたばかりで、あゝなつたものに違ひない。

が、何よりも彼女を苦しめた事は、猛烈に彼女を傷つけ彼女を悶えさせた事は、彼女が *Femme* (女)であつたと氣がついた一事であつた。又彼女が美しく若くて健康である間は、男達に身を任かす爲に歡樂を得させる爲に、自分の最上の能力を費やすのであらうと氣がついたからであつた。又其歡樂が彼女にとつても又男達にとつても無量なものであればあるほど、いよゝゝ彼女は男達に侮辱されるのであらうと氣がついたからであつた。

——なぜなのだらう？ 誰が男達にそんな權利を與へたのだらう？……妾だつて同様に自由な人間ぢやないか。と、彼女は部屋のぼんやりした薄暗がりへヒタと眼を据ゑながら、我とわが心へ訊いて見た。

彼女の若い肉體は彼女の心に絶叫した。彼女にとつて最も楽しい最上の凡ゆる物をば、彼女は人生から採る權利を持つてゐるのだと。又彼女の美しい壯健ないきゝした肉身が要求する其一切の事を爲す權利をも、彼女は同様に持つてゐるのだと。そして其權利はたゞ彼女にのみ屬してゐるのだと。

が、彼女の考は恰もこんがらかつた網の目を見るやうに彼女の腦中で互に相闘つたのである。

と、がつかりして、力がつきて又くよゝゝと氣が滅入つて來た……

八

ユリイ・スヴロジツチはずつと以前から繪をかく術に浮身を窺してゐた。彼は繪がすきであつた。そしていつもその術で閑をつぶしてゐた。昔、彼は畫家にならうと考へたのであつたが、最初は金がなかつた事と、其後は政黨に身を委ねた事とが妨げをなして、其道は踏んでゆけなくなつたのである。で、彼は今、判然とした目的もなしに、時たま此藝術に指を染めて見るのであつた。かく判然とした目的がない事と、何の派にも屬してゐない爲に、描いたものが彼を満足させぬばかりでなく、彼を絶望させたり煩悶させたりした。此仕事に氣に入らなかつた時は、ユリイはいつもそれが爲に心を痛めたり苦しんだりした。又それが巧くいつた時には、甘くて且つ鬱陶しい夢の中へ踏込んでゆくやうな心持がした。こんな物はすべて無用だ。自分には成功も幸福も與へはしないのだ、といふやうな事を考へて。

カルサギナは非常にユリイの心を喜ばした。彼は大柄に肥つて、聲の朗らかな、眼光の可憐な、やゝ感傷的の美女がすきであつた。

彼れの牽きつけられたのは、彼女の心が美しいのと又其清淨無垢な點なので、彼はたゞそればかりで、彼女をいとしいとも思ひ好ましいとも思ふのだと、若者は考へてゐたのである。彼女が彼を喜ばしたのは、其肩の爲でもなく、其胸の爲でもなく、其眼の爲でもなく、其聲の爲でもな

く、たゞ其清淨潔白な無垢な點のみだと、彼は自ら信じようと努めたのである。さう考へる事が彼には一層高尚であり又一層美しくもあるやうに思はれた。其女性の清淨無垢な點が即ち判然と彼れの血のうち情慾を燃やし立てた始末なのだが、彼が彼女を知つた夕べから其無垢なところを瀆さうといふ慾念が彼れの心に唸めてゐた。で、此 *Topic* をば彼は凡ゆる美女の面前に於いて平等に感じてゐたのである。

そこで彼れの思想が花やかな楽しい「生」に充ちた美しい乙女に占領されたので、ユリイは「生」を描かうといふ考を起した。例の通り彼はすぐそれに熱中した、こんどこそは充分に自分の思想を具現する事が出来るであらうと念じながら。

やがて大きな畫布が準備せられると、ユリイは遅れては大變だといふやうな調子で仕事にかゝつた。第一の繪具が落とされて、畫布が調子のいゝ、淡い斑點に蔽はれると、彼れの心の一切の物は恍惚と自信とでぶる／＼と顛へた。彼はもう自分の製作が細かい部分まであり／＼と眼に見え、るやうに思つた。ところが、製作が進めば進むほど、まゝにならぬ技術上の困難が、層一層とさま／＼に湧上つて來た。彼の想像力が彼をして畫布の上へ美しくも輝かしくも力あるやうにも描かしてゐた一切の物が、光澤のない平凡なものになつて了つた。今はもう彼を牽きつけるどころではなく、細かい部分がたゞ彼を苦しめた。と、ユリイは氣がぬけて了つて、たうとう終ひには粗大な不揃ひな筆法で擲りつけて了つたのである。そこで彼が創出しようとして望んでゐた雄大な熱烈な「生」の代りに、全く藝術的價値のない、粗笨な力のない女の半身像が、畫布の上へ現はれ

た。此畫のうちには、ユリイが美しいとも新しいとも思つたものは何もなかつた。たゞ凡てが軟弱であつた。卑俗であつた。彼は自分の畫が有觸れたものだと思つた。又自分はムク氏のデッサンを模倣してゐたと氣がついた。又其着想さへ何人かのものであつたと氣がついた。

相變らずユリイは悲しげに沈痛な様子となつた。彼が若し泣くのを恥としなかつたなら、彼は枕へ顔を埋めて身を投出して嘔泣きをしたであらう。彼は誰かに向つて何事かを懇へたく思つたであらう。けれども自分の無氣力については云ひたくなかつたに違ひない。彼は不快らしい曇つた顔をして、まじ／＼と自分の畫を眺めてゐた、人生は總て退屈で混沌として威嚴のないところだと考へながら、又人生は彼れユリイを歡ばし得るやうな何者をも包有してゐなかつたと考へながら。彼は其上こんな小さな都會の中で更に何年も／＼暮らさなければならぬのかと想像して身慄ひした。

——さうすると……死んだものだ！ と、考へて彼はヒヤリとした。

と、彼は「死」を繪にして見なくなつた。そこで庖丁をとつて、内心情けなくはあつたけれど、思ひきつて自作の「生」を削りはじめた。

彼はあれほど醉心地になつてやつつけた自分の仕事が消失せてゆく時にはかうまで骨の折れることを悲しんだ。繪具は不承無承に剥けて行つた。庖丁は擦れたりこつたり又二度ばかり畫布へ孔を穿けたりした。ユリイは木炭が油に塗れた表面に跡方もなくなつた事を探すると、心底から苦痛を覺えた。彼は畫筆を採上げて、先づ黄金石で圖取りをした。それから更にだらりとした物

静かな態度で、臙氣な惱ましさに襲はれたが、繪具を塗りはじめた。今彼れの考へた畫面は、其だらけた態度や陰氣な重苦しい色調によつて、何等の影響も蒙らず、却つてそれが適はしかつた。が、「死」といふ最初の考はおのづから消滅して了つて、今度はユリイは「老年」を描くことになつたのである。彼は焦色の不快な黄昏をば踏みじられた道路に沿うてよろ／＼と行く肉の落ちた疲れた老女の姿でそれを現はした。地平線には崇嚴な夕方の紫紅色が消失せて、緑がかつた紅色の空には、十字架の陰暗な横向姿が朦朧と影をつくつて浮出してゐた。黒い棺桶があつて、それが骨立した老女の双肩をばへし潰してゐた。そして其濁つた眼光のうちには Desolations (陰鬱) が睡つてゐた。又其片足は既に眞黒な墓穴の縁に靠れかゝつてゐたのである。

畫面は慘憺たるものであつた。

ユリイは晝食に呼ばれたが、それへもゆかず仕事に續けてゐた。暫くたつてから、ノギコヴが這入つて来て、何事か彼に話したのだけれど、ユリイは聞きもせず又答へもしなかつた。

ノギコヴは溜息をついて、裝毛安樂椅子の上へ腰を卸した。彼はたゞ一人自分の家にポツリとしてゐた、まらないばかりにスヴロジッチの家へ來たのであるから、かうして黙つてゐられる方が却つて勝手であつた。彼は哀しく感じた……リダの拒絶がまだ彼れの心を壓迫してゐたのである。自分ではそれが悲しいのか單に耻しいのか區別がつかなくかつたけれど、彼は律義で且つノンキな性質だから、リダとザルデインとの問題について既に町中に擴がつてゐた噂には一向お氣がつかなくかつた。で、嫉妬などには苦しめられなくかつたが、彼はたゞ自分の幸福な夢がはか

なく消失せた事ばかり悶えたのである。

ノギコヴは自分の生涯を誤つたと考へた。けれども、若し果してさうならば、何も骨を折つてこんな生涯を續けてゆく價値はない、など、いふ考は彼れの心には起つて來なかつた。反對に彼はかう思つた、自分の生涯は今たゞ苦痛ばかりとなつたから、それをば他の人々に獻げて、もう自分自身の幸福などは求めまいと。なぜだか自分ながらハッキリわからないが、彼は臙氣に一切を棄て、彼得堡へ赴き、政黨と關係を結び、思ひきつて死地に身を投じようと決心した。この考が彼には氣高くも美しくも思はれた。と、この氣高い美しい考が自分の考だと思ふと、彼れの悲痛は和らげられ、同時に嬉しさが込上げて來た。彼は自分の燦爛たる圓光に包まれて偉大になつてゆく姿をば自分の眼に感じたのである。すると心ならずもか／＼とリダを謗つてゐた事が泣きたくなるほど淺猿しく感じられた。

やがて彼は退屈しはじめた。スヴロジッチは依然として一向彼には頓着なく晝を描いてゐた……ノギコヴは立上つて、晝布に近寄つた。

晝はまだ出來上らなかつた。が、出來上らない爲に、却て力強い草晝の印象を與へたのである。と、丁度、ユリイがもう其先を描けなくなつたのは其刹那であつた。

ノギコヴは此晝を素晴らしいと思つた。で、口をあげて、無垢な子供らしい嘆美の眼をあげながら、ジツとユリイを覗いた。

——どうですか？ と、跡じさりしながら、ユリイが訊いた。

彼は自分で考へた、自分の畫は、たとへ幾多の缺點があるにしても、又其缺點がかなり重大で且つ歴々たるものであるにしても、自分の今迄に見た畫のうちでは一番興味のあるものだなどと。ユリイはどこからそんな考が出て來たのか自分ながら分らなかつた。が、若しノギコヅが此畫を拙劣だなどと思はうものなら、彼は情なくも思ひ腹が立ちましたであらう。けれども、ノギコヅは恍惚として低い聲で云つた。

——非常に佳いすなア！

ユリイはかの自分自身の創作を貶す天才たらん事を欲した。彼はホツと溜息をついて、畫筆を抛棄てたが、筆はつと走つて裝毛安樂椅子の一隅を汚した。と、彼は畫を見向きもせず立離れた。

——なア、君！ と、彼は云つた。

彼はかういふ成功から生ずる不確な掛念や又かういふ幸福な草畫が出来ようとはどうしても思はれなかつたといふ覺束ない承認をば自分自身へも又ノギコヅへも自白したくてたまらなかつたが、一寸考込んでから、彼はたゞかう云つた。

——こんな物は少しも我々の心を向上させませんな。

ノギコヅはユリイをばぶつてゐるのだなと思つた。が、同時に彼自身の悲しみが心中に迫つて來たので、彼はその事を考へた。

——全くね……

と、暫く無言の後高聲に云ひ足した。

——どうして向上させないのでせう？

ユリイは此問にはてきよき答へかねたので、黙つてゐた。ノギコヅは又一寸畫を眺めたが、やがて再び安樂椅子へ腰を落した。

——僕はね、君、僕は「郷土」に載つてゐる君の論文を読みましたよ。頗る手巖しいものですね。と、彼は又問ひかけた。

——なアに、下らんですよ。と答へて、ユリイは自分にもわかぬ不快を感じた。彼はセメノヅの言葉を憶出したのである。あんなものは何の役に立つでせう？ 以前のやうに死刑をも掠奪をも暴行をも沮める力はありませんよ……いくら論説を書いたつて……、人は影警など受けないのです……私にあんなものを書いた事をば遺憾に思ひます……何の爲に書いたんでせう？ 二三人の馬鹿者に讀まれる爲ぢやありませんか……それがどうだといふのです？ 結局、私にとつて何だといふのでせう？ 壁の中へ題を突込まうとしたつて、それがどうなるもんでせう？

ユリイの眼前には政治的活動の數年間が展開した、秘密結社、遊説、冒險、蹉跌、彼自身の熱狂、及び自分が救はうと思つた人々の潜まり返つた事など。彼は部屋を横切つて、いかにも侮蔑したやうな冷然たる態度を拵らへた。

——して見ると、何をしたつて苦痛ぢやありませんか。と、ノギコヅの聲がだらしなく響いた。と、サニンの事を憶出したので、彼はかう附加へた。利己主義者ですよ、誰だつて。

——さう、だから骨を折る価値はありませんよ。と、はや部屋のうちの物がすべて灰色に見えるはじめた黄昏をば、ユリイはさまざまの追憶に耽りながら熱心に云つた。

——若し我々が人類についていふならばですな。憲法や革命に對する凡ゆる努力は何の役に立つてせうか。恐らく我々の夢見てあるかの自由なるものは、其中に將來離れることになるべき萌芽を藏してゐるのです。一ト度理想を實現した人間が退歩して、新に四足で匍ひはじめやうになるのです……そんな風にして出直さなければならぬものでせうか……で、若し私が自分自身の事ばかり考ふるならば、然る時は……然る時は何が得られるわけでせうか？ 最も都合のいい假説を立てれば、私は自分の才能及び活動によつて、名譽なるものを贏得る事が出来るでせう。又自分よりは劣等な人間共の尊敬を受けて、それに酔はされる事が出来るでせう。即ち自分の方では慥に尊む事などの出来がたい又其尊敬がどうしても此方の心には觸れがたい、といふ人間共の尊敬なんです……そして生きて生きてゆくのです。墓場までね……その先はもうありません……で、結局、禿頭の上へ月桂冠などを載せられて、煩さがぐるぐる落ちてせうよ……

——先生御自分の事ばかり仰しやつてお出でになる。と、ノギコヅは擲擲面で呟いた。

ユリイはそれに氣がつかず、自分で云ふ事をば悲しげに自分で聽きつゞけてゐた、病的な一種の愉快を感じながら。彼には自分の言葉が憂鬱に美しく思はれた。と、高尚な自尊心が胸中に溢れて来た。

——又最も都合が悪くゆく場合には、私は認められざる天才となるでせう。滑稽新聞の題目たる、馬鹿々々しい夢想家となるでせう。無用の長物となるでせう。

——へえ。と、ノギコヅは勝誇るやうに遮つた。そして安樂椅子から身を起した。無用の長物。すると、君は自らそんな事を認めてゐるのですな……

——君は妙だ。と、今度はユリイが遮つた。どうして暮らしていゝか、又何を信じていゝか、それが私には分らないのだといふ事を君は御存じですか。若し私が自己の死に依つて天下を救ひ得るものと信じてゐたならば、私は恐らく自己の幸福を十字架上に釘付としてゐたでせうよ。けれども私にはさうした信仰がない。よしんば私が何をしてみても、歴史の徑路を變更させる事などは決して出来ぬでせう。何を私が寄興したところが、どうせ無意識な小さなものにつきまつてゐるから、たとへ私がなくなつても、天下は少しも其大を失ふ事なく、ずん／＼すすんで行くでせうよ。それにも拘らず、私はさうした微小なる寄興をする爲に、生きて困しみ、悶へ悶へて死を待たなければならぬのです。

ユリイは本問題から外れて了つた事には氣がつかなかつた。そしてノギコヅの言葉にはもう答へず、たゞ自分の新しい感情にのみ應じて行つた。彼は忽ちセメノヴの事を憶出して中止した。物凄い忌はしい身慄びがゾツと彼れの脊筋を走つた。

——君、私はかうして壓迫を蒙つてゐるのですよ。と、彼は低い聲で信ずるところあるが如く云つた。と、暗くなつた窓をばボンヤリ見つめながら、それは當然な事で又どうするわけにもゆ

かない事だとは私も知つてゐます。けれども私は恐ろしいのです、嫌でたまらないのです。

ノギコヅはそれに違ひないとは思つたが、内心の恐怖をかくして、わざと答へた。

死は必要な生理學上の一現象ですよ。

馬鹿な事をいふ奴だ。と、ユリイは赫としてさう思つた。

彼は腹を立てながら反駁した。

何ですつて？……我々の死が誰の役に立たうが立つまいが、死は我々をどこへ突落すでせうか。

で、君の十字架にかゝるといふ事は？

さア、それは別問題です。と、不安らしく答へて、ユリイは一寸逆上を下げた。

君は自ら矛盾してると、ノギコヅは自分の方が上手だといはぬばかりに悠然として指摘した。

ユリイは其調子が癩に觸つた……彼は黒い地厚の髪の中へ手を突込んで、ぶつくと云つた。

私は決して矛盾してゐません……明々白々な事です、若し私が自分自身の意志で死ぬならば……

同じ事でせう。と、ノギコヅは負けずに云ひつゝけた。君は花火のやうな事を望んでゐる。世界の喝采を博さうと欲してゐる……要するに利己主義だ！

さう、或は然らん……が、それは此問題には何の關係もない事でせう。

議論は混亂した。ユリイは自分の云ふ筈であつたのはこんな事ではなかつたと思つた。が、二三秒前に甚だ適切と思はれた糸筋が、もう捉まへられなくなつて了つたのである。彼はどう反對してやらうかと思つて部屋の中を歩いたが、結局、かういふ場合にいつも考へる事を考へながら納まつて了つた。

時々具合のわるい事がある。時には自分の云ひたい事が目先にチラつくほどハッキリと云へる事もある。又時には言語が口中へ縛りつけられて了ふやうな事もある。さういふ時には、あちらこちらへ突懸つた、ぞんざいな物の言方になる……偶然さうなる……

二人は押黙つた。ユリイは部屋の中を大股で歩いてゐたが、窓際で一丈立止まると、帽子をとつた。

散歩しませう。と、彼は云つた。

いゝでせう。と、ノギコヅは受けたが、ふとリダ・サニナに出會へさうな希望が生じたので、彼は嬉しいやうな恐しいやうな氣がしたのである。

九

二人は二度ばかり並木街フルムツアルを往つたり來たりしたが、知合ひの者には出會はなかつた。そこで相變らず庭園の中で奏してゐる音楽に聽耳を立てゝゐた。音楽は間違つたもので、調子外れだつたが、遠くできくと、いかにもなだらかに物柔しく響いた。彼等はさまざまの男女に出遇つた。其

男女の高い聲や喧しい笑聲がゆつたりした音楽や黄昏の物軟かな憂愁と對照をなして、それがユリイを悩ました。並木街の盡頭で、サニンは彼等に近寄ると、喜ばしうに挨拶した。ユリイは彼が嫌ひだつたので、彼等の談話は勢まなかつた。サニンは眼の前を通る凡ゆる物を嘲つた。彼は終ひにイヴノヴと出會つた。と、お互に「出懸けよう」といふ顔付をしあつたのである。

——どこへ行くのかね。と、ノギコヴが訊いた。

——友達に御馳走するのさ。と、イヴノヴは答へた。彼は衣兜からウオツカを一本取出して、得意さうに振回した。

サニンはカラ／＼と笑つた。

此ウオツカと此笑聲とがユリイには平凡に俗悪に思はれた。で、彼は不快らして脇を向いた。サニンはそれと氣はついたけれど、何にも云はなかつた。

——あゝ、神よ、僕は此税吏のやうでなかつた事を感謝します。と、イヴノヴは不得要領にニヤリとして云つた。

ユリイは眞赤になつた。

——奴は其上に駄洒落までやつてゐる。と、彼は唾でも吐きかけたやうにさう思つた。そこで肩を聳かしながらつと離れた。

——ノギコヴ君、無意識のバリサイ人君、我々と一緒に來んか。と、イヴノヴは訊いて見た。

——どうしてさ？

——ウオツカを飲みに！
ノギコヴは心配さうな眼光で並木街を見やつた。リダはどこにも見えなかつた。

——リダは家にあるよ。そして自分の罪を後悔してゐる、と、サニンは笑ひながら口を出した。

——馬鹿な事を。と、ノギコヴは面を曇らして呟いた。僕は心持がわるい。
——君の手を借りないと誰も充分に死ぬ事は出來まい。と、イヴノヴが又云つた。が、我々は君に助けられんで火酒を飲む事が出来る。

——酔拂つてやらうか。と、ノギコヴは苦がい思ひをしながら、さう考へた。で、大きな聲で云ひ足した。よし、行かう。

彼等は出掛けた。ユリイはサニンの掛けかまひがない馴々しい笑聲に錯雜つたイヴノヴのぞんざいなバスの聲をばいつまでも聽いてゐた。

彼は並木街に沿うて再び散歩をはじめた。と、女達の聲に呼びとめられた。ジナイダ・カルサギナと女教師のツボボが腰掛の上で彼に近寄れと目くばせをしてゐたのである。日はもう落ちて、黄昏の物影のうちに彼等の顔は殆ど分らなかつた。二人は濃い色の着物を着て、帽子を蒙らず、手に書物を持つてゐた。ユリイはいそ／＼と彼等と一緒にゐた。

——どこからお出でになりました？ と、彼は二人に挨拶しながら訊いた。

——図書館から。と、カルサギナが答へた。

ツボボは黙つて身を退り、若い男の爲に席をあけた。彼は寧ろカルサギナの傍へ腰かけたかつ

たのだが、仕方なしに醜い女教師と押並んで身を落した。

——貴兄はなぜそんな心配さうな陰氣な顔をしてお出でになるのです？ とツボグは癖になつてゐるカサ／＼した薄い唇を尖らしながら訊いた。

——私が心配さうだなどと、貴女にはどうしてさう見えるのです？ 私はどうして非常に愉快です……が、御尤もです、私は退屈でたまらんですからね。

——さうでせう。貴兄は何にもならないのですか。と、ツボグは見下げたやうに訊いた。

——と、貴女は爲る事がお有りですね？

——え、え、泣く暇ありません。

——私だつて泣きませんよ。

——では、空泣きをなさるでせう。と、ツボグは冗談を云つた。

——私のライフは此頃笑ふ事を忘れて了つたやうになつてゐるのです。

彼れの聲のうちには苦がい／＼調子が響いた、それが爲に相手は思はず口を噤んで了つたのである。ユリイは暫く黙つてゐたが、やがてニコリとして、

——私の友人の一人が近頃私に云ひましたよ、私のライフは甚だ教訓的だなんてね。と、彼は云つた。(誰も彼にそんな事を云つたものはないのだが。)

——どういふ意味でせう。と、カルサギナは用心深さうに訊いた。

——私の生涯はいかに生存すべからざるかといふ事を教へるからです。

——まア、さう。それを話してきかして下さいな。きつと妾達の参考になるでせうから。と、ツボグがひ出した。

ユリイは自分の生涯をば絶對的に失敗したものと考へた。そして自分一身をば飽まで不幸な人間だと信じてゐた。彼はさう考へるうちに或悲しい満足を見出してゐたのである。又自分の生涯や人間社會を嘆く事が彼には樂しかつたのである。彼はそんな事をば男達には話さなかつた。云つたつて男達は信じまいといふ氣がしたからである。けれども女達には話した。特に若くて美しい女達には話した。彼は自分の身の上をばこま／＼と嬉しさうに話した。彼は美男で又話上手だつたので、女達はいつも彼に優しい同情を傾けた。

で、此際もまた、始めは冗談であつたのだが、おのづと例の調子になり、自分の生涯について長々と物語つた。彼れの物語をきいてゐると、彼は恰も周圍の事情に煩はされた偉大なる人物で、又其黨與に了解されなかつた人間らしく思はれた。そして彼が公衆の領袖ともならず。たゞつまらぬ口實の下に追放された凡庸な大學生たるにすぎなかつたのは、廻合せの悪い爲とそれから人類の愚昧なるが爲であつて、彼自身の罪ではないやうに思はれた。ユリイは甚だ自負心の強い凡ての人々と等しく、さういふ事は少しも自分の非凡な力を證するには足らぬもので、天才といへども同様な人間中に生息し、同様な時代の影響を蒙るものだ、とは考へられなかつた。彼ばかりが打勝ちがたい運命に苦しめられてゐるやうにのみ彼には思はれたのである。彼は花やかに鮮明に美しく物語つたので、其物語は自分ながらいかにも本當らしく響いた。乙女達は彼を信じた。

又彼を憐んだ。そして彼れの運命を嘆いた。其間をば例の音楽が調子外れに泣くが如くたえず吹奏を續けてゐた。又黄昏は暗く静まり返つてゐた。彼等は皆物悲しく夢心地になつた。ユリイが語りをはると、人生は單調で退屈なところだとも思ひ、又自分は幸福も戀も充分に味はぬうちにまたたく年老つて了ふのであらうとも思つた。ツボブは、恰も自分自身の考に答ふるものゝやうに物靜かに訊いた。

— ねえ。ユリイ・ニコライエギツチさん、自殺といふ考が貴兄のこゝろに浮びませんでしたか。

— なぜそんな事をお訊きになるのです？

— なぜと云つて、たゞ……

彼等は黙つた。

— 貴兄は Comité (委員會) に屬してお出ですか。と、カルサギナは好奇的に訊いて見た。

— えゝ。と、ユリイはいやゝながら簡單に答へた。が、此答は乙女の眼に物凄くも又興味ある光を湛へさせたので彼は愉快に感じたのである。

そこでユリイは二人を家まで送つて行つた。彼等は途すがら喋つたり笑つたりした。物悲しさはどこへか消えて了つた。

— なんて嬉しい方でせう！ と、ユリイに別れると、カルサギナは叫んだ。

— ちよいと！ ラヴしちやいけなかつてよ。

ツボブは指先で彼女を脅かした。

— いけなくて？ と、本能的に内心恐怖を感じながら、カルサギナは絶叫した。

ユリイは甚だ機嫌よく家へ還つた。彼は着手した畫面を見たが、それについてはもう何にも感じなかつた。彼は寢に就いた。そして夜どほし美しい若い女の夢ばかり見た。

十

次の日の黄昏、ユリイは昨夜カルサギナとツボブに出會つた場所へ又出掛けた。彼は彼女達と楽しく過した一ト晩の事をば終日憶ひ暮らしてゐた。そして再び彼等と邂逅して、同じ問題に觸れ、ジナの柔らかな眼の中に再びかの同情と慈愛との表情をば見たいものであると希つた。此夕はカラリと晴れて靜かで且つ暖かであつた。乾いた細かな塵埃が町の大氣のうちに立迷つてゐた。で、偶に通る二三の人を除いては、並木街に人影らしいものは見當らなかつた。

ユリイは何か侮辱でも受けたやうな云ひやうのない不快に襲はれて頭を振動かした。そして半靴の端へ眼を落しながら、徐に歩きはじめた。

— なんてつまらないんだらう。と、彼は考へた。おれは何をするつもりかしら。大學生のシヤフロヴが手をブラ／＼振りながら忙足でやつて來て彼と出會つたが、もう遠くの方から慇懃にニコ／＼して見せてゐた。

— 何だつてこんなところをぶら／＼してお出でなさいます？ と、立止まつて、力のある大き

な手をスプロジツチへ差伸べながら、彼は愛相よく訊ねた。

—私は退屈してゐるのです……何にもする事がないのでね……で、貴兄は？ どこへお出ですな？ と、ユリイは怠けた聲で蔑むやうに云つた。彼はいつもかういふ風にシヤフロヴへ物を言つてゐた。といふのは、彼は *Comite* の古顔なので、此男をば革命主義を玩ぶ初心な若い學生として考へてゐたからである。

シヤフロヴは自ら満足してゐるやうに微笑した。

—我々はけふ朗讀をやるのです。と、彼は雑色の表紙がついた薄い小冊子の一束を示しながら云つた。

ユリイは心にもなく其一冊を拿上げて、それを聞きながら、社會主義論の乾燥無味な長たらしい序文を読んだ。其論文は彼も知つてはゐたが久しく忘れてゐたものである。

—で、朗讀はどこでやるのですか。と、ユリイは小冊子を青年の手元へ返しながら、侮るやうにニツコリとして訊いた。

—學校でやります。と、シヤフロヴはカルサギナとツボヴとが奉職する學校の方を指して答へた。

ユリイはリヤリヤが嘗て此朗讀の事をば彼に話したけれども、一向氣にもとめなかつた事など想出した。

—私もお伴が出来ませうか。と、彼はシヤフロヴに訊いた。

—え、どうか……と、シヤフロヴは喜ばしきうに微笑しながら熱心に承諾の意を表した。

彼はユリイをば熱誠な *Propagandiste* (新説唱道者) であると信じてゐた。又彼が政黨中に占めた *role* (役目) を大袈裟に考へて、殆ど崇拜せんばかりに彼を尊敬してゐた。

—私はさういふ事に多大な興味をもつてゐます。と、ユリイは此宵の時間ふさげが出来た事と、それからカルサギナに逢へる事が特に嬉しく思はれたので、さう附加へなければならぬやうに考へた。

—是非どうか、是非どうか。と、シヤフロヴは繰返した。

—ぢや、行きませう。

二人は忙いで並木街を横ぎり、橋の方へ向いて行つた。と、橋の畔には大氣が爽かな水分に浸徹つてゐた。やがて學校へ着くと、そこには人々がもう集つてゐた。

卓子と腰掛とが整然と押並んだ未だ薄暗い大廣間には、幻燈の白い映寫幕がぼんやりと浮いてゐた。息の窒まるやうな笑聲が盛にきこえた。ほの暗い空と木々の濃緑の梢とが其外に見える窓際には、リヤリヤとツボヴとが立つてゐた。二人はユリイを見つけて、大聲で嬉しきうに呼んだ。

—よく來たわねえ。と、リヤリヤが云つた。ツボヴはギユツと彼れの手を握つた。

—なぜまだ始めないのですか。と、ユリイはカルサギナを見つつけようとして廣間を窺視ながら訊いた。

—ジナイダ・バヴロヴさんは朗讀に關係しないのですか。と、彼は興ざめ顔に附加へた。

と、映寫幕の傍の演壇の上で、燐寸がパツと點いて、カルサギナの顔が現れた。彼女は蠟燭に火を點けたのだが、其涼しげな美貌が下の方から照されて、楽しさうに微笑んでゐた。

——關係しちやいけないでせうか。と、彼女は高いところからユリイの方へ手を伸ばしながら、朗らかな聲で答へた。

彼は彼女に會へたので嬉しくて、物も云はずに彼女の手を握りしめた。彼女は飛下りる爲に軽く彼の上へ身を寄せた。と、彼女が彼れに觸れた時、ユリイは彼女の肉體の健康な匂ひを嗅いだ。

——今始めます。と、シヤフロヴが別室から出て来て云つた。小使が大きな長靴を重々しく曳きながら部屋を横ぎつて、大洋燈へ一つ／＼火を點けて行つた。と、花やかな光輝が廣間のうちへ漲つた。シヤフロヴは廊下の扉を開いて、高聲に云つた。

——どうぞ、皆さん。

最初のうちはおづ／＼した足音がきこえてゐたが、やがてそれが急足となつた。そして公衆は廣間へ侵入した。ユリイは好奇心を以て入來る人々を眺めてゐたが、例の新説唱道者としての鋭い興趣が湧然として彼れの心に沸起つた。そこには老人も青年も子供もゐた。第一列は誰も腰をかけなかつたが、間もなくユリイの見知らぬ夫人達と見知り越しの學監や男女教員達が其席を占めた。其他の座席は土耳其服や羅紗外套を着た男達や兵士や百姓や女達やそれから粗布の又縁飾のある上衣を着た子供の群が滿ち滿ちてゐた。

ユリイはカルサギナと押並んで卓子の傍へ座を占め、普通選舉についての或事をば落ちついて而も拙劣に讀むシヤフロヴの言葉に聽耳を立てはじめた。彼れの聲は底くて柔かみがなかつた。又彼れの讀んだ物は統計表の特質を帯びてゐた。が、人々は注意深く聽いてゐた。たゞ第一列の學者連だけはぢきに動搖してお互に私語しはじめた。ユリイはそれを不快に感じて、シヤフロヴを氣の毒に思つた。と、學生が疲れた模様なので、ユリイは低い聲でカルサギナへ云つた。

——跡を私が讀まうと思ひますが、どうでせう。

カルサギナはそつと彼に優しい眼光を投げた。

それがいゝわ……お讀みなさい。

——出過ぎるやうぢやないでせうか、と、ユリイは人知れずニツコリして見せながら訊いた。

——出過ぎるなんて！ 却つて皆んなが満足するでせうよ。

で、休憩時間を利用して、彼女はシヤフロヴに其事を話した。シヤフロヴは疲れてもゐたし又自分の朗讀の拙劣な事を自覺してもゐたので、喜んで承諾した。

——是非どうか、是非どうか。と、彼は例の調子、繰返しながら、ユリイに席をゆづつた。

ユリイは朗讀がすきでもあつたし又讀方をも心得てゐた。彼は傍目もふらず演壇へ昇つて、明晰な朗々たる聲で讀みはじめた。一二度彼はカルサギナの方へ顧向いたが、其度毎に彼女の意味深い光りある眼と出會つた。と、やゝどきまぎしながら控目勝にニツコリして、又書物の方へ目を移し、一層表情的にますます／＼聲を高めて讀んだ。彼は彼女の爲に甚だ面白い良い仕事をやつて

のけたやうな気がしたのである。
 彼が読みをはると、第一列では彼を喝采した。ユリイは公衆の側へ大真面目に身を屈めて、演壇を降り、さてカルサギナへ心ゆくばかり微笑を投げた、恰も、「私は貴嬢の爲にやつたのですよ」と云ふやうに。

公衆は足を踏鳴らして私語をかはし、やがて椅子を動かして、廣間の外へ流れ出た。ユリイは自分を喝采した二人の奥さんに紹介された。

と、燈が消えて、部屋は全く暗くなつた。

——どうも有難う。と、シヤフロヴはユリイの手を握りしめながら熱心に云つた。我々の仲間です。いつもあゝいふ風に読んで呉れる者があればいいのです。がなア。

朗讀は彼れの役目だったので、彼は箇人としてユリイに感謝する義務があるやうに感じたのである。たとへ人民の名を以て彼に感謝はしたのではあるけれど。

シヤフロヴは「人民」といふ言葉に力を入れてかう云つた。

——我々は人民の爲には充分な事はやりませんよ。と、彼は恰も重大なる或秘密をばユリイに洩らすやうな口振で述べた。人間が何かやるのはいゝ加減なものです……全く奇體すでな。退屈しきつた貴族達を樂ます爲には、第一流の俳優や聲樂家や演説家等をば澤山に呼寄せられるのですけれど、それが人民の爲となると、私見たやうな男に朗讀などをやらせる始末なんですからねえ……と氣のよさゝうな皮肉な手付をしながら……それで世間は満足してゐるんです。それ以上に

は要求しないのです。

——全くね。と、ツボヴが云つた。藝術家達のケバ／＼しい遊戯を褒立てるに全欄を埋めてゐる新聞を見るのは心持のわるいものですわ。そしてかういふところの……

——然し佳いものに對しては當然さうあるべきです。と、シヤフロヴは大切らしく小冊子を掻集めながら心から云つた。

——純なものだ。と、ユリイは考へた。彼はカルサギナの面前にゐる事と多大の成功を収めた事が嬉しいあまり、此シヤフロヴの單純さにはそれほど感じなかつたのである。

——サア、どこへお出でなさいます？ と、往來へ出ると、ツボヴが訊いた。戸外は廣間よりもズツと明るかつた。空には星が輝いてゐた。

——シヤフロヴさんと妾とはラトヴさんの許へ参ります。と、ツボヴが云つた。貴兄はねえ、

貴兄はジナさんを御連れして上げて下さいな。

——望むところです。と、ユリイは眞心こめて云つた。

彼等は別れた。

大きくて木の少い庭園の小家でツボヴと一緒に暮らしてゐるカルサギナの住居までユリイとカルサギナとは、途すがら朗讀の事について話した。と、ユリイはだん／＼に何か大善事でも仕遂げたやうな心持がはじめて行つた。

戸口でカルサギナが云つた。

——一寸お這りなさいな。

——宜しいですか。と、ユリイが受けた。

カルサギナは戸を開いた。二人は荒れはてた中庭へ這入った。その後ろには本當の庭があつた。——庭へ行しつて下さい。と、カルサギナは笑ひながら云つた。家の中へ御案内したいのですけれど、お目にかゝるにはあんまり取散らしてありますから。妾はけさからまだ歸らないのですわ。

彼女は家の中へ這入つた。ユリイは靜かに匂の高い綠叢の方へ行つた。で、二三歩ゆくと、彼は小徑の真中でつと立留り、恰も何か異常な神祕的な美しいものでも見つけたやうに、好奇の眼を輝かして、がづく／＼と家の窓々を見つめたのである。

カルサギナは石階の上へ現れた。と、ユリイは殆ど此乙女がわからなかつた。彼女は肩を廣く出した袖の短い小露西亞風の薄い下衣と、空色の裾衣とをつけて黒い上着と着換へてゐた。

——妾だわ……と云つて、彼女は何かキマリわるさうにニツコリした。

——わかつてます。と、ユリイは彼女だけにわかる意味ありげな顔をして答へた。

彼女は微笑みながら一寸横を向いた。二人は紫丁香花と丈の高い雜草の綠叢の中へ這入つた。

木々は皆小さかつた。櫻の木が多くて、其若葉は樹脂のやうな匂がした。庭の後ろには牧場が

廣がつてゐて、そこには密生した雜草が花盛りであつた。——爰へ座りませう。と、カルサギナが云つた。

二人は崩れかゝつた生籬へ腰をかけて、物憂げに平野の上へ落ちてゆく透明な黄昏の色を眺めた。ユリイは紫丁香花の枝を一つ自分の方へ牽ばつた。と、細かな露の點滴が小瀧のやうに濺ぎかゝつた。

——ねえ、何か唱ひませうか。と、カルサギナが云つた。

——え、どうぞ。と、ユリイは答へた。

いつぞやの河上の宵のやうに、カルサギナは透明な襯着の下へくつきりと浮き出さした胸を彎らして、唱ひはじめた「かゞやく戀の星……」と。

彼女の聲は清らかに情を籠めて、夕空に漾つた。ユリイは息を殺して、ジツと彼女を見つめながら、身動きもしなかつた。彼女は男の眼光を感じて、双眼をとぢ、一ト際胸を彎らして、いよ美しく、いよ／＼力を入れて唱つた。凡ゆる物が彼女の聲に聽耳を立て、あるやうで、四邊はシンと靜まりかへつた。ユリイは此神祕さと此靜寂さとをかの春鶯が囀る時の森を領する沈黙に比べた。

最後の一節を顫はして、彼女が口を噤んだ時、沈黙は一層深くなるやうに思へた。黄昏の紅色は消え失せて、空は刻々暗くなつた、刻々遠くなつた。木々の葉はそゞうと動いた。草も戦いだ。やさしく匂はしい何物か、空中にほの／＼き／＼、牧場からは溜息を洩らすやうな氣勢が起つて、それが庭園のうちへ散つた。

カルサギナはユリイを視た。と、其眼は薄暗がりのうちで燃ゆるやうな色を湛へた。

——なぜ貴兄は黙つてらつしやるの。と、彼女は訊いた。
——爰でかうしてるのがあんまりいゝ氣持ですから。と、ユリイは口籠つた。そして露の重たげな葉枝を再び牽ばつた。

——えゝ、いゝわねえ。と、カルサギナは夢見るやううに答へたが、ちよいと間を置いて、ライフはいゝわねえ！ と、附加へた。

ユリイの脳中には例の不眞實な忌はしい或影が動いたのだけれど、それはハッキリした形にもならず消えて了つた。

牧場の彼方で二度ばかり鋭い聲が響いた。と、再び静かになつた。

——貴兄、シヤフロヴさんがお好き？ と、カルサギナはふと訊ねたが、其間があまりの唐突なのに自分ながら可笑しくなつてホ、と笑つた。
嫉ましいやうな感情がユリイの心を波立たせたが、彼は努めて眞顔になつて答へた。

——善良な青年です。

——あの方は御自分の仕事に對して本當に熱心でいらつしやるわねえ！
ユリイは答へなかつた。

微白い靄が牧場から立騰つて、草は夜露にキラ／＼と光つた。

——濕つぽくなつて來たわ。と、肩を窄めながら、カルサギナが云つた。
ユリイは何の氣なしに其なよやかな丸々とした肩を見た。と、急に變な心持になつた。彼女は

それと氣がついて狼狽したが、其眼光は彼女に楽しくも快くもあつたのである。

——参りませう。

そこで二人はお互に衝かりあひながら狭い小徑を通つてのろ／＼と引返した。庭園は暗くなつてゐた。ユリイは周圍を見廻し乍ら、こんな事を思つた。今や庭園のライフが——人には知られぬ神祕な或他のライフが始まりつゝあるのであらう。露けき木々や雜草の間には、あるかなきかの物影が、やがてそよると立迷ふであらう。又夜の暗の帷幕が落ちて、聲なき奇異な緑の聲がひとりぼそ／＼と呟くであらう……

彼は其事をカルサギナに話した。乙女は顧返つて、物思はしげな眼を上げながら、暗い庭園をいつまでも／＼眺めてゐた。ユリイは考へた。彼女が若し身につけた物を盡くかなぐりすて、雪のやうな赤裸となり、ぬれた草の上をば樂しげに驅出したところが、少しも奇怪な事はないであらう。却つて美しくもあり自然でもあるであらう。又暗い庭園のライフも瀆される事などは決してなく、それが爲に一層完全なものになるであらう。ユリイは其事をも彼女に話したかつたのであるが、思ひきつては切出せなかつた。で、人民の事や朗讀の事などを話した。が、二人の對話は恰も云ふべき筈の事とは、全く懸離れた事ばかり話してゐたかのやうで、一向發はまずに杜絶たえた。かくて二人は互に笑みかはしながら又肩の上へ濡れた木葉をくツつけながら、そしてそれが爲に軀中へ露を浴びながら、黙々と戸口へ達した。と、凡ゆる物は靜まり返つて、彼等と同じ幸福に満たされて、ももあるやうに、二人には思はれたのである。

中庭は以前のやうに静かで寂しかった。開いた窓々は白い小家の上へ濃い影を黒く隈取つてゐた。が、往來へ面した入口の戸があくと、そゝくさした足音と抽斗を開閉する物音が家の中できこえた。

——オリアさんが来てますわ。と、カルサギナが云つた。

——あなた、ジナさん？ と、ゾボヴの聲が部屋のうちで響いた。と、其聲の調子は何となく或不吉な事件が持上つた事をば告げたのである。

彼女は眞蒼に、つてあたふた石階の上へ出て來た。

……貴女どこにゐたのよ？……妾は探したわ……セメノヴさんが死にますよ。と、彼女は息を切らして云つた。

——何ですつて？ と、カルサギナはギョツとして訊いた。

——え、あの人は死にますよ……咽喉から血が噴出したのです……アナトリー・パヴロボツチさんは駄目だつて云ひました……皆で病院へ擔込んだのです……ほんとに思ひがけない急な事でした……妾達はラトヴさんの許でお茶を頂いてゐたのですが、あの人は大層御愉快さうでしたわ。ノゴコヴさんと何か議論なんぞやつてお出でしたが、俄に咳をおせきになつて、よろ／＼なさりながら、立上るかと思ふと、血をお吐きになつたのです……掛布の上やお菓子皿の中へ……黒い濃い血をね……

——で、先生は……といふ事を知つてゐますか……と、ユリイは鋭い好奇心に驅られて訊

いて見た。ふと月の光や黒い影や又かの「君、君はいつまでも生きてゐるのだらう。君は僕の墓場の上を通過するのだらう。そして其上で五慾を肆にするのだらう」と云つた。悲しげな、弱々しい、イラ／＼した聲などを憶出したのである。

——妾は御承知だらうと思ひますわ。ぶる／＼手を動かしながら、ゾボヴが答へた。あの人は妾達を見廻して「何だといふんです」と訊きました……すると、あの人の軀全體が恐いやうに顫へたのです。そして「既うか……」つて仰しやいましたよ……あ、なんて嫌な恐いことつてせう！

三人の言葉は絶えた。

もう夜になつた。空は朗らかではあつたけれど、彼等には物の影が俄にも悲しくなつて一層黒く見えた。

——死は懼るべきものです。と、ユリイは眞蒼になつて云つた。ゾボヴは溜息をついて下を向いた。カルサギナの顔は顫へた。彼女は罪の深さうな苦笑を洩らしたのである。

此死は他の人々のやうにそれほど烈しくは彼女の心を動かさなかつた。彼女の若々しい肉體は死などに對して其注意力を集中すべくあまりに生氣が充ち満ちてゐた。光や生の喜びに震へた、かく朗らかな、かくも軟かな夏の夕べに、苦しんだり死んだりする事が、彼女には有りさうにもれがなかつたのである。死は疑もなく自然ではあつた。が、彼女にはなぜかわからぬけれど、そ

思ふ悪い事のやうに思はれた。と、そんな感じのするのが耻かしくもあつて、彼女は自分の感情

をば取繕はうと努めた。で、誰の目にも自分をばツボヴよりも又ユリイよりもより以上に恐がつてゐるらしく見せかけようと努めた。

——まあ！ お可哀さうにねえ！ で、あの方は……

「で、あの方がすぐ死ぬでせうか？」と、カルサギナは訊かうとしたのだが、さうはせず、下らない無意味な質問をば後からくツボヴに浴びせかけたのである。

——アナトリイ・パヴロギツチさんの仰しやるには、今夜か、晩くも明朝、あの方は亡なるでせうといふ事です。と、ツボヴはひそくと答へた。

カルサギナは物柔らかな聲で猶豫ひながら云つた。

——あの方の許へ行つて見ませうよ……行かない方がいゝでせうかしら……妾にはわかりませんけれど……

同様の問題が三人の間に置かれた。

セメノヴの死ぬところへ逢ひにゆくのは必要であるか？ 逢ひに行つてもいゝものか、或はわるいものか？ 三人とも行つては見たかつた。けれどもセメノヴの姿を見るのは恐ろしかつたのである。で、逢ひにゆくといふ舉動が彼等には非常に美しく思はれたり、又非常に陋しく思はれたりした。

ユリイは不確な肩を聳やかした。

——行きませう……這入れはしないでせうが、恐らく……

——恐らくあの人も誰かに逢ひたいでせうから……と、ツボヴは力を得て一致した。

——参りませう。と、カルサギナはキツパリと云つた。

——シヤフロヴさんとノギコヴさんはもう行つてますよ。と、ツボヴは自ら辯解でもするやうに附加へた。

カルサギナは帽子と外套をとり、家へ驅けて行つた。それから三人は灰色の石膏で拙劣に葺かれた三階の大きな建物の方へ向つて、惱まじげな歩武オシロで小さな市街を横ぎつた。其建物は病院であつた。其病院でセメノヴは死にかゝつてゐたのである。

廊下々々の低い圓天井の下は微暗くて、沃度ヨドホルム仿談や石炭酸の執拗な臭氣がむツと重苦しかつた。癡狂室の前を通過ぎた時、彼等は熱した調子で口早に喋つてゐる怪しくイラ／＼した聲をきいたが、人影は見なかつた。けれども其聲は二重に彼等を悩ましたのである。

三人は恐ろしく四角な小窓の方へ顧向いて見た。見事な白髻をば恰も胸甲むねぞてのやうに其胸の上へ取擴げた老農民ムシクが一人、長い白前垂をつけて、粗大な長靴を曳すりながら、廊下の中で三人と出會つた。

——何でございますか？ と、彼は立止まつて訊ねた。

——けふセメノヴといふ大學生を爰へ連れて來た筈ですが……と、ツボヴが云つた。

——六號室です。どうぞ上へお昇り下さいまし。と、小使は云ひすて、立去つた。彼は板敷の上へべツと唾液を吐いて、それを足で引擦つたが、其物音が三人の耳にきこへた。

上はずツと明るくつて清潔であつた。そして天井は圓くなかつた。「醫員室」とある標札のついた扉が開かれた。室の中では洋燈があか／＼と輝いて、誰か小纏をカチャ／＼やつてゐた。ユリイは室内へ眼を投げると、中にゐた人へ聲をかけた。

小纏の音がやむと、リヤザンツエヴが相變らず晴やかな顔をして勢よく現れた。

——やア！ と リヤザンツエヴは訪問者には非常に重苦しく感ずる斯ういふ空気に馴れつきつたらしい快活な大きな聲で云つた。けふは丁度私の當番です。今日は、お嬢様方！ と、急に眉を擧めて、悲しさうに意味ありげな全く別な聲で、

——患者は昏睡状態にあるやうです。入らつしやい。ノギコヴ君や其他の方々もお出でになつてゐます……

彼等は一列になつて、人の通らぬ清潔な廊下をば、黒く番號のついた白い大きな扉口々々に沿うて行つた。リヤザンツエヴは歩きながら語つた。

——司祭を迎へにやりました。かう俄にいけなくならうとは思ひませんでしたよ。私ですら驚いた位です。此頃引續き風邪を引いてゐたやうでしたが、それがあの病體には悪かつたものです。さア、爰です……

リヤザンツエヴは白い扉をあけて這入つた。三人は敷居の上で推合ひながらもじ／＼と續いて這入つた。

病室は廣くて清潔であつた。寢臺は六箇あつて、其内の四臺は空いてゐた。そしてキッチンと壁

積をとつた粗末な灰色の臥布で丁寧に蔽うてあつたが、それが何となく棺桶を想出させた。五番目の寢臺の上には皺のよつた顔の小柄な寢衣を着た老人が座つてゐたが、入来る人々を恐る／＼見てゐた。と、同じやうな臥布で蔽はれた六番目の寢臺の上には、セメノヴが横たはつてゐた。彼れの傍にはノギコヴが身を屈めて腰かけてゐた。又窓の側にはイヴノヴとシヤフロヴとが立つてゐた。

ところが死にかゝつてゐるセメノヴの面前で、彼等はお互ひに握手しなければならぬのに困つたのである。と云つて、握手しないのも死の近づいた事を一層明らかにするやうで、彼等には尙心苦しく思へた。で、或者はお辭儀だけした。或者はそれもしなかつた。が、一同は云合はせたやうに悲しげな當惑な舉動をして立ちすくんだ。

病人は時を切つて折々苦しげな息をした。彼は皆の知つてゐるセメノヴとは似ても似つかなかつた。且つ生きてゐる人とはもう受取れなかつた。なるほど、彼れの容貌は以前のとはほりでもあるし、又其手足は他の人々のそれと同様ではあるけれど、それ等の物は特に鈍鋒ばつて、見るも恐しげであつた。他の人々の肉體をばいかにも自然に生々させてゐる或物が、彼にはもう存在してゐないやうであつた。又もの凄い一種の物があつて、それが動かなくなつた五臟六腑の隅々まで迅速に充ちわたつた。丁度避くべからざる必然な或作用が働いて、些か残つて彼の生命をば、驚くべき注意力を以て監視してゐるやうであつた。

洋燈は天井から輝いて、頻死の人の生氣の失せた顔をばくつきりと照らした。病室の中央に突

立つた一同は、恰も襲ひかゝる洪大無邊の何物かを妨げまいとするかのやうに、息を殺して病人を見つめた。病人の苦しげに斷續するぜいぜいいふ呼吸が、恐ろしいほどハッキリと沈黙のうちにきこえた。

扉が再び開くと、でツぶり肥つた小柄な司祭が、よぼ／＼した小刻みの歩武で、室内へ這入つた。彼は色黒の瘦男なる一人の讚美歌うたひに伴はれてゐた。彼等と一緒にサニンも這入つて來た。司祭は咳拂ひしながら醫師に會釋し、さて並居る人々の前で禮儀正しく身を屈めた。人々は袈裟な禮式で恭しく答禮した。それからもう動かなかつた。サニンは誰にも挨拶せず、窓の側へ身を置いて、好奇の眼を輝かしながら、セメノヅと一座の人々を仔細に觀察してゐた。患者と彼等との間にはいかなる現象が生ずるか、それを一々見分けようと努めてゐた。患者は相變らず同じやうな息遣ひをして身動きもしなかつた。

——知覺がない？ と、司祭は誰をも見向かずに感動を興へるやうな聲で訊いた。

——ありません。と、ノギコヅがそ／＼と答へた。

サニンは何かきこえぬほどの事をば口の中で云つた。と、司祭はそれを聴取りたさうにして彼を見たが、何もきこえなかつたので身を顧向けた。そこで髪を撫付けて、金翠を着て、さて穩やかな物馴れた聲で、死者の祈禱をば表情的の句調で讀みはじめたのである。

讚美歌うたひは皺唄れた低音でそれに和した。と、彼等の調子外れな聲は、高い天井へ反響しながら、うら悲しく一緒になつたり別々になつたりした。

きい／＼した物憐れな連禱の Cadence が繰返して響いた時、一同の眼は思はずツツとして、瀕死者の顔の方へ行つた。

寢臺に一番近くゐたノギコヅは、セメノヅの眼瞼が微かに顫へて見えるやうに思つた。又もう視力を失つた其眼が聲の響く方の側へくると轉じて見えるやうにも思つた。が、他の人々の眼にはセメノヅは以前のまゝに身動きもしないであることよりは見えなかつたのである。

讚美歌が始まつて以來、カルサギナは其美しい顔に流れ落ちる涙を拭ひもやらず、忍びやかに泣き出した。人々は皆彼女の顔を見た。と、ゾボも亦泣き出した。男達は自分等の眼瞼の濡れるのに氣がついた。で、涙を落すまいとして齒を食ひしばつた。歌の聲が一際高くなるたびに、乙女達の嚔泣も亦一際高くなつた。

サニンは顔を盛めた。彼は腹が立つてたまらぬやうに肩を動かした。そこで考へた。此歌は中々死にさうもない壯健な男達にさへ悲しいのであるから、若しセメノヅの耳に這入つたものとすれば、彼はさぞかし聴くにたへないであらう。——もつと聲を低くしたらいいでせう。と、彼はむツとして司祭へ云ひかけた。

司祭は愛相よく耳を傾けた。が、其言葉がわかると眉を寄せて、いよ／＼聲高に吟じつづけた。讚美歌うたひは嚴然とサニンの方へ顧向いた。と、他の人々も亦恐る／＼彼を見た。恰も彼が場所柄をも辨へぬ良からぬ事でも云つたやうに。

サニンは不満な舉動をして押黙つた。

儀式がすむと、司祭は金翠エトキの裡へ十字架を裹んだが、それが又一層もの悲しかった。セメノヅは相變らず動かなかつた。

人々が皆一様に恐ろしくも亦忪へきれぬ一種の要求を心に感じたのは此時であつた。式がをはると同時に、彼等は今もセメノヅをば死んだものとしたかつたのである。

一座は思ひ／＼に此忌はしい感情をば強ひて胸のうちへ疊込みながら、耻かしさうにおづ／＼とお互ひの眼を見合はした。と、サニンは静かな聲で云つた。

——式もおしまひだね。つらいな。

——うむ。と、イヴノヅが受けた。

二人は此問答をば極めて低い聲で取換はしたのであるから、セメノヅにきこえる筈のないのは分りきつてゐたのを、人々は腹立たしげに顔を見合はしたのである。

シヤフロヴは何か云はうとした。と、同時に云ひやうのない、憐れッぽい、一種の新しい音調が室のうちに響いた。人々は其聲をきながら身慄ひした。

——い……い……い……い……い……と、セメノヅが唸いたのである。

で、恰も望みの物でも思ひついたかのやうに、彼は此喘聲あへぎこゑを長々と曳張つたが、掠れた息が込上つて來るので、聲は遮られて了つた。

最初、人々はそれと氣もつかかなかつたが、間もなくカルサギナとゾボグとノギコヴが聲を立てて泣き出した。司祭は崇嚴に臨終の祈禱を誦へた。めかした彼れの顔は時宜に應じた感動を示し

た。かくて二三分過ぎた。と、セメノヅは俄に黙つた。

——ことされましたな……と、司祭はつぶやいた。

が、同時に、セメノヅは必死になつて靜かにネバつく唇を動かした。彼れの顔は微笑むやうに拘攣つた。人々は微かな彼れの聲をきいた。其聲は殆どきこえぬほどのもので、恰も棺桶越しに其胸の底から出て來るやうであつた。

——くーそーやーらーうー！ と、彼は司祭を睨みながら罵つた。

彼はぶる／＼と身をわな／＼かし、吃驚したやうに眼を一杯に見開いて、硬くなつた。

人々は其言葉をきつけたが、動く者はなかつた。司祭のてら／＼した赤ら顔から悲しげな表情が俄に消失した。彼は恐る／＼周囲を廻つたが、誰もそれに心づく者はなかつた。たゞ一人、サニンだけがニヤリと笑つた。

セメノヅの唇は再び動いたけれども、もう聲は出て來なかつた。たゞ茶褐色の粗らかな髭の一隅が下がつたばかりであつた。彼は一層硬くなう、一層物凄くなり、一層ぐたりとなつた。もう聲も出ず動きもしなかつた。

誰も既う泣く者はなかつた。死の近づくといふ事は死その物よりも更に恐ろしい更に悲しいものであつた。あんなに悲痛な沈痛な事がこんな早くこんなに單純に梟がついて了ふものかと思ふと、人々は不思議な氣もした。彼等は恰も此續きが待たれるもの、如く、死人の尖々した顔を見まわりながら、又強ひて憐憫や恐怖の情を搾出さうと努めながら、尙暫く寢臺の周圍へ突立つ

てゐた。ノギコヴが死人の眼を閉ぢてやつたり手を組合はしてやつたりなどしてゐる間、彼等は其動作をば一心に見てゐたが、やがて控目勝に退去した。

廊下には洋燈がもう残らず點いてゐた。そこらにある物は皆普通に見馴れてゐたので一同ホツと息をついた。司祭は先に立つて歩いた。彼は一寸小刻みに地面を踏んで、若い人達を慰める爲に何か柔しい事でも云はうと思ひながら先づ溜息をついて、かう切出した。

——惜しい事をしました、若いお方をな。あのお方は大方悔改めずに亡つたものでせうで、殊更な……けれども神様のお慈悲と申しますものは、なア皆さん……

さやう……勿論です……と、他の人々よりすつと近くにゐたので、シヤフロヴは丁重に答へた。

司祭は張合ぬけがして訊いた。

——あのお方が家族がお有りですか？

——實際のところ、私は存じません。と、シヤフロヴは四度路に答へた。

人々は顔を見合はした。セメノヴは家族があるのか、又其家族はどこにあるのか、誰一人知らぬといふ事が、此際をかしくもあり不相應でもあるやうに、彼等には思はれたのである。

——あの方の妹さんが、どこだかの古典學校で勉強してお出で、すよ。と、カルサギナが注意した。

——あゝ、左様かな。さて、さやうなら——と、祭司はほてりとした指先で軽く帽子を上げな

がら云つた。

——さよなら。と、彼等は異口同音に答へた。

町中へ出ると、彼等は立停まつて、ホツとした息をついた。

——サア、どこへ行きませう？ と、シヤフロヴが訊いた。

彼等は最初どうしようかと猶豫つたが、やがてそこへ別れを告げて、ちり／＼ばら／＼になつた。

十一

セメノヴが血を見た時、そして彼自身に又彼れの周圍に空虚が生ずるやうに感じた時、それから又人々が彼を支へたり彼を連れ出したり彼を臥かしたりして、彼が生きてゐる間自身でやつてゐた事をば彼れの爲にして呉れてゐるのに氣がついた時、彼は死ぬのだと思つた。そして死に對して何等の恐怖をも感じないのが自分ながら不思議なやうであつた。

ゾボヴは彼れの恐怖について語つたが、彼女は凡ての壯健な人間が死に對して感ずるやうな、恐怖の念を基礎として結論を下してゐた。而も死ぬ人自身は彼女自身などよりどのくらゐ恐怖の感じ方が少かつたものか、彼女には想像もつかなかつたのである。で、彼女も又他の凡ての人々も、衰弱や血の減つた爲に生じた、患者の眞蒼な顔色や狂氣のやうな眼光をば、恐怖の表情だと看做したのである。けれども事實は全く相違してゐた。セメノヴが醫師に「もうか？」と云つた

際には、まるでもう恐怖の念などは、なかつたのである。

セメノヅは常に死を怖れてゐたものだが、肺結核に罹つたとわかつてからは殊に恐れ出した。病氣になりはじめの彼れの様子は目も當てられなかつた。まるで宥恕の望もたえた死刑囚の様子そのまゝであつた。セメノヅには世界がもう其時以來存在しなくなつたやうに思はれた。以前彼に美しくも楽しくもあつた一切の物が跡方もなく消失せて、周囲の物が段々に死んでゆき、恰も眞黒な口を開く奈落の底のやうな、忌はしい、物凄しい、耐へがたい何物かが、一分毎に、一秒毎に、追りつゝあるやうにも思はれた。

セメノヅは死の姿をば漆黒の圓筒状の底知れぬ深谷の形にして、ハッキリと心に描いてゐた。どこへ行つても、何をしても、この黒い深淵が彼れの前にあつた。で、一切の音響、一切の色彩、一切の情緒が、この暗黒な空虚のうちへ没却して了ふのであつた。

これは恐るべき精神状態であつた。が、それは間もなく靜まつて了つた。時がすぎればすぎるほど、セメノヅが死に近づけば近づくほど、さういふ状態はいつか遠退いて、次第に朦朧とわからなくなつた。

そして彼を取巻いた一切の物は——音響も情緒も陰影も——再びセメノヅが平生接觸した音響や情緒や陰影と同じものになつた。太陽はいつもの通りに輝いた。人々はいつとも動く通りに動いた。セメノヅ自身も平常の通り大小の用事を辨じてゐた。彼は朝起出でて、丁寧に顔を洗ひ、食事をしたが、以前の通りに旨い物は快く、無味い物は不快であつた。又以前の通りに日光や月光が

悦ばしく、雨や霧が腹立たしかつた。又以前の通りにノギョウや其他の人達と球突などをして遊んだ。それから昔のこぼり讀書もしたが、例に由つて或種の書物は退屈で馬鹿々々しいのにも變りはなかつた。かく自然や自分の周囲のみならず、自分自身さへ一向に變らなかつたといふ事が彼には最初から不思議にも思はれ惱ましくもつた。で、彼は物事のかういふ秩序を打破つて、世間の人に自分と自分の死とについて同情を傾けなければならぬやうに仕向け、自分の地位の恐るべき事を悉く理解させ、さて萬事休矣といふ状態をば強ひて認めさせようと試みたのである。が、其事を知己の人達に話して見ると、彼はすぐそんな事は云ふべきではなかつたと氣がついた。話された人達は、最初吃驚したやうな顔付をし、それから小首を傾けて、醫師の宣告に疑を挟むもの、やうに見せかけ、やがて勉めて話頭を轉じ、さし觸りのなさゝうな事をば用心しい／＼話すのであつた。そこでセメノヅ自身まで二分とはたゝぬうちに死ぬ話などはやめて、彼等と生きてゐる間の事ばかり話した。結局、世間の人を擧げて自分の状態に同情を傾けさせようとした一切の努力は、全く無効になつたわけであつた。

で、彼は死目が近いといふ動かすべからざる意識のうちに没頭して、それを一人ぼつちで苦しまうと試みた。けれども、彼れの周囲の又彼自身の心中の一切が従前のまゝであつた爲に、それを丸つきり別な物として考へたり、又彼れセメノヅをばいつまでも現在のまんまでは、あられないものとして考へたりする事が、彼には空々しく思はれたのである。すると最初彼れの心中に深く刻込まれた死の觀念が弱くなりはじめ、氣が樂になつた。従つて其事を全く忘れてゐる時がだん

く多くなり、人生は再び色づき再び抑揚を生じ再び濺刺と動くやうに思はれた。

暗黒な深淵が近づいて彼を苦しめるのは、夕方彼がたゞ一人ある時ばかりであつた。洋燈を消すと、形のない顔のない何か、忽然として彼れの前に突立ち、暗いなかで、たえず、シユ……シユ……シユ……と囁くのであつた。すると、其たえ間くから又別な物凄私語が生じて、前のものに答へた。彼はこの私語のうちに又暗い空虚のうちに溶込んでゆくやうな氣がした。彼れの五體はこの物音のうちで、恰も將にそのうちへ溶解して、憐れに跡方もなく消滅せんとするもの、如くに動いた。

彼は夜通し洋燈をつけたまゝ、寝る事にきめた。

燈の前では、其光輝がセメノヴの心へ親しみぶかい懐しい主の觀念を充たした爲に、かの不思議な私語もやみ、暗黒も遠去かり、口を開いた深淵の感覺も消失せた。椅子や墨汁壺や燭や自分の足や書いて了はうと思つた手紙の書きかけや、聖像や其前に吊下つた火を入れた例のない小燈檠や外へ置くのを忘れた屏の側の上履や其他明瞭に心覺のある無数のこま／＼した物などまで一々に見分けられた。

が、洋燈の光の達かない部屋の隅々には、いつまでも物凄私語がへばりついてゐた。暗いところは皆セメノヴには深い奈落の底に變じて見えた。そして彼を一ト呑にしようとしてゐるやうに見えた。彼は暗黒や死などの事を考へないやうにした。それを考へたゞけでも、暗黒が凡ゆる隅々から生じて、部屋のうちに充ち、彼を取巻き、洋燈を消し、彼から世界を奪去つて、それをば

全く光の通らぬ不透明な冷たい幕で輻んで了ふからであつた。さういふ時にはセメノヴは猛烈に悶へて、幼兒のやうに泣きたくなつた。又壁の中へ頭を突込みたくもなつた。けれども日が經つに從つて、死が近づくに從つて、其感情の度はだん／＼に低くなつて行つた。が、或言葉をきいたり、或舉動に氣がついたり、墓地や棺桶などを見たりして、彼も同様に死ぬのだなといふ事が想出された時には、其感情は新に恐しい力で復活するのであつた。

彼は自分の最後が近づいたといふ事に因縁のある一切の事をば避けはじめた。で、墓地へ續く道路を通行する事をやめたり、又胸の上へ手を組んで仰向けに臥ない事にきめたりした。

セメノヴの心中には二箇の生命が動揺してゐた。永遠に生きるといふ希望に充たされてゐるので、死の觀念などは出て來る餘地もない。又そんな事は氣にもかけない、瑞々した、ハツキリした、前からある生命と、それから其前からある生命を横ぎつて暗黒の裡から漏れ出て、それを毒し、それを苦しめ、それを非道い目に遇はす、恰も果實中の虫見たやうな、捕捉し難い、陰險な、秘密な、今一つの生命とがそれであつた。

セメノヴがやがて死に面と向つても既う殆ど恐ろしくもなくなつたのは、此二重の生命の爲であつた。

——もうか？ と、彼は其事だけがわかればいゝので、たゞさう訊いた迄であつた。

そして自分を取巻いた人達の顔から、自分の生命は終つたのだな、といふ事が讀めた時に、セメノヴはたゞ此事が、いかにも或面倒臭い事務でも片付いたやうに、甚だ單純で且つ甚だ自然な

のに呆れたのである。同時に彼は新しい特殊な心の底の意識によつて、これは別な事ではない、有機組織が破滅したから、死が當然に來たまで、ある、と了解した。

けれども今迄見えてゐた物がもう二度とは見られないのかと思ふと、彼にはたゞそればかりが遺憾であつた。で、馬車で病院へ送られてゆく間、彼は一杯涙を溜めた眼を大きく見開いて、何もかも一日のうちへ収めて了はうと勉めつゝも、又更に空や人や綠叢や遠碧く澄返つた地平線など、全世界のいとゞ細かな部分まで、再び自分の記憶には住め難い事を嘆きながら、ジツと周囲を見廻してゐた。今迄注意をした事のない些細な事物も、又相變らず重大にも美しく見えてゐた事物も、すべて等しく彼には懐しく思はれた。深く透徹つた星空、耗了すりきれた空色の綿服ムルムヤクに裏まつた馭者の瘠せた背中、ノギゴゾの悲しげな顔、塵埃の立つ道路、燈の點いた家々の窓、黙々と後方へ消えてゆく薄黒い木々、車輪の響、軟かな夕風、彼れの見たり聞いたり感じたりする一切の事物が、彼には此上もなく懐しく思はれたのである。

それから五體の苦痛が彼を一人ぼつちにしてしまふまで、彼は病院の廣間で食るやうに忙がはしく眼を走らしつゝ、見えて來る顔や動作や身振などを、一々觀察して一々記憶へ住めようとなつめた。が、さういふ感情はやがて悉く胸の底の深いところへ蓄積されて、苦痛の根本を増大させて行つた。彼は次第々々に生命から遠去つた。と、彼が今何かを見ても、彼にはそれが無關係な又無用の物として見えた。たうとう生と死との最後の格闘が始まつて、それが彼れの體中に蔓延した。そして動亂、顛覆、失心、無效の努力などといふもので作られた、新しい世界が——彼自

身に獨特な世界が生まれたのである。

其間にも醒覺の刹那々々はあつた。苦悶が靜まつて、呼吸がだん／＼に深くだん／＼に穩かになつると、彼は白い覆面でも隔てるやうに再びチラチラと色彩や物の容を見た又音もきいた。けれどもそれ等はすべて無意味に微弱に且つ遠くの方に見えたりした。

セメノヅはハツキリと音響をきいた。けれども二度とはそれをきかなかつた。すると、活動寫眞中の影法師を見るやうな、物の形が音もなく現れた。そして其間には、見知り越しの顔が彼れの眼界へ幾つも／＼浮び出て來たのだが、それが皆未知の顔のやうにのみ思はれて、何の記憶も喚起さなかつたのである。

隣の寢臺の傍にはすべ／＼に髭を剃つた妙な顔貌の男が一人新聞を讀んでゐた。セメノヅは其男が何を讀んでゐるのだから又なぜ讀んでゐるのだから、それを研究して見ようといふ氣も起らなかつたが、議會の選舉が延びた事だの、大公爵が暴行に遇つた事だのは、ハツキリと耳へ這入つた。けれども其言葉はもう彼には何の意味もなかつた。空虚から生じて、空虚へ響いて、痕方もなく音もなく、泡のやうに再び空虚へ消えて行つた。セメノヅは其男の唇が動いたり齒が現れたり圓らな眼が紙面を凝視したりするのを見た。又カサカサいふ紙の音もきいた。と、其間を洋燈が天井の中央に輝いてゐて、不吉な黒蠅がブンブン其周圍を飛廻つてゐた。

患者の腦中には、光輝を放つ點が一つ、ポツリと浮出してそれがだん／＼に周圍の物を照らし行つた。

セメノヅの心はふとハッキリ醒覺した。彼は考へた。今は何もかもすべて無用である。又凡ゆる世界の幻相は瀕死の我れセメノヅの爲に一時間の生命をさへ補足する事も出来ないのである。再び彼は浮動する黒い霧の波間へ身を没した。と、再び二箇の物凄く秘密力の間、かの殘虐な暗闘が開始されたのである。其二箇の力は人知れず必死となつて互に族滅し合ひながら、ぶる／＼と慄きながら、全世界を引鞞んだ。

彼れの周圍に泣いたり唱つたりする聲が響いた時、セメノヅは今一度生に還つた。そして其聲は彼には全く不案内なもので、彼れの状態には何等の關係もないやうにのみ考へられた。と、判然した明瞭な觀念がまた彼れの心中に輝いて彼は自分には一向同情のない、巧に愁を装つた男の顔をば、早速のうちに底の底まで見てとつたのである。

これが彼れの最後であつた。やがて凡ての生存者には絶対に理解の出来ない絶対に説明すべからざる何物かゞ來た。

十二

——僕の許へ來たまへ、僕等は故人の爲に彌撒を献げようと思ふ。と、イヴノヅがサニンに言つた。

サニンは頭を傾けて物も云はず頷いた。

二人は途中でウオツカや其肴になるものを買込んだ。それから少しゆくと。彼等はユリイ・ス

ヴロジツチと一緒にたつた。ユリイは胸の上へ頭を垂れて並木街を徘徊してゐたのである。

セメノヅの死はユリイに紛糾した心苦しい印象を與へた。彼にはそれが避くべからざる事のやうに、同時に又分拆し難い事のやうにも思はれた

——だが、あんな事は皆きまりきつた事なのだ。と、心中へ短い直線を一本引ばつて見ながら、ユリイは思つた。此世界へ出て來ない前には人間は存在してゐなかつたのだ。それは明白な事だ………それから又死ねばもう存在しないのだ。それも同様にきまりきつた事だ。同様に明白な事だ………死は活力を化成する機械が全く停止した事實にすぎないのだから、その中に恐ろしい事など少しも含んである筈はないのだ………昔しユラといふ一少年があつた。それが古典中學へ通つて、同窓の鼻柱を挫いたり、尋麻を寸断にしたり、自己獨特の氣隨氣儘な面白い生活をしてゐたのだ………と、其後間もなく、此ユラが死んで、其代りに大學生のユリイ・スヴロジツチといふ全く異つた男が歩いたり考へたりしてゐるのだ。そして若し此二人を一緒にして置いたら、ユラは今日のユリイが解せられないばかりぢやなく、煩い事をくどくど云ふ監督教師か何ぞのやうに思つて。恐らく彼を憎むだらう………従つて此二人の間には深淵が横たはつてゐるのだ。従つて少年のユラは事實死んだものだ………ユラは死んだのだ。俺自身死んだのだ。俺は今迄さうとは氣もつかなかつたけれど、さうなつて行つたのだ。いかにも自然にな！ いかにも單純にな！ 全くさうに違ひない………そして實際のところ死によつて俺達は何を失ふわけだらう………：人生は善い事よりや寧ろ悪い事の方が多し所だ………成程、歡樂もある。又歡樂を失ふのは苦

痛だ。が、死は人生に於ける一切の悪事に止めを刺すから、俺達にとっては寧ろ利益だ。さうだ、きまりきつた事だ！ 恐ろしい事なんぞ何にもありやしない！ と、ユリイはホツと溜息をつきながら聲高に云つた。が、心中の傷痕がチクチクするので、すぐ又云ひ出した。いや！……：ラ イフに充ちた複雑な全世界が、また、く間に虚無に歸して了ふのだ……：いや、少年のユラがユリイ・スヴロジツチに變つた事とは同じぢやない。死は忌はしい、不條理な、わけの分らぬ、恐ろしい事だ……

細かな球のやうな冷汗がタラタラと彼れの額へ滲じみ出た。

彼は脳中の全力を舉げて、此たへがたい状態を解かうと思つた。ところが、人は誰でもそれに耐へてゐるのである、現にセメノヴが耐へたやうに。

——奴は怖がつて死んだんぢやなかつた。と、考へると、ユリイはそんな事を憶出したのが不思議でたまらぬやうにニツコリした。奴は怖がるどころか、我々一同を嘲笑しやがつた。殊にあの司祭ゴエフとあの御祈禱とあの空涙をな……

そこに肝要な或一點がなければならぬ、とユリイは思つた。其一點さへわかれば、何もかも分るにちがひない、とまで思つた。けれども彼れの心と其一點との間には測り難い不透明な壁のやうなものが突立つてゐた。彼れの心は或表面の上をずる／＼と亘つた。又一つ思想を捉まへたかと思ふと、其思想はスルリと遁げた。いかなる方面へ想像を廻らして見ても、たゞ、平凡な、煩はしい「わけが分らぬ」とか、「怖しい」とかいふ言葉ばかりが同じやうに残つた……：彼れの

考は進まなかつた。恐らくはそれ以上には進み得なかつたものであらう……：これは彼れの身心にとつては惱ましくもあり、疲れもする事であつた。胸は息詰まるし、考はだらけるし、色彩が失はるし、頭は痛むし、彼は何もかも抛棄つて、人生までも抛棄つて、並木街の上、でそのまゝそこへ座りたくなつた。

——目前に萬事の休することを承知しながら、どうしてセメノヴには笑ふ事なんか出来たものなのだらう！ 奴は偉人だつたかも知らん？ なアに、奴は偉人らしい行爲をした事などありやしない……：して見ると、死は奴が考へてゐたほど恐ろしいものでもなかつたのか知らん……：

と、其時イヴノヴが大きな聲で突乎たひひに彼を呼んだのである。

——ヤア、君か。どこへ？ と、ユリイはぶる／＼震へながら訊いた。

——亡友の爲に彌撒ミサを献げるのさ。と、イヴノヴは愉快らしい粗野な聲で答へた。僕等と一緒に來たまへ。君は一體そんなところで、たつた一人何をしてるんかい？

ユリイは今物恐ろしくもあつたし胸苦しくもあつたので、イヴノヴとサニンとがいつもほど不快な人間にも見えなかつた。

——え、お伴しませう。と、彼は承知した。が、同時に、自分の彼等より優等な事を憶出して、かう考へた。俺は實際こん人間共と一緒に何をするつもりだらう？ ウオツカを飲んで、わかりきつた事を喋り合ふつもりかも知らん？

彼は拒らうかと思つたが、彼れの軀中が本能的に孤獨である事を厭がるので、彼等と一緒に رفتたのである。

イヴノヴとサニンは沈黙を續けた。三人はやがてイヴノヴの住居へ着いた。

日はトツブリ暮れて了つた。扉口の前で、彼等は臍氣に一人の人を見た。其人は腰掛に腰かけて、手に鉤のある太い杖子ステッキを持つてゐた。

— や、ビエトル・イリツチの伯父さん！ とイヴノヴが嬉しさうに叫んだ。

— 私ぢや。と、其人は答へた。と、其低い力のある聲が朗らかな空氣中へ凜々しく反響した。

イヴノヴの伯父は酒癖の悪い年老つた讚美歌々ひであつた事をユリイは憶出した。彼は斑白の口髭をばニコライ一世時代の兵卒流に蓄へてゐた。そして其耗了れた黒い胴衣は厭な臭氣がした。

— Bon, bon, bon ! と、彼は云つたが、其聲はまるで酒樽から出て来るやうであつた。イヴノヴは彼をユリイに紹介した。

ユリイは窮屈さうに手を差伸べた。彼はかういふ人物に對して何を云つていゝものか、又どこに近付いていゝものか、見當がつかなかつた。が、彼にとつては一切の人間はすべて同様であるべき筈だ、といふ事をすぐ憶出して、彼は此老讚美歌うたひと押並んで歩きはじめた。

イヴノヴの部屋は人の住居といふよりは物置小屋に近かつた。それほど紛雜したもので、塵埃だらけであつた。が、主人が洋燈を點けた時に見ると、ユリイは四壁が版にしたヴスネツオヴの繪で飾られてあるのに氣がついた。又がらくただとばかり思つてゐた物は、積層なつた書物

にすぎなかつた。

彼はテレテ注意深さうに版畫を検しはじめた。

— 君はヴスネツオヴが好きかね？ と、イヴノヴは彼に訊いたが、答をも待たず皿を探しに行つた。

サニンはビエトル・イリツチにセメノヴの死を報じた。

— 神は彼に平和を與へ給はん事を！ と、老讚美歌うたひの聲が又酒樽から出て来るやうに唸つた。と、彼は附加へた。

— そこで一切合切覺がつくわけぢや。

ユリイは物思はしげな顔をしてビエトル・イリツチを視てゐたが、ふと此好人物に對して多大な同情を感じた。

イヴノヴはパンと鹽漬にした胡瓜一皿と、それから盞などを持つて來たが、豫じめ新聞紙で蔽うた卓上へ、さういふ物をすべて並べて置いて、さて罐を拿上げ、人には氣のつかぬほど一寸動く、一滴も零さずに栓を脱いた。

— 巧いもんぢや。と、ビエトル・イリツチが感嘆した。

— 何か心得てゐる人間はすぐ人に知れるね。と、淡緑の液體を盞へ注ぎながら、イヴノヴは満足らしく云つた。

— さて、諸君。と、彼は盞を上げて、聲を高めながら云つた。故人の靈の安息のために、云

そ！

彼等は肴物さかなを食べて、それから又飲んだ。碌々物も云はずに、大に飲んだ。やがてこの小さな部屋の空氣は息苦しくなつた。するとビートル・イリツチが紙巻烟草に火を點けたので、其安煙草の青い煙が一層空氣を重苦しくした。ウオツカや煙や暑さの爲に、ユリイは心持が悪くなつて、頭がぐらぐらした。と、セメノヅの事が煩さく心へ浮んで來た。

——死は實に厭なものです！ と、彼は云つた。

——なぜな？ と、ビートル・イリツチが訊いた。死はな？……ハ、ハ……死は……止むを得んものぢやよ……死はな……人間が若し永遠に生きてたらどうぢや？ ハ、ハ……君の言葉を考へて見給へ永遠に生きる事ぢや。永遠の人生とは何ぢやらう？

ユリイはすぐ胸の中で、自分が若し永遠に生き得べきものであつたら、どうだらう、と考へて見た。彼は灰色の無際限な、恰も無窮から無窮へ繰延べらるゝやうに標的もなく虚無のうちへ展舒する、長い——線を想像した。と、色彩、音響、情緒など凡ゆる觀念は、たえず流れて而も運動も静止もない混沌たる灰色のうちへ、だん——に蒼ざめて、遂に姿を没して了つた。それはもう生ではなかつた。死を永遠にしたものであつた。

ユリイはそれを確めるとゾツとした。

——さう、全くですな……と、彼は口籠つた。

——君はよほど深く印象を與へられたやうだね？ と、イヴノヅが口を出した。

——では、誰か印象を受けなかつたでせうか？ と、ユリイは反問した。

イヴノヅは頭を掉つて、セメノヅの最後の模様をばビートル・イリツチに語りはじめた。

部屋の空氣は怵へ難いほど息苦しくなつた。ユリイは洋燈の光輝の下でキラ——するウオツカをジロリと見やつた。其ウオツカをばイヴノヅの眞赤な唇がガブリと飲んだ。と、彼は自分の周圍の一切の物がぐる——廻つて錯亂するやうに感じた。

あ——あ——あ……と、か細い神祕的な物悲しい小聲が、彼れの耳の中で呟いた。

——いや、死は恐ろしいです？ と、彼は無意識に繰返した、恰も其神祕的な小聲に答へるものゝやうに。

——君は神経が過敏だ。と、輕蔑するやうにイヴノヅが云つた。

——で、君は、君はさう思はんの……？ と、ユリイが訊いた。

——僕？ 思はん！ 成程、僕は少しも死にたくない。死は醜穢な事實だ。生きてるぐらゐ楽しい事はない……が、若し死が僕に來たら、さうさ……僕は立所に潔く死ぬよ。

——だが、君はまだ死んだ事はあるまい。だから保證の限りぢやない。と、サニンはニッコリした。

——それは尙更眞理だ。と、イヴノヅも笑つた。

——そんな事はすべて分りきつた話です。と、イラ——した調子で、不意とユリイが云つた。人は何とでも云ひたい方題の事が云へます。然し死は依然として死のまゝです。死は死其物から

が恐しいのです。或人間にとつては……さやう、自己の生命について考ふる人間にとつては、かの避くべからざる猛烈な最後は、其人間の生存中に於ける凡ゆる快樂を殺すのです……然る時はライフにいかなる意義があるでせう？

——そんな事もやはり分りきつた話だ。と、今度はイヴノヴがイラついて、擲擲面に遮つた。君等の考へる事は、皆君等ばかりが……。

——すると、人生の意義は何ぢやな？ と、ビエトル・イリツチが執拗く訊いた。

——意義なんぞありやしない！ と、イヴノヴは腹を立て、叫んだ。

——いや、さうは云へるものぢやないです。と、ユリイが受けた。一切の物はあまり巧みな程我々の四周に整頓されてゐるのです。

——僕の考によればな、と、サニンは口を出して。地上に善い事なんぞありやしない。

——君は何を云ふですか？ 然らば、自然は？

——ほう、自然な！ と、サニンは人を馬鹿にするやうな身振をして、もの和らかにニッコリしながら云つた。それはね、自然は完全なものだ、といふ昔からの云ひ習はしにすぎないのさ……本當を云つたらね、自然は人間生活同様の、事なんぞありやしないのだ。だから、それほどツバ抜けた空想などを逞しうしないだつて、我々は誰でも此世界よりや百層倍も結構つくめな世界を想像する事が出来るだらう……なぜ我々は永遠に熱や光を所有してゐられないのか？ なぜ永遠に緑を湛へた楽しみみの盡きざる宇宙的の公園を所有する事が出来ないのか？……。

——して、我々のライフの意義は？

——勿論、其中には或意義があるべき筈だね……目的は事物の歩調を定めるものだから、單にそれだけの理由からして意義はある。若し目的がないとすれば、一切はたゞ混沌にすぎないものだらう……ところが、目的は我々のライフ以外にあるのだね。そいつは宇宙の大本中にあるのだ……明々白々な話さ……我々は宇宙の始原たるを得ない。又其終極たるを得ない。我々の役目はワキ師だ。即ち受身だ。單に我々が生きるといふ事實によつて、我々の使命は完うされるのだよ。我々の生は必要さ。従つて我々の死も亦必要だね。

——誰にとつて？

——そんな事が僕に分るものか。と、サニンはニコリした。が、そいつはどうだつていゝさ。僕のライフはね、即ち僕の快不快の感覺だよ。其境地以外にあるものなんぞは、糞でも啖へさ……我々はどんな作説でも立てられるよ。但しそいつは依然として假説のまゝで残るだらう。そんな物の上にライフを組立てる奴は馬鹿だ……そんな物を要求する奴は頭に大穴が穿くだらう……僕なんざ、生きたいね……たゞそれだけさ。

——そこで一杯やつちやどうだ？ と、イヴノヴが云つた。

——君は神を信ずるかね？ と、ビエトル・イリツチは烟に巻かれて眼をサニンの方へ向けながら訊いた。今の人はもうそんなものを信じない……信じ得べきものすら信じないのぢや。

——さうな、僕は神を信ずるね。と、サニンは笑ひながら云つた。神に對する信仰は幼い時の

まゝで僕に残つてゐる。僕は其信仰に反抗する必要を認めない。が、そいつを鞏固なものにしよ
うといふ必要も亦認めない。そいつは甚だ便利だよ。神が存在してゐるなら、僕は神に誠實な信
仰を獻げるね。然し神が存在してゐなかつた場合には、さう、僕にとつちや一層可なりだ。
——さうすると、信仰と無宗教との基礎の上へライフを建て、ある事になるでせう。と、ユリ
イが突込んだ。

サニンは頭を掉つた。彼れの顔は平然として楽しげな愛嬌のある表情を湛へた。

——いゝや、と、彼は云つた。僕はそんな物の上に自分のライフなんぞ築かないよ。

——然らば何の上に、と。ユリイは疲れきつて訊いた。

「あ—あ—あ—……もう飲んではいかん」と、彼は額へ手を宛てながら考へた。と、額は冷汗
でベツトリ濡れてゐた。彼はサニンが何か答へたか但し何も答へなかつたか、すぐ耳へ入らな
かつた。と、頭がグラ／＼して、一寸の間氣が遠くなつた。

——……僕は神の存在を信するよ。だが其信念は其信念自身で僕の心中に生きてゐるわけさ。
と、サニンは續けてゐた神が果して存在してゐるかどうか、ハッキリした事は僕は知らんがね。
又神が僕に何事を命じてゐるものやら……いくら熱誠な信仰があつたつて、そいつも僕にはわ
かりかねる……神は神さ、神は人間ぢやないから、いかなる人間の物差でも神を付度する事は
出来ない。我々の目に觸れる神の創造は一切を包有してゐる。悪も善も、生も死も、美も醜も……
……即ち一切さ……ところが却つてそれが爲に一切の意義、一切の精確な事が我々から逃げて

行つて了ふ。従つて其意義は人間的ぢやない。而して善惡に對する其定義は決して人間的の善惡
ぢやなくなるのだ……我々の神の概念は、いつだつて偶像的だらうよ。我々はいつだつて我々
の崇拜物に持つて行つて我々の生活する風土的條件に適つた容貌や服裝を與へるだらうさ……
荒誕不稽な話ぢやないか！

——其通りだ！ と、イヴノヅは讚嘆した。

——然らば何の爲に生きるか？ と、いかにも嫌さうに蓋を推遣りながら、ユリイが訊いた。

——そして何の爲に死ぬか？

——僕にわかるのはたゞ一事のみさ。と、サニンは答へた。即ちライフが僕にとつては一の刑
罰ぢやない、といふ事をば僕は要求してゐるのさ……此目的からすれば、何よりも先づ僕の自然
的欲求を満足させなければならぬ……我々の欲求は一切だ。人間に欲求が消滅する時は、其
ライフも亦消滅する。又人間が自己の欲求を殺す時は、其人間も同様に自殺する。

——併しながら我々の欲求は有害な物だらうではないか？

——そりあ大きにさうらしい。

——然る時は？

——然る時は……同じ事でせうよ。と、サニンは其凜とした眼でシツとユリイの顔を見つめ
ながら、丁寧に答へた。

イヴノヅは眉を擧めて疑はしさうにサニンを見たが、何も云はなかつた。ユリイも黙つて了つ

た。なぜか知らぬが、サニンの凍とした明快な眼を見るのが彼には無氣味であつた。が、彼は努めてそれを凝視めようとした。

二三分の間はシンと静まり返つてゐた。と、絶望的に窓硝子へ衝突かる夜蝶の羽音ばかりきこえた。ピエトル・イリツチはアルコオルの爲に愚鈍になつた顔をば穢く濡れた新聞紙の上へ傾けながら、悲しげに頭を擡げた。サニンは相變らずニコ／＼してゐた。

この依然たる微笑はユリイをイラつかせもしたし、又牽付けもした。

「あの男の眼はどうしてあゝ透徹るのだらう」と、彼は思つた。

サニンはつと立上つて、窓を開き、蝶々を出してやつた。大きな翅がバサ／＼といふ音と共に、新鮮な爽かな空氣が波をうつて室内へ這入つて來た。

——さうだ。と、イヴノヴは自分の胸に答へながら云つた。人はさまざまだ。だから我々は飲まうよ。

——いや、と、ユリイは頭をぐらつかせながら答へた。私は飲みますまい。

——な、なぜ？

——私は一體のめんですから……。

ウオツカと暑さとが彼れの頭を重くしたので、彼は新鮮な空氣に觸れたくなつた。

——私は失敬します……と、立上りながら彼は云つた。

——どこへゆくのかい？……もつと飲みたまへ！

——いや、實際のところ、私は行かなくちやならんのですから……と、帽子を探しながら、ユリイはそゞろに呟いた。

——では、いづれ又！

戸を閉めようとする際、ユリイはピエトル・イリツチへまだ何か云つてゐるサニンの聲をきいた。……さう、子供のやうぢやないね。子供は善や美を見分ける事を知らない。彼等は自然でもある、眞率でもある。そこに彼等の……。

ユリイは戸を閉めたので、其先はもうきこえなかつた。

圓い朗らかな月は中空高く懸つてゐた。空氣は爽かであつた。と、露の濕りがユリイの額を掠めた。凡ゆる物は銀のやうな月光の下にキラ／＼と光つてゐた。ユリイは明るい又淋しい街をば黙々と歩きながら、思ふともなく思浮べた此都會のどこかに或黒いシンとした部屋があつて、其内には死んで冷たくなつたセメノヴが、卓子の上に長々と横たはつてゐるのだなどと。

が、ユリイはもう、深い濃霧に蔽はれて、魂を滅ぼされたり世界を奪去られたりするやうな、かの重苦しい恐ろしい考には脅やかされなかつた。彼れの心頭には肅やかな哀愁が迫つた。彼はほの／＼と輝いてゐる月の面を黙つて見てゐたくなつた。

月光の下を荒涼として彼の前に擴がつて或地點を横ぎる時、ユリイはふとサニンをば憶出したのである。

——何といふ男だらう？ と、彼は奇異な感に打たれながら我とわが胸に訊いて見た。で、彼

はいろ／＼考へて見たけれども、サニンを定義のしやうがなかつた。

彼れユリイともあるべき者が即座に定義の出来ないやうな人間に遇つたといふ事が、どうも面白くなかつたので、よし拙くとも彼は何とか断定したくてたまらなくなつた。

——放言家だ。と考へて、彼は意地のわるい愉悅を感じた。昔は人生やさまざまの傑れた理想に對して冷笑を氣取つた者もあつた。而して今は動物性を氣取る者がある……。

そこでサニンなどに屈託する事はやめて、ユリイは自分自身について考へた。彼は思つた。自分は何にも氣取つてゐない。苦悶と思想とを除いては、自分には何物もないのだ。それが他人とは異つたところだ。

さう思ふと嬉しくなつた。が、何だか彼に足りない物があつた。と、セメノヅの追憶が再び心中へ戻つて來たのである。

もうあの病大學生を見る事が出来ないのかと考へると、ユリイは悲しくなつた。彼は今迄彼を愛した事などはなかつたものだが、どうしたのか、セメノヅが彼に近いやうに思はれた。そして涙が出るほど懐かしくなつた。ユリイは墓の中に横臥した死者を想像して見た。顔が腐つて、軀には蛆が一杯集つて、それが湿々と綠色に汚れた禮服の下に形の壞れた五體を潜つて、いやらしくウヨ／＼と蠕動してゐるだらう。ユイリは嘔きたいやうな心持になつてブル／＼慄へながら、セメノヅの言葉を想出した。

「僕はそこへゆくのだ。君は、君は僕の墓の上で五慾を恣にするのだらう……。」

——これがすべて人間なのだ。とユリイは道路の脂染みた塵埃をジツと見まもりながら考へてゾツとした。俺が歩くと、人間の脳や心臓や眼を蹂躪するのだ……あ……。

何だか嘔きたくなつて、彼は膝を折つた。

——俺も死ぬのだ……人が又同じやうに俺の上を歩くのだらう。そして俺が今考へるやうな事を考へるのだらう……さうだ。あまり遅くならぬうちに、生きて、生きて、生きぬかなかちやならん……俺のライフの一瞬間も無駄にならぬやうに生きなくちやならん……さうするにはどうしたらいいだらう？

その邊は明るくて且つ寂しかった。月は到るところへ其蒼い謎のやうな光を散らしてゐた。そして深い／＼静けさが全市街を引包んでゐた。

ベイヤンのうち顫ふ緒琴は

其身の上をやかーたゝるらむ……。

と、ユリイは徐かに唱つた。

——退屈で、恐ろしくて、悲しい！ と、彼は誰かに懇へるやうな大きな聲で云つた。が、自分ながら其聲に驚いて、誰もきゝはしなかつたかと彼は四方を見廻したのである。

——俺は酔拂つた。と、彼は考へた。

夜は晴朗と静まり返つてゐた。

十三

カルサギナとツヴボとが暫時の間この小都會を立去つたので、ユリイ・スヴロジツチの生活は均齊にもなり單調にもなつた。

父のニコライ・エゴロギツチは家計や俱樂部の事で忙がしがつてゐたし、又リヤリヤとリヤザンツエヴとは第三者が面前にある事を煩さがつてゐたので、ユリイは彼等と一緒にゐるのが窮屈であつた。で、彼は知らず識らず夜は早くから寝て了ふし、翌日は午飯近くなつてから漸う起きて来るやうになつた。彼は自分の思想を繰返し々々考へながら、又エネルギーが一時にどツと流出して彼に偉大なる何事かをさせるやうな日の来るのを待ちわびながら、終日庭園の中や自分の寢室で暮らした。

この「偉大なる」何事かは日毎に別な形式を取つた。或時はそれが繪畫であつた。或時は論文の連發であつた。それはユリイ・スヴロジツチに黨中の主なる地位を與へないのが社會民主黨の犯せる大失態であつたといふ事をば全世界に示すべき論文であつた。時には又それが人民と結合して彼れの指揮の下に活潑々地の直接行動を開始しようとする事であつた。いづれも重要で且つ大規模な事であつた。けれども日はズン々過去つて、彼にはたゞ無聊ばかりが残つた。ノギコヴとシヤフロヴとが一二度彼を訪問した。ユリイは自分の方からも朗讀を助けたり訪ねても行つ

たが、さて自分の求むる物はどこにも見當らなかつた。

或日、彼はリヤザンツエヴの家へ行つた。醫師は風通しのいい、廣々とした大きな居宅を所有してゐた。どの部屋にもくく強壯な人間を慰めるには持つて來いといふ物が充ちてゐた。體操道具、鐵啞鈴、電氣療器、竹刀、釣道具、鞆網、喇叭、煙管など。さういふ物はすべて氣力ある人の健全なる生活と満足とを示して餘りあつた。

リヤザンツエヴは丁重にユリイを迎へた。で、四方山の話をしたり、酒や煙草を勧めたりして、終ひに遊獵を誘つた。

——然し、私には銃がないです。

——いや、其お氣遣ひには及ばんです。私のを御使用下さい、私は五挺ほど持つてをります。と、リヤザンツエヴが答へた。

彼はユリイをばたゞリヤリヤの兄としてのみ見てゐた。そして全力を擧げて彼を悦ばさうとした。そこでユリイが自分の銃のうちの一番氣に入つたのを取るやうに熱心に説立てながら、いそいそと銃を持出し、一つく彼れの鼻先へ突付け、其構造を説明し、剩へ庭の標的を目掛けて射撃までして見せたので、ユリイも笑出して、たうとう銃と彈藥筒とを受取つた。

——満足です。と、リヤザンツエヴは心から嬉しさうに云つた。私は明日鴨獵に出懸ける考ですが……御一緒に如何ですか？

——お件ませう。と、ユリイは承諾した。

家へ歸ると、彼は二時間も銃に取着いて、それを點検して見たり、それに革紐をつけて見たり、肩へ當がつて見たり。洋燈を狙つて見たりした。それから又古ぼけた狩獵靴へ念入りに脂などを塗つた。

翌日の夕方近くなると、リヤザンツエヴは相變らず快活な晴々とした様子で、栗毛の肥馬に曳かせた輕馬車ドロンユケに乗つて、ユリイを迎へに來た。

——お支度は出來ましたか？ と、彼は窓の外から聲をかけた。

ユリイは既に銃や彈藥箱や獵囊を身につけて了つてゐたので、ニヤ／＼笑ひながら、窮屈おしどろさうな歩武おしどろをして、家から出て來た。

——出來ました、出來ました、と彼は云つた。

甚だ身輕な扮装をしてゐたリヤザンツエヴは、ユリイの武装を見て驚いた。

——窮屈おしどろでせう。と、彼は微笑みながら云つた。すつかり脱つて、爰へお寄越しなさい。現場へ行つてから。又取付けた方が宜しいですよ。

彼はユリイを手傳つて其武装を解かせ、それをば輕馬車ドロンユケの腰掛の上へ並べた。それから威勢よく出發した。日は傾いたが、まだ暑くて、塵埃も高かつた。ユリイは輕馬車ドロンユケがガタつくので、腰掛へ掴まつてゐないわけにはゆかなかつた。リヤザンツエヴはノベツに喋りノベツ笑つてゐた。

ユリイは其腋の下の色が褪めた絹短衣きぬじやくを着た丈夫さうな脊中をば親しみ深さうに見やりながら、其氣でもなくリヤザンツエヴに連れて笑つたり串戯を云つたりした。平野へ出ると、硬い雜草が

馬の足の下でピシリ／＼と鳴つた。塵埃は收まつて、空氣は次第にすが／＼しくなつた。

リヤザンツエヴは長方形をした平坦な水瓜畑の傍で汗みづくになつた馬を駐めた。と、彼は優しい朗らかな次低音バットンの聲でなが／＼と叫んだ。

——クズマアア……クズマアアア……

見えるか見えない程の人影が何かボソ／＼話しながら畑の向側から現はれた。リヤザンツエヴの聲をきくと、其頭が一樣に動いて、注意深く新來者の方を見た。やがて一つの影が群から離れて、のそ／＼とやつて來た。や、近づくと、それは手の硬ばつた、長い斑白髻を垂れた、白髪の百姓であつた。

彼は二人の傍へ靜々と近寄ると、ニコ／＼しながら云つた。

——そんな大きな聲を出しなすつて、よほどお丈夫だと見えますのう、アナトリー・バヴロギツチさんよ。

——今日は、クズマ、どうだね？……お前の家へ馬を預けたいのだが……。

——え、／＼、ようがすとも、と馬の手綱をとりながら、百姓は靜かな愛相のいゝ聲で答へた。獵にお出でかね？……そのお方は？ と、ジロ／＼、ユリイを見ながら彼は訊いた。

——ニコライ・エゴロギツチさんの御息だよ。と、リヤザンツエヴが答へた。

——お、お、……道理でリウドミラ・ニコラエヴナさんに似てお出でなさると思ひましたで……のう……此愛相のいゝ老農夫が自分の妹を知つてゐて、飾氣なく又親しげに彼女の

事を話すのが、ユリイには嬉しかった。

——さて、出懸けませう！ と、リヤザンツエヴは愉快さうに云ひながら、銃へ弾薬箱を引懸けて先へ立つた。

——お仕合よう！ と、クズマは後ろで叫んだ。と、馬を小屋へ入れる時のブル、といふ聲が続いてきこえた。

二人は沼地へ達する前に一露里エルストほど歩いた。太陽はもう没してゐた。その邊の地面はヌラ／＼してゐて、牧草や菅すがや蘆あしが一面に繁つてゐた。濕っぽい佳い匂を散らしながら、水がそちこちに光つてゐた。リヤザンツエヴは何か責任のある重大な事の準備にでも取掛るやうに、烟草をすて、脚を擡げながら、俄に眞顔をつくつた。ユリイは右の方へ行つて、蘆の蔭の、それほど溼ぬかるまない、立つてゐるのに便利な場所を選んだ。彼の前には池が擴つてゐたが、深く清きよさうな其水は晩景の餘光にチラ／＼と燦きらめいてゐた。と、ズツと離れたところに淡黒く聯つた線が一本見えた。それは向岸であつた。

間もなく鴨が動出して、二群三群バサ／＼と飛んだ。彼等は人間の頭越しに慌だしく蘆の向へ過ぎて行つた。まだ明るい空の上へは彼等の影がハッキリと映つた。リヤザンツエヴは先づ引金をひいた。と、手筈があつた。射られた一羽は草の中を毬のやうにくる／＼と廻つて、蘆をガサつかしながら、水の方へ轉がり出ると、ポチャリと落ちた。

——上出来だ！ と、リヤザンツエヴは朗らかな聲で叫ぶと、やがてカラ／＼と笑つた。

——可愛い、男さな。と、ユリイは思つた。で、今度は彼が火蓋を切ると、同様に手筈はあつたけれども射られた鳥はどこか遠くへ落ちたので、いくら探しても見當らなかつた。そして手を擦剝いたり、水の中へ膝まで踏込んだりするものが落ちであつた。が、この失敗は却つて彼れの意氣を熾さかんにしたのである。

火薬の煙は川の新鮮な空氣のうちに特殊な快い匂を漾よはした。薄暗い綠叢を越して赤い火花を投げつけ／＼銃聲が楽しげに響いた。彈丸に中つた鴨はチラホラ星の輝いた白綠色の空際へ婉曲な孤線を描いた。ユリイは今迄感じた事のない壯快を覺えた。

時が經つに従つて、鴨はだん／＼ゐなくなつた。そして霧が深くなつたので、狙ふのに骨が折れて來た。

——さア……もう歸りませう。と、遠くの方からリヤザンツエヴが叫んだ。

ユリイは歸る氣はなかつたが、それでも行潦の中へザブザブ踏込んだり莞草いんさへ引懸つたりしながら、リヤザンツエヴの前に行つた。二人は眼を光らして喘いき／＼一緒になつた。

——どうです、成功しましたか。と、リヤザンツエヴが訊いた。

——え、まア。と、ユリイは一杯になつた獵囊を示しながら答へた。

——と、貴兄は私よりお上手です。と、リヤザンツエヴが褒めそやした。

ユリイは體力上の才能などには常に一顧の價値をも置かなかつたのだが、リヤザンツエヴの此讚辭は嬉しかつた。

彼は満足らしく答へた。

——運がよかつただけです。

二人が小屋へ立歸つた時は、全たく暗くなつてゐた。瓜畑は暗中に没してゐた。たゞ水瓜の前方の列だけが白い火に照らされて濃い長い影を地上に印してゐた。小屋の傍では馬が鼻を鳴らした。そこには乾草の一堆がもえてゐた。又男達の話聲や女達の笑聲やそれからユリイには聴きおぼえないでもない陽氣な無頓着な聲などもきこえた。

——あれはサニン君ですな。と、リヤザンツエヴが驚いて云つた。先生はどうしてこんなところへ來てゐるんでせう？

二人は火に近づいた。クズマは火に照らされてゐる仲間のうちにゐたが、頭をあげて愛相よく二人に會釋した。

——獵物は澤山ありましたかのう？ と、彼は垂れた髭越しの低い濁聲で訊いた。

——無いでもないね。と、リヤザンツエヴが答へた。

大きな南瓜の上へ腰かけてゐたサニンも亦頭をあげて、二人を見てニッコリした。

——貴兄はどうして爰にお出で、と、リヤザンツエヴは怪訝な顔をした。

——クズマ・プロコロギツチと僕とは舊い友達ですよ。と説明して、サニンはいよくニッコリした。

クズマは黄ろく腐つた脱残りの齒を見せて満足らしく笑つた。と、節くれ立つた硬い指先でサ

ニンの膝を小衝いた。

——さうがす。と、彼は云つた。アナトリー・バヴロギツチさんよ、座つて、この水瓜を食べなされや。若様、あなたは……何といふお名前ですかのう？

——ユリイ・ニコライエギツチ。と、先づニッコリしてユリイは答へた。

彼は一寸不快に感じたが、この物靜かな老農夫と、それから其なれくしい露西亞訛と小露西亞訛との半々な言葉とが、大に彼れの氣に入つたのである。

——ユリイ・ニコライエギツチさん、さうかのう……そこでお昵近になりますべいな。お座りなされやユリイ・ニコライエギツチさんよ。

ユリイとリヤザンツエヴとは重いコツコツした大きな南瓜を火の傍へ轉がして、其上へ腰掛た。

——どれ、打つて來なかつた物をお見せなされや。と、クズマが云つた。

獲物が獵囊から投出されると、血がポタポタと地上に滴つた。鳥はチロチロ閃く光を受けて、もの凄いな不快な恰好をしてゐた。血は黒く見えた。そして其拘攣つた肢は動いてゐるやうであつた。

クズマは一羽の鴨を拿上げて、翼に觸つて見た。

——脂があるのう。と、彼は褒めた。アナトリー・バヴロギツチさんよ、俺に一番ひ下されや……あんだ、そんなにお持ちなさるのでのう……

——欲しけりや私のを皆上げよう。と、ユリイは熱心に云つた。

——皆？……ほう、ほう、あんたは善いお方ぢやのう。と、老農夫は微笑んだ。俺が一番ひあればいゝのぢやで、たんだ一番ひだけぢや……どなたのお氣にも逆らぬやうにのう。他の百姓達も又其女房達も側へよつて眺めた。けれども火の光がまぶしいので、ユリイには充分に彼等が見分けられなかつた。時たま一人二人の顔がパツと照らされたかと思ふと、すぐ又暗隅へ没して了つた。

サニンは獅嚙面をしてゐた。死んだ鳥を見ると、彼は後退りして、ついと立上つた。美しい鳥が血や埃に塗れて、其翼が碎けたり苦茶々々になつたりしたのを見て、彼は心持がわるくなつたのである。

ユリイはクズマが黄ろい骨の柄の、溝のある庖丁で截つた、水氣の多い、熟した水瓜の片をば口をつけて旨さうに咬つた。咬りながら彼は好奇の眼をあげてたえず人々を觀察してゐた。

——食べなされや、ユリイ・ニコライエギツチさんよ。此水瓜は出来がいゝ、どのう……俺はのう、あんたの妹のリユドミラ・ニコラエヅナさんも、又あんたのお父さんも覺えてゐますでのう……食べなされ、食べなされ、結構な味ぢやで……

ユリイは何もかも氣に入つた——パンと羊毛皮の匂が混合したやうな百姓達の臭氣も、勢のいゝ火の光も、腰掛けてゐる南瓜も。彼は又クズマの顔を見てゐるのが嬉しかつた。其顔は老農夫が下を向いてゐる時にはハッキリ見えた。又頭をあげた時には蔭にかくれて眼ばかり光つた。ユリイには又かうも思はれた。闇黒が丁度頭の眞上に懸つてゐて、それが明るくなつた場所へ温い

親和力を與へるものであらうと。で、上を向くたび、彼には最初全く何も見えなかつたが、其暗い高い空はだん／＼に神々しく寂かになつて、ピカリピカリと星さへ其中へ鏤められて行つた。が、さて、かうした百姓達とは一體どんな話をしたらいいものか、一向に勝手がわからぬので、ユリイは確と當惑したのである。

クズマやサニンやリヤザンツエグ達が別段何の話題をも擇ばうとはせず、極めて暢氣に話合つてゐた。彼等は目に觸れた物を何でも捉へては話の種にした。

——そこで、土地はどんな鹽梅です？ と、一寸靜かになつたので、彼は訊いたが、自分の問は何だか時宜を得ないやうな心持もした。

クズマは彼を見て答へた。

——俺達は待つてますのぢやて、今暫く待つてますのぢやて……そのうちには何とかなりませうでのう。が、彼は又瓜畑の事や、水瓜の値段や、其外自分一己に關する事ばかり再び話しはじめたのである。ユリイは尙更當惑したのだが、併したゞジツとして聽耳を立て、ゝゝあるのも快くはあつた。

聲音がきこえて、白い尻尾をぐいと巻きあげた褐色の犬が一匹、明るくなつた圈内へ姿を現はした。彼はユリイやリヤザンツエグの匂を嗅いだり、サニンの膝の間へ身を擦付けた。とサニンは其逆立つた粗い毛の脊中をなでてやつた。やがて顎髯を疎らにもじやくと生やした、眼の小さく鋭い、小柄の老人が現はれた。彼は手に單發銃を携へてゐた。

——俺等の番人でのう……爺様ぢやよ。と、クズマが云つた。

老人は地面へベツタリ座つて、ユリイとリヤザンエヴをまじりくと見てゐた。

——獵から來たのぢや……のう……と、老人は齒が脱けて壊れた齧はかを露はしながら、ゼイ掠れる聲で云つた……エへ……クズマよう、馬鈴薯を煮る時分ぢやのう、エへ……リヤザンツエヴは老人の銃を拿上げて、微笑みながらユリイに見せた。それは古ぼけた、錆びた、針線で卷付けた、重い先装銃さいせいつゆうであつた。

——奇妙な鐵砲ですね。と、彼は云つた。爺さん、お前、これを打つのに怖くはないかね？

——エへ……俺は自分を打ちさうになつたので、……ステファン・チャブカが云つたがのう、撃鐵ヒストンがなくても鐵砲ヒストンでさうぢや……エへ……撃鐵ヒストンがなくてもものう……だ云つたにはのう、硫黄を中へ入れると、撃鐵ヒストンがなくても火イ出るさうぢや……ぢやで、俺は膝の上へのう、斯う鐵砲置いて、打金を掴んだものぢや……打金をのう、斯う指の先でのう……ど、さうれ、バ……バン……バン……ど、ぶ……ぶ……ぶ……のう！俺は自分を打ちさうになつたので……エへエへ打金エ掴むと、さうれ、バ、バン！ど、ぶ……ぶ……ぶ……出たがのう……俺は自分を打ちさうになつたので……

皆は笑つた……ユリイは涙が出た。それほど此もじやくした白髯の老人と、其ゼイゼイ掠れる口とが可笑しくてたまらなかつたのである。

老人も笑つた。そして其小さな眼にも涙が出た。

——俺は死なねえのぢやで、何の事もなかつたがのう……

火影の圏外なる暗闇で、知らぬ紳士達に遠慮してゐた娘等の笑聲がきこえた。サニンはユリイの思懸けぬ場所へ五六歩離れてゐて、パツと寸燐マツチを擦つたユリイは其小さな薔薇色の火の光で、物靜かな又媚びるやうなサニンの眼が光るのを見た。若い女が一人その傍にゐたが、彼女は其黒い眉毛の下の濃い色の眼で、いかにも嬉しさうな天真爛漫な表情をしながら、ジツとサニンを見つめてゐた。

リヤザンツエヴは其方向へむけてパチクリ轉瞬まはたきをしながら云つた。

——お爺さん、お前、ちと孫娘に氣をついたらどうだね？ え、？……

——何しに氣をつけますべしよ。と、老クズマはどうでもいふ風ふうに腕を動かしながら答へた。若い時は仕方がねえものぢやで。

——エへ……エへ……と、老番人も答へて、裸指で燃炭を火の中から撮上げた。

闇黒ではサニンの笑聲がきこえた。が、相手の女が體裁たいざいわるくでも思つたらしく、二人の聲はだんく退去つて行つた。

——歸りませう。と、リヤザンツエヴは立上りながら云つた。有難う、クズマ。

——なんの、なんの。と、クズマは其斑白髯こましろひげへ附着いた黒い水瓜の核をば袖で拂ひながら答へた。

彼はリヤザンツエヴとユリイへ手を差伸べた。ユリイは窮屈きつこくさうに又心持よきさうに老人の節

くれ立つた指先を握りしめた。

火から少し離れると、周囲がだん／＼ハッキリして来た。星は冷やかにキラキラして、其蒼白い光の下に、凡ゆる物は不可思議なほど美しく静まりかへつて、其際涯がわからなかつた。火の傍に座つた人々も、馬も、車も、積上げられた水瓜も、著しく眞黒に見えた。

ユリイは南瓜に衝突つて踰躓いた。

——氣をつけたまへ。と、サニンの聲がした。さよなら。

——さよなら。と、ユリイは顧向きながら答へた。

彼はサニンの淡黒い影法師と、それから今一人、サニンへピッタリ縋りついた、スラリとした、艶な女の影法師とを見た。ユリイは胸がドキドキして、ウツトリと氣が遠くなるやうに覺えた。と、忽ちカルサギナの事を憶出して、彼はサニンを羨んだ。

輕馬車ドリンケの車輪と馬の喘ぎとが再び夜の闇に響いた。火は殆ど見えなくなつて、話聲や笑聲はもうきこえなくなつた。そしてシンと静まり返つた。ユリイは徐ろに眼をあげて空を仰いだ。空には無邊際ディヤンの網の上を星が金剛石のやうに燦爛としてゐた。

木柵や街の燈が見えはじめて、犬の遠吠などもきこえた時、リヤザンツエヴはユリイに云つた。

——あのクズマは實際哲學者ですね？

ユリイは相手の頸を見た。そして自分の愁はしい空想を破つた其言葉の意味を理解しようとな努めながら、

——なるほど……さうですな……と、そゞろに答へた。

——けれど、サニン君があんな大膽な男だとは氣がつきませんでしたよ。と云つて、リヤザンツエヴは笑つた。

ユリイは全く我に還つた。彼はサニンと其側にゐた女の美しい顔とを心に描いて見た。サニンの擦つた寸燐マツチの光で見た時に、其女の顔が彼には頗るもの優しげに見えた。彼は我知らず又サニンを羨んだ。が、續いて、あの田舎娘に對するサニンの振舞はどうしても悖徳な行爲として見るべきものである、などといふ考も起つて来た。

——私も氣がつきませんでした。と彼は白ばくれて云つた。

リヤザンツエヴは其調子には氣もつかず、チュツチュツと舌打して馬を急がした。が暫く間を置いて、彼は不確に又相談をかけるやうに再び云つた。

——別嬪ビエフですな？ どうですか？……私はあの女を知てゐます……あれは老爺の孫娘ですよ。

ユリイは黙つてゐた。彼れの妄念は俄に消失せて、今はサニンが不徳な又氣怪な人物であるといふ事をば確認したのである。

リヤザンツエヴは大袈裟な珍妙な身振りをして、婉曲な物言ひで云ひ出した。

——怪しからん！……何たる晩でせう！……私は緊縛シムツけられるやうな心持がします……ねえ、貴兄、御一緒に掛けて見ちやどうでせう？ え、？……

ユリイには一寸解せなかつた。

——そこにや別嬪がゐますよ……如何です？え、と、リヤザンツエヴは猥な笑ひ方をしながら續けて云つた。

ユリイの頬はサツと赭くなつた。動物的の肉感がゾツと身内に浸徹つて、猥雑な影像が熱した彼れの脳中に現れた。が、強ひて自分の心を制しながら、彼は素氣なく云つた。

——いや、歸りませう。で、彼は又意地悪く云ひ足した。

——リヤリヤが我々を待つてゐます。

リヤザンツエヴは急に小さくなつて、身を縮めて閉口した。

——いや、全く……それに……實際、歸るべき時分でもありませんよ……と、彼はそゝくさ呟いた。

ユリイはやり込めたさうに齒をくひしばつた。そして白い短衣を着た幅の廣い脊中を睨みつけながら云つた。

——一體私にはさうした Adventures の趣味がないのです。

——さう……ハ、ハ……と、リヤザンツエヴは卑怯な同情のない笑方をしたが、やつと黙つて了つた。

——ヘン……人を馬鹿にしてゐる。と、彼は思つた。

家へつくまで、二人は黙り合つた。二人には道路が盡きないものゝやうに思はれた。

——君は歸るのですか？ と、相手の顔を見ずに、ユリイが訊いた。

——いや……いや、患者が一人あるのです……さう……と、遅いですが、どうでせう？ と、リヤザンツエヴは四度路に答へた。

ユリイは輕馬車から降りたが、銃も獲物も取りたくはなかつた。リヤザンツエヴに屬した物は何もかもたまらなく不快であつた。と、リヤザンツエヴが云つた。

——銃は？

ユリイは心ならずも顧返つて、いや／＼銃器と獲物とを受取ると、不器用に握手して家へ這入つた。リヤザンツエヴは一寸の間輕馬車を走らせると、忽ち唯ある横丁へスルリと折れたが、轍の音は盤石の上をば反對の方面へガラガラと響いて消えた。ユリイは忌はしさうに又窺に羨ましさうに其音をきゝすましてゐた。

——何といふ俗物だらう？ と、彼は呟いた。そしてリヤリヤを不慙に思つた。

十四

持還つた物を家の中へ搬び入れて了ふと、ユリイはフラリと石階の上へ出た。庭は深淵のやうに暗かつた。そして其影の上にはキラキラと星の散らばつた空が一種異様に見えた。

リヤリヤは石階の石の上へ腰かけてゐた。彼女の輕快な又物思はしげな小さい影法師が暗闇のうちにボンヤリ浮上つてゐた。

——ユラさんなの。と彼女は云つた。

——私だ。と、ユリイは答へて、靜かに石階を下り、妹の傍へ腰かけた。リヤリヤは兄の肩の上へ優しく自分の頭を寄せた。と、爽やかな暖い髪の薫がユリイの顔を掠めた。ユリイは快さと不安との錯雜つた心持をしながら其鋭い女の香を嗅いだ。

——獵はあつて？ と、リヤリヤは愛くるしく訊いた。それから一寸間を置いて、彼女は優しい聲で云ひそへた。アナトリー・ハヴロギツチさんはどこにゐらつしやるの？……妾は貴兄方のお歸りになつたのをきいてゐましたわ。

——「お前のアナトリー・ハヴロギツチといふ男は下等な奴だよ。」と忽ち奮然として、ユリイはさう答へたかつたのではあるが、

——私はよく知らない……患者のところへでも廻つたのだよ……と、心ならずも彼はさう答へたゞけで満足した。

——患者のところへ……と彼女は上の空で答へて、ジツと星を見つめながら押黙つた。

彼女はリヤザンツエヴが彼女に會ひに來なかつた事を哀しくは思はなかつた。反對に彼女はたつた一人であつたのである。許嫁の面前なぞにゐては、彼女の心にも又彼女の若々しい肉體にも漲つた、かくまで貴重なる。かくまで神祕的なる又かくまで親愛なる感想に耽る事は思ひもよらなかつたに違ひない。そして其感想は、彼女が過去の生活を終つて、新生涯に——リヤリヤ自身でさへ別人になつたやうな氣がするほど新しい生涯に——入らうとする際の、かの願はしく

も避け難くも亦混亂した危機をば語るものであつた。

平生コロコロ笑つてばかりゐて、あれほど陽氣であつたりリヤリヤが、急にかう押黙つて了つて、いかにも物思はしげにしてゐるのを見ると、それがユリイには不思議でたまらなかつた。で、自分自身もまた遺瀨なくてイライラしてゐた矢先なので、ユリイには一切の物が悲しく冷たい色に見えた。リヤリヤも庭園も遠く壯麗な星空も、すべて慘として物疊げに見えた。そして妹の口もきかぬ佗しさうな物思ひの底には力強い充實した生が睡つてゐる事や、又遙かなる空際には廣大無邊な活力が沸騰してゐる事や、又暗い庭園が其土の中へ生氣ある汁液を吸上げ汲上げしてゐる事などをば、ユリイは一向に心づかなかつた……その上又平和なリヤリヤの胸中には、或幸福が——一舉止每一感觸毎に、若しや其幻影をば破りはせぬか、若しや長閑な其戀の旋律をば、たえず心頭に響いて來る、星空のやうに燦らかな、夜の園のやうに神祕な又人を唆かす音楽をば、沈黙させて了ひはせぬかと、窃に彼女の懼れてゐるほどに完全無缺な幸福が——匿れてゐようとは、尙更彼は氣がつかかなかつた。

——リヤリヤ……お前はね、アナトリー、バヴロギツチを非常に愛してゐるのかい？ と、ユリイは恰も彼女の夢を醒まさせる事を懼るゝものゝやうに優しく訊いて見た。

——どうしてそんな事がきかれるのだらう？ と、女はハツキリさう考へたのではないけれども、たゞそんな風に感じたのである。が、彼女は兄が今自分には一番密接な事すなはち戀人の噂をしてくれたのが有難くて、犇と兄の胸に縋りつきながら「非常だわ！」と、微かな聲で——

ユリイには聞えたといふよりは寧ろ聞えたのか知らんと思はるゝ位の低い聲で答へた。で、彼女は浮んで来る嬉し涙をば努めて微笑に紛らさうとした。

ところがユリイは彼女の聲のうちには或不安な響がしてゐるやうに思つた。そしてリヤリヤに對して一入の憐れさを、又リヤザンツエヴに對しては一入の憎しみを覺えた。

——ふうむ、なぜ？ と、彼は心にもなく訊いた、自分の問を自分で懼れながら。

リヤリヤは呆れて彼を見たが、兄の顔がよく分らなかつたので、小聲で笑ひ出した。

——いやねえ？……なぜだなんて？……いろんな事だわ……兄さんは戀をなさつた事がお有りなさらぬの？……あの人はほんとに良い方よ、ほんとに正直な、ほんとに正しい……

「……ほんとに美しい、ほんとに丈夫な……」と、彼女は附加へたかつたのだけれど、暗闇で涙が零れるほど眞紅になつて云淀んだ。

——お前はあの男がよく分つてゐるのかい？ と、ユリイは訊いた。

「いや、こんな事を云ふぢやなかつたつけ」と、彼はすぐイライラして惱ましげに考へた。あの男の事をこの女に云つたつて何の役に立たう？……妹があゝの男を地上で一番いゝ人間と信じてゐるのは分りきつた話だ。

——アナトリイさんは妾にや何にもお匿しなさらぬ事よ。と、リヤリヤはビクビクしながら勝誇るやうに答へた。

——それは確かかね？

ユリイはもう我慢がしきれなくなつたので、意地悪さうに薄笑をしながらさう云つた。

リヤリヤの聲のうちには不安らしい困惑した響があつた。

——確だわ。なぜそんな事を仰しやるの？……

——何でもないよ……たゞさう云つて見ただけさ……と、ユリイはドギマギして答へた。

リヤリヤは押黙つた。彼女が何を考へてゐるのか、ユリイには見當がつかなかつた。

——貴兄は何か御存じなんでせう？……あの人の事について……と、彼女は不意と云つた

が、其もの哀しげな常ならぬ聲の調子がユリイを顛動させたのである。

——いや……私はさうきいて見たゞけなんだ……アナトリナ・バヴロギツチの事なんぞ私

が何を知つてゐるものかね。

——さうぢやない、さうぢやない……貴兄はそんな風に仰しやらなかつた事よ。と、リヤリ

ヤは凜とした聲で云ひがかつた。

——私はたゞね、かう云ひたかつたのさ……概してね……我々男子といふものは……甚だ腐敗してゐるのだよ……すべてね。と、ユリイは消え入るやうな思ひで、四度路に答へた。リヤリヤは又暫く押黙つたが、やがて氣をかへてカラカラと笑ひ出した。

——いゝわよ、知つてゐる事よ……

が、この妹の笑聲は全く其處を得ぬやうにユリイには思はれたのである。

——それはお前が思つてゐるほど手輕な事でもないよ……と、彼は意地わるく向ふへ廻つて皮

肉に云つた。お前にはそれがわからないのだ……世の中の醜怪な事はお前などには想像もつきはしまい……それが分るにはお前はあんまり純潔すぎる……

——あら厭だ。と、リヤリヤは褒めちぎられたやうな気がしたのでニッコリしたが、やがて兄の膝へ手を置きながら、眞顔になつて云ひはじめた。貴兄は妾がさういふ問題について考へてゐないと思つてらしやるの？ 非常に考へてゐるのよ。その事を考へると、妾はいつでも悲しくなるわ。なぜ妾達のやうな女は自分達の名譽だとか自分達の純潔だとかに捉はれてゐるんでせう。なぜ妾達は一步踏出す事を……いは……墮落する事を恐がつてゐるんでせう。男達は女を誘惑する事をば何か偉い事でもするやうに思つてゐるのにねえ……本當に間違つてゐるわ……さうぢやありませんか、

——さう。と、ユリイは心苦しう答へた。

彼は自分自身の事を憶出して耻ぢた。けれども彼れユリイにあつては自づから他の男子等とは選を異にしてゐるやうにも亦考へられたのである。

——それは世の中で最も間違つた事の一つだよ……若し我々のうちの誰かに、女郎……と彼は云ひたかつたのだが、それはやめて……^{ユリイ} cocotte (嬌治の女) と結婚する氣があるかどうか訊いて見たら、誰だつて否といふだらう……が、實際はいかなる男でも ^{ユリイ} cocotte 以上に値打ちする者があるか？……^{ユリイ} cocotte は少くともパンの爲に身を賣るのだが、男は單に放逸の爲に放逸に耽るのだ。そして常に最も耻づべき方法でね……

リヤリヤは黙つてゐた。蝙蝠が一つ、人知れず飛んで来て、バサバサと一度二度、物怯ぢするやうに壁へ打突かつたが、やがてスルリと石階の外へ迂り出た。ユリイは夜の生のさまゝ不思議なる物音をきいた。で、再び喋りはじめたが、われとわが聲音に追立てられて、次第々々にイラついて行つた。

——更に最もよくないのは、男達が其事を承知してゐて口へ出さぬばかりでなく、其上に混雜つた悲喜雜劇を演ずる一事だ……彼等は神や人間を欺いて、結婚をするのだ……そしてそれがいつでも純潔極まる清淨無垢な少女なんだ。と、彼はカルサゴナを想出して、未知の男に對する嫉妬さへ起しながら云ひ足した。さういふ少女が放逸極まる陋劣極まる、又時としては病毒のある男の手に落ちるのだ……亡くなつたセメノヴがいつだつたか私に云つた事がある、女が純潔であればあるほど、其女を所有する男はいよゝ／＼卑猥なものだなどとね……而もそれは眞理だ！

——眞理ですつて？ と、リヤリヤは異様な聲で訊いた。

——さう、私は眞理だと信ずる。と、ユリイは苦笑した。

——妾にや分らないわ、と、リヤリヤは口早に云つたが、其聲のうちには溜涙が顫へてゐた。ユリイにはそれがよくきこえなかつた。

——何？

——トリアさんも皆なと同じでせうか？ と、リヤリヤは始めて兄の前でリヤザンツエヴを愛稱で呼びながら口籠つたが、もうそれ以上には涙を抑へきれなくなつた。

——さう、勿論、同じだわねえ。と、彼女は泣きながら叫んだ。

——リヤリヤ・リヤリチカ……どうしたんだよ……私はさういふ心算ぢやないのだ……いゝ子だから、おやめ……泣かんでさ……と、ユリイは取止めのない言葉を繰返し、少女の濡れた指先を接吻した。

——いゝえ……私は知つてゐます……それは眞理です……と、リヤリヤは涙に咽びながら吃つた。

彼女はこの問題について既に考へてゐたとは云つたけれども、事實、今迄リヤザンツエヴの本當の生活をば想像して見た事はなかつたのである。勿論、自分は彼れの戀した初めての女でない事は、彼女も知つてゐた、又初めての女でないといふ事の意味もわかつてゐた。けれども彼女は其事をば極く表面的にのみ考へてゐたのである。

彼女は自分が彼を愛し又彼に愛されてゐると感じてゐた。そして彼女にとっては愛し愛される事が緊要で、其他の事は一向大切ではなかつたのである。ところが彼女の兄が今誹謗と侮蔑に充ちた鋭い調子で男の事を話した爲に、彼女の面前に深淵が一つ口を開いて、彼女の幸福が影も形もなく其中へ消え失せて了つたやうに思はれた。彼女はもうリヤザンツエヴを愛する事が出来なくなつた。

ユリイは自分自身泣き出したいのをジツとおし怵へて、彼女を慰め、彼女に接吻し、彼女の髪を撫でてやつた。けれども彼女は烈しく泣いて、やまなかつた。

——あゝ、神様、神様……と、彼女は幼兒のやうに引泣いた。そして暗闇の中に彼女はいとど小さく又いとど憐れつぽく見えた。又彼女の涙はいかにも悲しげなので、ユリイも深い同情を禁じ得なかつた。

蒼くなつて、ドギマギして、彼は家の中へ駆込むと、扉へ顛顛を打突けながら、水を一杯持つて來たが、其水の半分は地面や手の上へ零して了つた。

——リヤリチカ、おやめつてば……そんなに泣くものぢやないよ……どうしたといふのだい？……アナトリイ・バヴロギツチはね、恐らく他の男よりやいゝ人間だよ……リヤリヤ……と、彼は手のつけやうがなくて、さう繰返した。

——何でムいます？と、仲働きの女が驚いて扉口へ現れてきいた。どうなすつたのでムいます、お嬢様。

リヤリヤは石階の欄干へ靠れて、泣きつづけながら立上つたが、よろ／＼と部屋の方へ行つた。

——お嬢様、お嬢様、一體まアどうなさつたのでムいます？……且那樣をお呼び申しませうか？……ユリイ・ニコライエギツチ様！……

ニコライ・エゴロギツチは緩やかな正格な歩調で書齋から出て來たが、リヤリヤを見ると、吃驚して扉の前で立停まつた。

——何事ぢや？

——なアに……つまらん事です。と、ユリイは強ひて微笑みながら答へた。リヤザンツエツの噂をしてたのです……愚にもつかん事です。

ニコライ・エゴロピツチはジツと彼を見つめたが、其昔風の紳士顔には激昂した表情が現れた。——怪しからん事ぢや！と、彼は嚴然と肩を聳かしながら云つた。そして踵の上でクルリと身を轉じて、そのまゝ立去つた。

ユリイは眞紅になつて、何か暴言を吐かうとしたが、云ひやうのない耻しさと怖しさとが込上つて來たので、口を噤んだ。父に對する怨恨、リヤリヤに對する同情又自分自身に對する心苦ししい侮蔑などが、ぶる／＼と彼を痙攣させた。彼は石階へ立還つて段々を降り、庭園の方へ行つた。小さな蛙が足の下で悲しげに鳴きながら、團栗の踏潰されるやうな音をさせた。ユリイは身震ひして傍へ跳びのいた。彼は濕つた草の上へ長い間足を擦付けてゐた。と、不快な悪寒がゾツと脊筋を通りすぎた。

足の下の心持のわるい感じが病的に彼れの顔を蹙めさせた。凡ゆる物が彼には忌ましい形に見えた。彼は暗闇の中で手探りしながら腰掛を一つ見つけ出して、それへ腰かけ、露みのない恨めしげな眼光で庭園を凝視したが、散亂した闇黒の斑點を除いては何物も見えなかつた。彼は嘔きたいやうな重苦しい氣分になつた。

彼れの眼は、踏潰された蛙が黒い草の上に横たはつてゐる。恐らくもう四苦八苦のうち息の絶えた、其地點を見やつた。獨立した特殊な生が一つそこに終つてゐた。而も自然のうちには何

の變化もないのである。目にとまるほどの事は何もないのである。

と、混雜つたいろ／＼な道筋を辿つて、或考が惱ましい、常ならぬ考が、不意とユリイの心に浮んだ。彼れの生命を働かす一切の物、或物を愛し、或物を憎み、又或物を排斥したり、或物を受入れたりする不可思議な動力たる、其一切の物は——即ち善と惡との觀念は——たゞひとり彼れの人格の周圍に漂ひまはるふわ／＼した霧にすぎなかつた莫大な總額を有する此世界から見る時は、凡ゆる彼れの悩みに充ちた深い／＼閱歴も、此小動物の苦悶同様、殆ど存在しないものであつた。又彼以外に於ける彼れの苦惱や、彼れの理解や、彼の善惡は他人にとつて非常に緊要なものである事を想像すると、彼は公然愚かな方法で自分自身と宇宙との間へ混雜つた條網を編んでゐた始末であつた。そして死の刹那は此一切の條網をば一撃の下に破碎して、いかなる報酬もなしに、又いかなる結果もなしに、彼を唯一人取残すには充分であつた。

彼は又セメノヅを憶出した。あれほど深く彼れユリイと及び彼に類した數萬の人々をば苦しめた、秘密な一切の觀念や標的を前にして、かの死せる大學生が示した、平然たる態度を憶出した。と、歡樂に對する、美女に對する、月や星や鶯の啼音に對する、かの天真爛漫な嘆美の記憶が、セメノヅとの哀しい物語が翌日まで彼に不快を覚えさせた其記憶が、忽ちまざ／＼と彼れの目の前へ浮び出たのである。

其時、彼は、どうしてもセメノヅが深刻なる思想や高遠なる概念をば殊更に排斥して、舟遊びだとか、少女の美しい肉體だとかいふ、さういふ下らぬ事に持つて行つて、重大なる意義などを

附し得たものか、一向に合點がゆかなかつたが、今、ユリイは容易く了解したのである。それは全く其通りであつた。何となれば其一切の下らぬ事こそ、とりもなほさず人生をば——經驗や歡樂に充ち満ちた眞實の人生をば構成してゐたものであつた。そして一切の高遠なる概念などといふものは、たゞ空しい思想や言語の組成體にすぎないもので、生と死との奥深い秘密を貫くには、何等の權威をも有してゐなかつたのである。彼等は成程重々しく且つ確定的には見えたけれども、彼等の背後には、少からず眞實な、又少からず意義のある、其次の概念が生じて來なければならなかつた。

此推論は端なく善惡の觀念を生じて、ユリイには殆どそれが自然であるとは思はれなかつた。そして彼れの頭は混亂して全くわからなくなつた。彼れの前には大いなる空虚が打開いた。と、一瞬の間に自由と光明との鋭い感覺が彼れの腦髓を輝かした。それは我々が夢睡中に自分の思ふ方向へ思ふまゝに飛んでゆかれるのと同じやうな感覺であつた。ユリイは恐くなつた。で、一生懸命になつて、平生のライフの觀念を掻集めた。と、恐しい感覺は消え失せた。そして一切の物が再び彼れの周圍に淡黒く蝟集して來たのである。

ユリイは、眞の人生は人間にとつて自然なことをば悉く實現するうちにある事や、従つてたゞ歡樂によつてのみ生存すべきものである事や、又最も鋭い生の感觸たる性慾を出來得る限り満足するのが目的であるから、たとへ最低級の例にもせよ、其見解からすれば、リヤザンツエヴは彼よりも遙に論理的である事などをば、殆ど是認しなければならぬほどになつたけれども、此考を

受入れると、彼は又、放逸と純潔との區別はたゞ地に鮮かな若草を蔽ふ枯死せる木の葉にすぎなくなる事や、従つてリヤリヤやカルサピナのやうな最も詩的な最も貞操な少女が肉慾的歡樂の奔流へ自由に身を投ずる權利を有してゐた事をも、併せて是認しなければならなかつた。ユリイは此考の前に立つて逡巡した。そして此考を卑しくもあり汚れてもゐると思つた。で、そんな事を考へたのが恐しくなつて、彼はいつもの重々しい嚴然たる言葉で此考を頭からも胸からも驅逐したのである。

——さうだ。と、彼はキラキラする星空を瞻仰みおげながら思つた。人生は感覺だ。さうに違ひない。けれども人間は野獸ぢやない……人間は五慾を統御してそれを善の方へ向はしむべきである……「が、あの星の上に神が存在するものかどうか」と、ユリイは不意と憶出した。搔亂された心苦しい敬虔の情が彼を地上に釘づけとした。彼は傍目も振らず大熊星座の尾のうちなる煌々たる星を見つめながら、瓜畑の百姓クズマが此大星座をば「箱車トシベロオ」と呼んだ事などを憶出した。

が、どこからともなく浮び出て來た此様な記憶は、彼れの思想には何の補足にもならなかつた。そして彼を煩はす種にさへなつた。彼れの眼は輝く空から眞暗な庭上に落ちた。ユリイは再び物思ひに沈んだのである。

——若し人が、内氣な、併し麗しい、人の心をときめかす、かの春の初花のやうな、女性の美を、此世界から奪はれたら、いかなる物が神聖な物として人間界には残るであらう？

彼は心の中に、春の花のやうに美しい清らかな乙女の群集が、新鮮な草の上に、花ざかりの木蔭に、あか／＼と目をうけて坐つてゐる姿をば描いて見た。眞白な胸、丸々とした肩、なよやかな手、それから細そりした腰や、耻しげに屈曲した膝などが、チラチラと彼れの目の前に動いた。甘ツたるい歡喜の情が炎ゆるばかりに、込上つて来て、彼は氣が遠くなつた。

ユリイはそろ／＼と手を額へやつて、我に還つた。

——俺は神経を使ひすぎたのだ。睡なけりやいかん。

肉慾的の幻影がいつまでも目先へチラついて、ユリイは胸苦しめて自分が不満足で、イライラしながら家の中へ這入つた。彼れの舉動はそ／＼と昂奮してゐた。

で、横にはなつたが、いくら睡らうとしても睡れないので、彼はリヤザンツエツヤリヤリヤの事をまじ／＼と考へてゐた。

——リヤザンツエツが一圖にリヤリヤばかり愛さない事をば、なぜ俺はこれほどまでに憤るのか知らん？

この間に對しては彼は何の答をも得なかつた。けれどもカルサギナノ愛嬌ぶかい優しげな姿が炎ゆるやうな腦中に現れたのである。そしていくら其情を抑へようとしても駄目であつた。と、彼は不意に、なぜ此女が純潔で貞操でなければならぬ筈であるか、といふ事に氣がついたのである。

——俺はあの女を戀してゐるのだ。と、ユリイは初めて考へた。そしてさう考へると、何もかも

一切忘れて、涙が出るほど嬉しくなつた……が、次の瞬間には、ユリイは苦笑しながら自分の心へかう訊いたのである。「さうすると、俺はあの女の前になぜいろ／＼な他の女を愛したのか？……俺があの女の存在してゐる事をば少しも知らなかつたのは事實だ。けれどもリヤザンツエツも尙それ以上にリヤリヤの存在を知らなかつたのだ。我々は二人共、現在所有したく思つてゐる女をば、「眞正」の、缺くべからざる、唯一人の女だと思つてゐたのだ……」

我々は自ら瞞いてゐたのだ。恐らく今も自ら瞞いてゐるのだ。然る時は、次の二つの事のうち、どちらかを選択しなければならなくなる。永遠に貞操を守るか、或は絶対に自由を許すか——無論女にも同様に——情慾をも戀をも樂しむ事を許すか……が、併しながら——と、ユリイは焦きこんで一瞬間を置き——リヤザンツエツがリヤリヤの前にいるんな女を愛した事は非難すべきでないとしても、彼が現在同時にさまざまの女を弄びつゞけてゐるのはどうしたのだ……俺はそんな事をしない……

ユリイは自分を誇るべきであると感じた。又純潔であると感じた。が、それはたゞ束の間であつた。で、次の瞬間に、彼が目を浴びてなよやかな乙女の群を幻影に見た事を憶出すと……彼は自分ながらウンザリした。そして彼れの心は再び混沌として分らなくなつた。右側に臥たのがよくないやうな氣がしたので、彼はゴソゴソ寢返りを打つた。

——要するに、と、彼は考へた。俺の知つた女は、いかなる女でも、一生俺を満足させる事は出来ないに違ひない……だから、いつも俺が考へるとほりだ。眞の戀愛は實現すべからざるも

のである。又それを夢想するのは明らかに愚である……。

ユリイは又左側に臥たのがよくないやうな気がした。で、ピツシヨリ汗をかいた暑苦しい夜着の中でモジモジ動きながら、再び寝返りを打った、彼は頭が痛くなつた。

——貞操は一の理想だ。若しそれが實現されてゐたら、人類はこの昔に絶滅してゐたであらう。と、こんな考が思ひもよらず腦中に浮上つた。下らない……それが下らないとすれば……：人生はすべて下らないのだ。と、彼は絶叫した。そして炎ゆるやうな思ひをしながら、齒を食ひしげると、黄金の輪がいくつもくく彼の目の前にクルクルと廻轉した。

で、朝までゴコチない不快な臥方で横はりつゝ、底深い絶望に心を刻まれながら、ユリイは石のやうな重苦しい撞着した思想の間に介つて身を跪いてゐた。

それから身を脱する爲に、彼はたうとう、自分は悪人で、淫亂で、無頼で、利己主義者で、又自分の疑問は要するに匿れたる肉慾にすぎないのだ、と、自ら承服しようとした。けれどもそれは却つてより以上に彼の心を壓迫した。やがて彼は次のやうな單純な問によつて此懊惱の念から脱るゝ事が出来たのである。

——が、何だつて俺はこんなに苦しむだらう？……。

そしていかなる穿鑿の方法も悉く嫌になつて、ユリイはぐツたり疲れきつて睡つた。

十五

リヤリヤは枕に顔を埋めて泣きながら睡入つた。朝になつて、彼女は起上ると、頭が重く、眼も脹れてゐた。

第一番に彼女はかう考へた、泣いてはいけない、正午に来る筈になつてゐるリヤザンツエヴが自分の醜い泣面や赤くなつた眼を見て、不快な感じを起すといけないから。が、ふと何もかもお終ひになつて了つたのだといふ事を憶出すと、彼女はたまらなく悲しくなつて、涙を抑へる事が出来なくなつた。

——なんて穢らはしい事だらう！ と、涙に咽びながら、リヤリヤは呟いた。なぜなのかしら？……なぜなのかしら？……と、彼女は繰返したが、とこしへに消失せて再び返らぬ彼女の戀の、底知れぬ悲嘆が、犇々と彼女の心に纏ひついた。

リヤザンツエヴがいつもく造作もなく彼女を欺きおふせた事を思ふと、それが彼女には厭でたまらなかつた。

——あの人がばかりぢやない、皆な嘘をついてるのだ。と、リヤリヤは不確ながら考へた。皆な皆な、妾達の結婚を悦んでゐるやうに見せかけて、あの人の事をばい、人だとか正しい人だとか云つてゐるんだ……いや、嘘をついてるのではないとしても、それが當前だと思つてゐるのだ……なんて嫌な事だらう。

日常の周圍が今彼女には厭はしくなつた。其周圍は奸曲な卑しい人達で造上げられてゐるやうに彼女には思はれたからである。彼女は窓硝子に額をつけて眼に溢るゝ涙を通して庭を眺めた。

戸外は薄暗かつた。そして細かい雨が頻りに降つてゐた。水の点滴が板硝子に當つて、忙しい音を立てた。庭と彼女の眸との間に覆面のやうな物が遮つてゐるのは、雨の点滴か、彼女の涙か、リヤリヤには見分けがつかなかつた。木々は悲しげに濡れに濡れて、其蒼白い葉を一様に傾けてゐた。又其幹は雨の中に黒く浮上つて草は泥土に横たはつてゐた。

リヤリヤは自分の一生をば不仕合であると考へた。彼女の過去は暗かつた。彼女の未來は希望がなかつた……。

小間使の婢が来て、彼女にお茶を召上れと云つたのだが、女が何を云つたものか、リヤリヤには一寸わからなかつた。食堂では、父に話しかけられるたび彼女はハツと耻しかつた。父の態度や父の言葉が何やら異様な同情を含んでゐるやうに彼女には思はれたのである。して見ると、愛人が忌まはしくも彼女を欺いた事は、もう誰も彼も知つてゐるに違ひなかつた。一語一句、彼女は此同情の言葉に傷けられた。で、彼女はそゝくさ立上つて自分の部屋へ還つた。部屋へ還るとまた窓際に腰をかけて、荒寥たる灰色の庭の面にヒタと眼を据ゑながら、彼女は再び物思ひに耽つた。

——なぜあの人は嘘をついたのだらう？……あの人は妾を愛してゐないのかしら？……いや、トリアさんは妾を愛してゐる——妾も亦あの人を愛してゐる……すると、どういふわけなのだらう？あゝ、さうだ、あの人は妾を瞞したのだ。妾の前にあの人はいろんな他の女を愛したのだ……性の知れぬ陋しい女を愛したのだ……そして其女達はあの人を愛したらうか？……

……妾のやうに？……と、リヤリヤは炎ゆるやうな生無垢な好奇心に驅られて自分の心に訊いて見た。なんて妾は下らないんだらう！何の爲に今こんな事を考へるんだらう！あの人は妾を瞞したのだ。だから何もかもお終ひなのだ……神様！妾はなんて不幸なんでせう……いや、いや、これは妾にとつちや大變な事だ……あの人は妾を瞞したのだ……では、若しあの人が其事を白状したら？……いや、同じ事だ！……あの人は嘘をついたのだ……いやらし……妾の外の女を抱いたりして……きつと妾以上に抱いたに違ひない……あゝ、恐ろしい……なんて妾は不幸なんだらう！……

小徑の上を蛙が一つ

手足を伸してヒヨイヒヨイと……。

滑り易い小徑を横ぎつて惱ましげに跳ぶ灰色の小さな塊を見ると、リヤリヤは心の中に口誦んだ。と、蛙が草の中へ隠れて了つたので、彼女は再び悲しくなつた。

——さうだわ、妾は不幸だわ。そして何もかもお終ひになつたのだわ。妾にとつちやあんなに大變な事だつただけれど……あの人にとつちや古くさい定りきつた事だつただわ……だから、あの人はいつも昔しの事を話したがらなかつたのだわ。だから、あの人の顔はいつもかう何か考事をしてるやうな變な面色をしてたんだわ……「私はそんな事は知つてるのだ。何でも

知つてるのだ。お前が何を感じるか、どういふ事が起るか、何でも知つてるのだ。」と、あの人はきつとさう思つてゐたのだわ……それなのに妾は……あゝ、耻しい、あゝ、いやらしい……もう、もう、決して、妾は誰れも愛さない……

窓硝子にピツタリ顎を押當て、涙に曇つた眼で靜に動く雲の姿を偷視ながら、彼女はますます泣いた。

——が、トリアさんはけふお午にお出でになるのだ。と、彼女はふと憶出して、震へながらやつと立上つた。妾はあの人に何て云はう？　こんな時に何て云つたらいいものかしら？

リヤリヤは口を開いた。そして心配さうな眼光で壁を見つめながら、

——ユリイさんに訊いて見なくちやならない！　愛するく、ユリイさん！　兄さんは本當に正しい善い人だわ。と、彼女は考へた。そして嬉し涙にかき暮れた。やがて例によつて思立つと一刻も猶豫せずに、彼女はユリイの部屋へ赴いた。

が、其部屋ではシヤフロヴが何やら兄と議論してゐた。彼女は這入りかねて敷居の上に立止つた。

——今日は。と、物思はしげな様子で、彼女は云つた。

——今日は。と、シヤフロヴは彼女に挨拶した。来て下さい、リュドミラ・ニコライエヴナさん……貴女に是非助けて戴かなければならぬやうな事件なんです。

リヤリヤはどうしていいか分らないながらも柔順に卓子の傍に腰をかけた。

そして累積つた紅と緑の小冊子の間へ何の氣なしに手をやつた。

——かういふわけなんです。と、シヤフロヴは恰も恐ろしく錯雜つた問題でも説明するものやうに、クルリと彼女の方へ向き直つて云ひ出した。クルスクの仲間が非常に困難な状態にあるのです……是非それを救済しなけりやならんのですが……それについて音樂會を一つ組織しようといふのです。いかゞでせう？

この「いかゞでせう」といふ、シヤフロヴの好みの文句をきくと、リヤリヤは此男が兄を訪問した目的に氣がついた。そこで彼女は信用が出来さうに又希望がありさうに兄を見やつた。

——いけない事なんぞありませんよ……非常に結構な事ですわ……と、彼女は何氣なく答へたが、どうしてユリイが彼女の眼光を避けるのか、それが不思議でならなかつた。

彼れの面前でリヤリヤが涙を濺いだ後、さまざまの考に徹宵悩まされ明かした後、ユリイはリヤリヤに物を云ふさへ億劫なほど疲れきつてゐた。彼は妹が何か相談しに来るであらうとは豫期してゐたのだが、さて満足な解決を發見する事はむづかしかつた。彼は自分自身の言葉を撤回して、再リヤリヤをリヤザンツエヴの方へ推してやるわけにもゆかなければ又心配のない小鳥のやうな彼女の無垢な幸福へ持つ行つて、最後の鐵鎚を振ふ事も尙更出来なかつた。

——我々はかう決定したのでです。と、シヤフロヴは恰も自分の論ずる問題がだんく錯雜つて來たかのやうに少女の傍へ擦寄つて云ひ續けた。我々はリダサニナさんとジナ・カルサギナさんとを御招待して、唱つて戴かうと思ふのです……最初はお一人づつ獨唱で、それから次に合唱

で……お一人は最低コントラルト女聲音で、お一人は最高ソプラノ女聲音ですな、これは非常に佳いでせう……そこで私がギオロンを弾きます……それからザルデイン君に唱つて戴くのです、タナロヴ君の伴奏でな……

——だけど、あの士官さん達はさういふ音楽會を御賛成なさいますかしら？ と、リヤリヤは例の如く何氣なく訊いた。

——え、無論ですとも！と、シヤフロヴは双手を振上げて絶叫した。リダ・サニナさんさへ御賛成なされば、あのお二人は必ずリダさんに跟いて來られますよ……又、ザルデイン君は、御自分がお唱ひになるところなら、いかなる場所でも喜んでお唱ひなさいますよ……そして大勢他の士官達を曳ばつて來て下さいます。つまり我々に素晴らしい収入を得させて下さるわけですよ……

——カルサギナさんも御招待しなけりやなりませんまい。と、リヤリヤは何か訊きたげに兄を見やりながら悩ましさうに云つたが……よもや忘れてお了ひなさる筈はない。と、心の中に思つた。こんな下らぬ音楽會の事なんぞどうして考へてお出でなさらう？ 妾がこんなに……

——私は今申上げました。と、シヤフロヴは驚いた。

——あ、さうでしたね。と、リヤリヤは蒼い顔をニッコリさせて云つた。

さう、リダ・サニナさんでしたよ……いや、それも貴兄は仰しやいましたわねえ……

——さうです、さうです。と、シヤフロヴは頷いた。もつと誰か御招待いたしませうか？

かゞでせう？

——妾には分りませんわ。と、リヤリヤは漸と云つた。妾は頭が痛みますの……

ユリイはチラリと妹の方を見やつたが、やがて不惑さのいやましたやうに、再び書物の上へ身を傾けた。彼には蒼白い顔をして巨きな眼を曇らした彼女が、いかにも弱々しげに又いかにも悲しさうに見えた。

——あ、なぜ俺は、妹にあんな事を云つたのだ！ と、彼は考へた。あれは俺自身が苦しむほど、又他の人々がそれに難ませらるゝほど、曖昧極まる問題なんだもの……妹には、あの小さな心には、どうする事が出來よう！……なぜ俺はあんな事を云つたものだらう！……

彼は思はず髪を撚り取りさうになつた。

——お嬢様。と、小間使の婢が戸口で呼んだ。アナトリー・パヴロギツチ様がお出でになりました……

ユリイはギョツとしてリヤリヤの方へ顧向いた。と、情なげな妹の眼にヒタと出會つたので、度を失ひながら、シヤフロヴへ話しかけた。

——君はシヤルリエブレドロオを讀みましたかね？

——私はツボグさんとカルサギナさんと一緒に讀みました。あれは面白いですな。

——さやう……あの人はもう歸られたのですか？

——え、。